

すが、かく華嚴・涅槃系も、般若系も、一つに統一して天台大師が法華宗を建てられたが、後に唐の時代に到りまして、又法相宗と華嚴宗とが更に立宗した、それから律宗、淨土宗、禪宗、眞言宗、これだけが唐の時代に出来上った、法相宗といふ宗門は、天台宗の法華を方便だといつた、法華は方便で、二乗は決して佛にならない、二乗が佛になるなどといふことは、とんでもないことだ、二乗は佛にならない、それから「壽量品」の佛なんてものもこれは、矢張り方便だ、「壽量品」の佛も方便だといふやうなことを説いたのが法相宗なのであります。

それから華嚴宗といふのは、これも矢張り「壽量品」の佛は衆生に應じた應身の方を説いたものである、又その常住のところは法身を説いた、現はれて居るところは應身である、肝心の報身を説いてない、肝心の佛の智慧と功德の身は「華嚴經」が説いて居る、「壽量品」は單なる眞理の身、でなければ衆生に應じた方便の身を説いたもので、本當の佛の智慧・功德を説いたものではない、といつて居ます、それから律宗、これは又、佛の身については「壽量品」などはあかさないうで、佛教徒の所作規律だけをいつた、ついで淨土宗・禪宗・眞言宗、斯うあるのですが、禪宗も眞言宗も律宗も、亦華嚴宗も、實は皆天台宗に影響されて、天台宗で説かれたことをばさまざまに取り入れ、自分のお經に都合のいゝやうな説に乗りかへたのです、澤山エライことを説いてあるのは、天台大師が「法華經」によつて説かれました事柄をば、さまざまにかざり立て、餘計なものにした、華嚴宗では天台が四教を説いたのに對して五教を説く、或は律宗では圓教を説いた、淨土宗でも淨穢不二を説くところは矢張天台の影響である、禪宗でも直指人心見性成佛といふが、其の見性成佛に天台の教義を澤山取り入れてある、從つて唐が亡びて宋になると法相宗はなくなつてしまつた、華嚴宗もなくなつてしまつた、全然でないが殆どなくなつてしまつた、また淨土宗もなくなつてしまつた、

後に残つたものは律宗と禪宗と眞言と天台しか残らない、眞言宗が又なくなつて喇嘛教になつた、これをば恰度日本の道元禪師がその頃宋に行かれて斯ういふことをいって居る、僧といふものは、宋には四種類ある、法師といふのは天台法華の教義を説くもので、つぎに禪師といふのは達磨大師の坐禪をするもの、それから律師といふのはこれは南山律師といふ人の戒律を傳へるもので、南山律師といふ人は矢張り天台の弟子です、それから外に瑜伽師といふのがある、此の瑜伽師といふのは不空三藏の眞言を傳へるものであつて、大體坊さんといへば、法師と禪師と律師と瑜伽師の四種である、學問は何をするかといふと結局天台法華の學問である、斯う宋の時代に向ふに行つた道元禪師が書いてゐます。道元禪師が書いて居るだけでなく、宋の時代の禪宗の人の書いたものでも、律宗の人でも、みんな其の學者は天台の學問をして居る事實におきまして、結局支那佛敎の最後は、天台法華の學問に歸してしまつて居るのであります。

此の宋の時代から後に元といふ時代になつた、元の時代は外國のあらゆる教を何でも持つて來たので、ベルシヤ教なども持つて來たし、基督教も持つて來たし、喇嘛教も持つて來た、明に至つて佛敎が又再興した、この明の時代に藕益大師といふ人があつたが、これは天台の學者で八宗を兼學し、法華を以て八宗を批判したのみならず、實行方面では禪と淨土とを收容して、一緒にしたしてしまつたので、少し悪いこともあります。

さういふやうに、印度の代表たる龍樹・天親の二菩薩が、法華を以て佛敎中の最上教義、最後の教義としたのみならず、此の「壽量品」の佛を以て眞の佛として居る、それから佛敎が支那で發達して行つた歴史を考へましても、いろいろ變つた説を唱へましたけれども、最後の歸着は終に法華に歸してしまつて居ます。

それから次にプリントに書いてありますのは、これは佛教の系統です、天台大師は陳・隋の人ですが、妙樂大師は唐の人です、天台大師・妙樂大師の系統に於いてはじめて法華の正系が示されて居るのであります、これに對して先刻申した法相宗、これは玄奘、慈恩の兩師で、全然反法華的思想であります、此の法相宗は後になくなつてしまひましたが、日本では法隆寺がさうです、法隆寺が法相宗の現在に於ける唯一の系統であります、ところが此の間、佛誕二千五百年紀念の祝賀會のお祭が、帝國ホテルで行はれました、その時、總理大臣の代理や、廣田外務大臣、松田文部大臣も出席し、ドイツ大使、シヤム公使等の外國使臣等も參列されました、そこで法相宗の法隆寺の佐伯管長が釋尊の像に甘茶を灌ける灌佛會をして法要を行ひました、その法要の時に何を讀んだかといふと、式の豫定の印刷物に、「無上甚深微妙の法は」といふ開經偈を讀んで、壽量品の自我偈を讀誦するとなつてゐるのに、佐伯管長は、開經偈を讀まずに、「南無妙法蓮華經」と唱へ出したのです、しかし、「ナア、、、ムウ、、、ミヤ、、、ウ」と諷誦的に唱へたのですから、それが『南無妙法蓮華經』であることに氣のついたものはきはめて少かつた、そしてそのつぎに「如來壽量品」を讀んだのです、法相宗が南無妙法蓮華經を唱へて、「如來壽量品」を讀んだといふことは、教義的にいふと大騒動です、法相宗といふものは、法華は方便で二乗は佛にならないものだ、人間は佛性のあるものもあるが、中にはないものもある、數からいふと佛性のない者の方が多い、さういふことを説いてあるのが法相宗の教義です、それは今の支那には殆どなくなつて日本にだけあります、その日本にある本家本元が、南無妙法蓮華經になつてしまつた、さういふことになつたわけです。

それから曇鸞・道綽・善導、これは淨土宗です、此の系統は日本の法然上人・親鸞聖人にかゝつて來るのですが、その一ばん發達した親鸞聖人は先刻申したやうに、後の久遠實成阿彌陀本願寺を建て、阿彌陀佛も久遠實成までもつて來なければ落つかない、それは、あの宗義では、本當に一切自分の命も心も全部さゝけて、任せつきりにしてしまふ純他力、一切佛にまかしてしまふ其の佛様は阿彌陀様だが、阿彌陀様のお經は三つある、三部經といつて觀無量壽經・大無量壽經・阿彌陀經・斯う三つあります、此の三つの何處を探しても、久遠實成の阿彌陀様なんてことはない、十劫正覺といつて、十劫以前に新しく佛になつた佛様だ、それ以前は凡夫だなんていふ阿彌陀様では、心も身もまかせるのは考へものだ、頼りない、そこで「法華經」の「壽量品」をもつて來て、久遠實成の阿彌陀様にしたならば全部まかせるといふ、お經には何處にもそんなことはない、徳川時代の坊さんがお經にないからといふので新しくお經を作つたといふやうな話もあります、此淨土宗の系統も結局は「法華經」に降伏してしまつた、「法華經」の「壽量品」に降伏して了つてゐます。

次は法藏・澄觀諸師、これは華嚴宗です、これも日本に東大寺があるだけで、支那にはもう無くなつてゐます、此の東大寺の華嚴宗はどんなものかといふと、これは大佛様を見せてゐます、見物させてゐます、此の外には何もない、「華嚴經」は一つは哲學だといふので理窟だけいひますが、あの奈良の大佛——廬舍那佛は「華嚴經」の佛様で、たゞ大きいだけで外には何もない、これも支那にはなく日本にだけあります、實際の宗教としては、あつてないやうなものです。

道宣・弘景諸師、これは律宗です、それからもう一つこゝで注意しておかなければならぬのは、玄奘・慈恩の反

法華は支那でなくなつてしまつた、それから淨土宗は善導諸師になつてから、先刻いつたやうに親鸞のやうになつた。華嚴宗は支那にもあつたのが全然なくなり、日本にもあつたのが矢張り今では存在しない、それから律宗、これは支那の道宣・弘景ですが、兩方とも天台の弟子です、此の方は少し残つてゐて、今でも支那には南山の戒律が残つてゐますが、日本には残つてゐない、日本の坊さんは眞言律宗でも多く皆妻君を持つてゐますから、事實ないわけですが、それから達磨・惠能諸師、此の達磨・惠能の系統も矢張り天台の教義に影響された、此の系統は華嚴からの影響と天台からの影響と二つありますが、華嚴も實は天台の教義に影響されたので、禪宗の本流は大抵天台から影響されてゐます。

それから善無畏・不空諸師の眞言宗、此の方はどうかといふと、善無畏の「大日經疏」といふものがあります、支那で眞言の教義を説いたものは、此の「大日經疏」より外にはない、ところが「大日經疏」は何によつて書いたかといふと、天台の教義によつて書いたもので、矢張り天台に影響された、此の眞言につきまして注意すべきことは、眞言では胎藏といふのと金剛といふのと兩方ある、胎藏といふのは理で、金剛といふのは智慧の方だ、恰度喩へれば理は女の如く、智は男の如く活動する、理といふものは動いて居るが説明しない、智は説明して理を應用することが出来る、だから智の方は動かす方、理の方は動かされる方、理と智と胎藏界と金剛界と、此の二つが何れの大法祕法でも全然別々になつて居る、この金胎兩部は最初の大乗の法門に溯ると、胎藏界といふ方は「般若經」の系統で、金剛界といふのは「華嚴經」の系統なのです、斯う二つがあつて、これは何處までも併行して居る、ところが「法華經」の思想は此の二つを統一したものです、眞言で法華法といふのがありますが、眞言で法華を修行する時は、此の胎藏

界・金剛界を一つにしてしまふ、眞言の事相即ち修法の方は何百とあります、細かい方は千までもあり、佛様の數でも千二千とあります、その眞言の事相といふのは、流からいつても六流・三十六流とだん／＼殖えれば何百あるかわからない、そんなに澤山ありますが、然し皆胎藏界と金剛界とは別です、然るにその事相の中で唯一つ法華法だけが二つを統一してゐます、法華の法門が、佛敎の般若と華嚴を一つにしたものだといふことを、龍樹菩薩が明されて居ますが、事實に於いても眞言ではさういふやうに、法華法のみが胎藏界・金剛界を一つにして居ます。支那の佛敎は、そんな風に結局天台法華に歸することになつて居るのでありますが、更に日本を見ますと、どういふことになるか、日本佛敎の開祖は聖德太子であります、聖德太子は三經義疏といふものをば、御自身みづからお著しになりました、それは

法華經義疏

勝鬘經義疏

維摩經義疏

此の三つであります、太子が特に此の三經を撰ばれたといふことは非常に澤山の意味があるであらうと思ひます、此の「勝鬘經」といふものは、勝鬘夫人——これは女で俗人であります、俗人であつて王様の夫人です、その俗女が四重任又は四重擔といつて、一ばん最初に話した。

人天乘

聲聞乘

緣覺乘  
菩薩乘

人天乘といふのは、この世の中以上に出でないで、人間の世界での倫理道德を守つてそれで満足するといふ、或は天に生れることをば目的として善いことをしたい、斯ういふ種類の人、それから人間や天上のことでは満足が出来ない、何となれば、それらは生命に限りのあることであるから満足出来ない、最早無常の世界には生れない所に行きたい、涅槃の境界に入りたいといふ人の中、聲聞乘の人或は緣覺乘の人更に一切衆生と共に迷の世界に生れない、世間を超えた國土を造らうといふ菩薩乘、それらの種々の人があるけれどもそれらの種類をみんな自分が引き受けて、そして終に一乘に入らしめて佛様にしてしまふ、さういふことをば此の勝鬘夫人といふ王様の夫人は自分の任務とする、その四重任の心・四重擔の心によつて國の政治も施すのである、さういふ誓を立てた俗女です、それから「維摩經」は維摩居士——これは俗男です、坊さんでなく普通の男であります、これはどういふ身分の人だといふと、これは長者であつて菩薩行をする人です、菩薩行といふものは一般佛敎から申しますと、事の六度といふことをしなくてはならぬ、六度といふのは六波羅蜜で、事の六波羅蜜といふのは何だと申しますと、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧で、此の六波羅蜜の一ばん最初に布施といふのがあります、これは貧乏人では出来ない、全く出来なくはない、力を布施すれば出来る、人のためにタダ働いてやる、自分の身體を以て働いてやる、その布施は出来るけれども、何らが布施はやりよいかといふならば、國王だとか長者だとかいふものは、布施行が一ばんしよい位地に居る、仍で勝鬘夫人の「勝鬘經」、維摩居士の「維摩經」、さういふものは國王及び長者です、これは菩薩の事の六度たることの事

實に菩薩行をする、現實に菩薩行をするのに便利な位地なのであります。

ところが「法華經」はどうであらうかといひますと、此の「法華經」はさういふ勝鬘夫人だとか維摩居士だとかいふ、さういふ特定の位地にある人の爲めに説かれたものではない、これは有ゆる人に説かれた、「法師品」の時にお話したやうに、「若し人有つて」とあつて極めて簡單です、在世の場合には聲聞・緣覺・菩薩のため、即ち三乘修行の者のためにと、「法師品」には説かれてあるが、如來の滅したまへる後に於いては、「若し人有つて」で、聲聞・緣覺なんの修行をすることを擧げてない、誰でもいい、それから『在家出家行菩薩道』——坊さんでも俗人でも構はない、戒を持つてゐる者でも戒を一度毀つた者でも、佛種を損じなければそれは救はれる、持戒も毀戒も、——戒を持つてゐる者も戒を毀つた者も、利根なる者も鈍根なる者も、どちらでもいい、即ち法華は特定の者の爲めではないのです。それでは戒を毀つた者をどうして救ふのだといへば、それは事實上戒を毀つて居つても、理戒といふ本當の誠心では正法にそむかない、背くつもりでそむいて居るのではない、無上の教理には心服するのだ、事戒は毀つても尙理戒を持つて居る者は、自ら救はれる、又最後には此理戒を持たない謗法の者までも救ふ、阿彌陀様は十惡までは救ふてやるけれども、五逆と謗法は救ふことは出来ないといふ、大無量壽經では五逆は救ふてやるけれども謗法は救はないといふ、その謗法すらも「法華經」は救ふ、こゝに於いてか「法華經」の教義は、あらゆる全般を救ふてしまふ教義であります、その點からは、勝鬘・維摩の大乗の教義をば、更に「法華經」を以て統一されて居る、それが聖徳太子の立場なのであります、のみならず特に「壽量品」に至りましては、聖徳太子がお在になりました時代では、未だ支那で天台大師が出て居られない、天台大師のお師匠さんの南岳大師の生れ代りが聖徳太子だといふことを、日本

で昔信じてゐただけでなしに、智證大師や慈覺大師が支那に行くとき支那の學者が、貴方の國の上宮太子は南岳大師の生れかほりで、佛法を弘められたといふことは眞に結構なことだ、といつて、向うの坊さんが稱讚したといふことを、智證大師も慈覺大師も紀行に書いてあります、そんな風に支那人にまで信じられてゐたのでありますが、然し未だ天台の典籍が傳らなかつたから、天台の「法華經」の講釋たる「玄義」「文句」等は勿論お讀みにならなかつた、その頃は、梁の光宅寺の法雲といふ學者が居つた、此の人は「法華經」を講釋することが百數十回であつたといはれる人でありすが、非常に説法の上手な人で、説法の練習をするのに、山に入つて澤山の石に向つて法を説いた、終ひに其の石が感動して「うまい」と點頭いた、こゝに到つて始めてこれならば石がうなづく位だから、人はうなづくだらうといふので説法に出た、此の法雲法師が「法華經」を講じたなら、天から花が降つた、説法してゐる中に花の雨の説相のところを講じてゐると、聽衆の居る上の方から花が雨つて來たことを聽衆が感じたといふ、これは催眠心理學的に考へたならば嘘でなく、さういふ風に感じたのだらうと思ひます、あんまり説法が上手で石をうなづかした位ですから、人間がうなづくに相違ない、此の頃でも時計が十二時になつてゐるのを、術者が此の時計は五時だといふと、みんな五時だと思つたといふこともある位だから、法雲法師が花の雨つたことを説いたら、聽衆は事實花が雨つたと思つたかも知れぬ、此の法雲が「法華義記」といふものを書きました、此の「法華義記」といふものによつて、聖德太子は「法華義疏」四巻をお書きになつた、此の「法華義記」がその頃支那から日本に傳はつて居つた法華の註釋書では、唯一のものであり又一ばん權威のあるものであつたので、これによつて「法華義疏」を書かれました。

そこで、天台大師以前に「如來壽量品」の解し方が二つあります、天台大師以前の「如來壽量品」の解し方は、三論系の解し方と、涅槃系の人の解し方とです、三論系の人は此の「如來壽量品」の五百塵點の佛を法身であると解した、五百塵點といふ如な到底あり得べからざるやうな數をあげて、そして數のない無限の命、即ち眞理そのもの、命、即ち法身といふものをあり得べからざる數を以て譬へたと説いた、これは羅什三藏の弟子の僧叙といふ人もさういふやうに説いた、龍光といふ學者もさう説いた、道朗といふ人もそんな風にいつて、其の頃の三論系の學者はこれを法身の佛であると解釋した、それに對して涅槃系の學者は、法身といふことは「涅槃經」に於いて初めて説いたので、「法華經」にはさういふ眞理常住の法身はまだ説いてない、「壽量品」の佛は應身である、その長い五百塵點といふことを説いたのは應身の神通である、佛様の功德はこんなものだ、恰度大きな身を示すやうな鹽梅に、神通を以て命を延べて見せたのだ、八十年の命なのだが、それを神通を以て五百塵點といふ命に延べて見せた應身だ、決して法身ではない、斯ういふ風に説いた、光宅寺の法雲といふ人は此の方です。

聖德太子の「法華義疏」は、此の光宅の説を以て本義とし、それに多くよられた、それで「法華義疏」の中に「本義に曰く」と書かれてゐるのは皆此の光宅の釋義をいはれたのです、それは支那で當時大變勢力のあつた學者です、から「本義に曰く」といつて光宅のことをいはれた、ところが此の光宅といふ人は、一ばん最初の「譬喻品」の火宅の譬で、父の長者が外にゐて、火宅の中にまだ子供が遊んでゐる、そこは火に焼けてしまふから出なさいといつてもなかく出て來ない、そこで羊の車・牛の車・鹿の車が外にあるぞ愉快な車だから其の車に乗つて遊びなさいといつたので、火宅から子供が飛び出した、その時の長者はどういふ佛かといふと、光宅はこれは阿彌陀様だと書いた

それから又信解品に長者窮子といふ譬喩がある、その長者も阿彌陀様である、斯ういふ解釋を、法雲はしたのであります。

然るに聖徳太子は、「譬喩品」の長者も「信解品」の長者も、斷然そんなことはお取りにならなかつた、皆これ釋尊とせられた、のみならず壽量品を以て「神通延壽」といふことをばまるで否定せられました、「本義」にあるに拘らずこれを否定せられました、そして法師品には、偉いことが書かれてあります。

『諸果ノ中ニハ、法華壽量ノ果ニ如カズ……偏ニ法華最第一タルヲ嘆ズ』

果といふのは佛様といふことで、澤山のお經の中に皆佛様があるけれども、その佛様の中では法華の「壽量品」の佛以上のものではない、「諸果ノ中ニハ、法華壽量ノ果ニ如カズ」——「壽量品」を以て最上のもつとされて、斯ういふ風に書かれて居ります、光宅は「神通延壽」といつた、其の「壽量品」をば、聖徳太子は「佛壽命無窮極」といはれました、「法華經」は澤山のお經の中で最第一だ、已に説いたお經、今説いたお經、これから説くお經、その中で最第一であるといふことは何の爲めであるか、それは

萬善皆成佛

諸乘が皆成佛するからである、前の「勝鬘經」の時、人天乘を求めもの、或は聲聞乘を求めもの、或は緣覺乘を求めもの、菩薩乘を求めものも、みんな佛になるのだ、一乘に歸するのだ、さうあつたが、恰度そのやうに、「法華經」はそれをツきり説いてある遺憾なく説いてある、それで萬善皆成佛する、法華が前の「華嚴經」にも後の「涅槃經」にもすぐれたところは何であるかといふと、萬善皆成佛すると共に、佛の壽命が無窮極である、さういふことを説いたことが、此の「法華經」のすぐれたところである、それが諸經第一たる所以だ、斯う聖徳太子自らいつて居られます。

それから又「法師品」の中で、井の譬があります、若し人此の「法華經」に接したならば、恰度人が高い陸地で水が欲しくなる、そこで水を求めようと思つて地を掘つた、尙乾ける土に接した時分には水が餘程遠いことを察しなければならぬ、若し濕へる土に接したならば水の近いことを考へなければならぬ、若し人佛教を求めて「法華經」に接することが出来なかつたならば、尙乾ける土のやうなものだ、若し「法華經」に接することが出来たならば、濕へる土に接したやうなものだといつて、「法華經」を濕へる土に譬へてあります。然るに聖徳太子はこれを解釋せられて、其の濕へる土は水に近い、それでは水は何ものだといふ時に、水が即ち「壽量品」の佛様だと説かれてあります。

水譬ニ壽量果。……泥譬ニ今日法華經。其心決定知ニ水必近ニ者、至ニ法華、方知ニ壽量果。本義云、濕土譬ニ無量

義經。

斯うあります、濕れる土を見たならば水即ち近きと知れ、濕れる土は即ち「法華經」である、濕れる土を見たならば其の心決定して水はもう近くなつたと知るのである。その水とは何であるかといふのについて、水を壽量の果に譬ふ——「壽量品」の佛様が水である、泥は今日の「法華經」で、その泥に接したならば、法華に至つてまさに「壽量品」の佛がわかる、眞實の佛は法華に至つてはじめてわかる、本義に云く——光宅は斯ういふ釋をして居る、とわざ／＼そこに書かれて、光宅は濕へる土を「無量義經」に譬へてある、と書かれてあります。

これによりますと聖徳太子は、「壽量品」を以て「法華經」の精神とし、その「壽量品」は即ち水そのものである、

即ち佛教の最後の目的であると、解釋せられた、今日の新聞に花山信勝君が、「法華義疏」の研究で學士院の恩賜をもらつたことがあります、けれども此の聖德太子が「壽量品」中心をとつて居られたといふことははっきりして居らないさうです、これは姉崎氏がいはれてましたが、それは「法華義疏」は餘程後までお氣に召さぬところはお書きかへになつた、それで文字が大變違ふ、終ひの方になると大分略してお書きになつてありますが、然るに特に私のおけたこの所だけは、文字が全然前後よりすつと丁寧にお書きになつてある、のみならず非常に文字が立派です、これは私は御眞蹟は餘り見ませんから氣がつかかなかつたのですが、姉崎博士が「君の擧げたところは、御眞蹟を拜見すると、全く違ふよ」といはれた、それによると、こゝは非常にお考へになり、幾度もお直しになつたものと認められます、「壽量品」を以て聖德太子は、支那にその模本があつたに拘らず、當時の一ばん權威のあつた學者の説を一掃してしまはれた、そして天台大師以前に、獨立して「壽量品」中心をとられたのであります。

これについて先刻も申述べましたやうに、帝國ホテルの佛誕二千五百年祝賀會の時に、折本を別に作つてみんなに渡したが、それには最初に「無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも遭ひたてまつること難し」といふ開經偈が書いてあつて、南無妙法蓮華經などと書いてありません、然るに三乘眞實一乘方便だといふ法相宗の管長様が、その開經偈の時になつてから、「無上甚深」をやられるものと思つてゐたらばやらない、「なアー」といふことばかり長くやつてゐられる暫くすると、「あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ」といふ、聲明といふ調子でやられるのです、それが「妙——法——蓮——華——經」と、私の耳には聞えて、どうも「南無妙法蓮華經」らしい、天台に法華八講をやる時分に、さういふ聲明で

南無妙法蓮華經と誦へることもありますが、それにしても法相宗で法華の題目を唱へるといふのは變で、而も刷物を配つてあるのにそれをやらないで、聲明で「南無妙法蓮華經」を唱へてしまつて、それから妙法蓮華經如來壽量品と読み出したから肝をつぶした、何故そんなことをしたのだらう、佐伯貫首は思ひつきでやつたのか知らんと思つたが、それから後姉崎博士に「佐伯管長さん變なことをせられたが、彼處でどうして誦へられたのでせう」とききましたらば姉崎氏が、添田敬一郎といふ秋田縣の知事をやつてゐた、今は文部省の政務次官をしてゐる人が一緒に居つて、此の人がまづ氣がついたらしくそれをきいたので、「佐伯さんが今南無妙法蓮華經を誦へたのは、どういふわけですか」と姉崎さんにきいたので、そこで姉崎さんが、佐伯さんにきくと佐伯さんが、「イヤあれは太子様のお宗旨です」斯ういつたさうです、太子様のお宗旨は南無妙法蓮華經だ、さうなると、日本佛教はみんな南無妙法蓮華經に改宗しなければならぬことになり、そんな風に、聖德太子は「法華經」の「壽量品」を以て中心とされたのであります。

それから傳教大師、これは先刻申上げたやうに、「内證佛法血脈」に、久遠實成大覺世尊と書かれて居ります、然るにこれに異議を唱へたのは弘法大師です、弘法大師はこれは又エライことをいひました、法華の「壽量品」の佛は、これは尙無明の邊域だ、十住心の第八住心だ——信仰をもつて行く場所が十通りある、その中の第八ばん目の信仰をもつて行く所が「如來壽量品」だ、「如來壽量品」の佛などは、三惡道の凡夫から八ばん目で、此の佛は名前こそは佛様だが、眞には尙ほ迷の境界だ、「無明の邊域で、明の分位でない」斯ういふことを弘法大師といふ人は書いて居ります。

日蓮聖人が『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊』といはれたのを、人々は非常に悪口のやうにいひますが、日蓮聖人よりも、弘法大師の方が餘程悪口は上手です。佛をつかまへて迷ひの分際だと書いてゐる、日蓮聖人はまだ阿彌陀様は凡夫だといふことは、日蓮聖人の御書の何處を見ても書いてない、たゞこれを本佛にくらべたならば、その時だけは、一般には分身佛、もしその分身といふことを明さないで優劣をくらぶれば、『物の數ならず』とまでは書かれてあります、然しこれはチャンとお經文に確證があります、弘法大師は無明の邊域だと書いておきながらお經文に確證がない、更に新義眞言宗の覺鑊といふ人になると、一層エライことをいつてゐます、壽量品の佛は若し大日如來にくらべたならば、大日如來は車に乗つて居る王様で、壽量品の佛は車を曳く馭者のやうなものだ、それから又大日如來の履物取りにも足らない、そんなことをいつて居ます、これは悪口も悪口も最も甚しい悪口です。

それから弘法大師の影響によつて、叡山の慈覺大師と智證大師の二人が、天台宗なのに眞言宗になりました、その結果どういふことになつたか、慈覺大師の流れは叡山、智證大師の流れは三井寺、此の叡山と三井寺が何をするかといふと、兩方で焼打をやつてゐます、叡山で三井寺を焼き、三井寺でも叡山を攻めて、返報をした、坊さんと坊さんとも相争つた、高野山の方はどうかといふと、金剛峰寺と傳法院とが、同じ山の中で僧兵を以て相争ふ戰爭をした、而も一ぺんでなく數ヶ度もやつてゐる、さうすると覺鑊の方は高野山に居れなくなつたから根來に行つたが、根來に行つてからでも争つてゐる、これは一體何の相でせうか、同じ宗門である者が唯道理で争つてゐるだけでなく、干戈を以て兩方で焼打のやりつくりをして居る、これは何の相か、眞言亡國といふことは、日蓮聖人が勝手にいはれたのではない、この事實がおのづから示してゐる、此の眞言になつてから、我が國でも此の眞言の祈禱をもつて、天皇の

位争ひがせられてゐます、平安朝には太政大臣とか左右大臣とかいふ人が自分の家に娘があると、皇后様にしたといふので争ひます、皇后様にしたといふのは何のためかといひますと、皇后様になつたら其のお腹の御子が天子様におなりになる、さうすると自分が天子様の外戚になる、外戚になると攝政關白になつて、天下を自分が料理する、斯ういふので藤原氏の一族は、娘を入内させようとし、また入内させると、皇子様がお生れになるやうに希望する、唯希望するのではなく、叡山、三井寺、高野山、東寺等の眞言の坊さんに祈禱をお願ひする、さうすると眞言の坊さんは、『ノーマクサンマング』とやる、そこで、此方の方が早く入内するやうに、入内したら早く御子を授かるやうにと、お互に祈禱をやる、その結果が保元・平治の亂となつたのです、南北朝といふものは、どうして出来ましたかといひますと、この南北朝には先例があるのです、日本の天子の即位といふことには、三種の神器がなければ即位出来ないのです、然るに足利尊氏が、北朝の天子を擁立するのに、三種の神器なくして天子を立てた、三種の神器なくして天子を立てると、どんなことになる、尊氏がそれを始めて開いたと思ふとまちがひで、これは源平の時代に先例があるのです、安徳天皇が神器をお持ちになつて西國にお下りになつた、ところで京でも天子様がなければ、平家を討つことができないといふので、そこで、後鳥羽天皇が皇位にお即きになつてゐます、これは三種の神器なくして位に即かれたはじめで、その例によつて、尊氏は三種の神器なくして天子を立てたのです、もと／＼神器なくして天皇を立てるといふことは出来ない筈だ、然るに誰がそれを敢てしたかといへば、三種の神器なくして、後鳥羽天皇を立てられたのは、御白河法皇様でゐられます。



これはどうしてかういふことになつたかといふと、院と天皇と二つ出来て、天皇は虚位を擁されて院が實力をお示しになる、斯ういふことから起つたのです。院が實際天皇のことをおやりになつて天皇の方が虚位である、平安朝の末頃には斯ういふことになつたのです、それは白河法皇以來のことですが、白河法皇といふ方は眞言の御信者であられます、そして法皇の元祖は御室の仁和寺の寛平法皇であらせられますが、矢張り眞言であられます、後白河法皇も亦眞言の御信者です、天皇が虚位を擁して院が實力をお持ちになるのは、已に一國に二人の王様がある姿で、何故こんなことをしなくてはならぬやうになつたかといふと、藤原氏が幼少の天皇を擁立し奉つて、勝手なことをするから、院がそれを御押へにならなければならぬやうになつたので、では藤原氏が勝手なことをするのは、どんな所から来たか、それは今いつたやうに、皇后様御入内といふことを、皆坊さんをして御祈禱せしめ、御入内になつたら、皇子様がお生れになるやうにと御祈禱せしめた、要するに眞言の祈禱といふことに最後はなつて居ります、それからまた、此の天皇が虚位を擁せらるゝに至つたはじめは、清和天皇で、そして此の清和天皇が御位にお即きになつた時に、はじめ眞言が宮中にはいり、皇位の繼承にまで關係したので、清和天皇は九歳で御位にお即かれまして、外戚藤原良房が攝政となりましたが、これは人臣攝政のはじめです、清和天皇——惟仁親王が太子となられる時に、皇子に對して、太子の位争ひになつた御方は惟喬親王で、惟喬親王は御父、文徳天皇がお愛しになり、まづ此の親王を御位にお即けて、後に惟仁親王に及ぼうとお思召になり、弘法大師の弟子の眞濟といふ人が、惟喬親王をお産み申された紀氏の出の人であり、天皇が御信仰になつてゐられたので、此の人に御祈禱をおさせになつた、惟仁親王の方は、また外戚良房が、弘法大師の肉弟眞雅に祈させたのみでなく、更に叡山の惠亮といふ人に御祈禱を頼んだ、兩方で御祈

禱の競争をした結果、終に惟喬親王が負けられて、惟仁親王が太子となられ、ついで御即位になりました、此の時はじめて人臣攝政がおかれ、藤原氏專權のはじめとなつたのです、かくて藤原氏が代々攝政や關白となり、專權を極めたから、仕方なく院政が出来なければならぬやうになりました、この院政の結果が、保元の亂となり、保元の亂の結果が、平氏の專政となり、その結果が源平の争亂となり、その結果安徳天皇が西においでになつたから、後鳥羽天皇を神器なくして御位にお即けにならなければならぬやうになつたのです、それが後の南北朝の一國二王の濫觴です、此の歴史的事實をふりかへつたならば、眞言宗が如何に現實的に、日本の國體の内面的破壊をして居るかといふことは明白です、それは「壽量品」の佛を、無明の邊域などゝいつて、娑婆世界に大日如來と釋迦牟尼佛と、二つの佛がましますと、二佛並出の宗義を立てたことから始まつて居るとは、日蓮聖人の御斷案です。

然し日蓮聖人前後に至りましては、流石に此の弘法大師の眞言、叡山の眞言、共に念佛になつてしまひました、先刻申上げた覺鑊なんて人も念佛をやつてゐたし、法然・親鸞の兩師が出ました、それで系統の上からは、

良忍・覺鑊諸師——眞言系統

法然・親鸞諸師——念佛系統

榮西・道元諸師——禪系統

覺盛・叡尊諸師——律系統

これは恰度、此の當時の支那の僧侶が四種類あつた、法師といへば天台、律師といへば南山律、禪師といへば達磨の

禪宗、瑜伽師といへば不空の流であつた、斯く道元禪師の「寶慶記」といふものに書かれてゐると、チャント同じやうになつてゐます、支那では日蓮聖人は出なかつたけれども、それでも矢張り大勢は法華に歸してしまつた、明の時代には藕益大師のやうな、矢張り法華中心の八宗綜合の人が出た、しかしその法華は迹門法華であつたから、禪と念佛とを修行法とした、日本では此の念佛・禪宗・律宗・眞言、此の四つのものをば、悉く止揚された「壽量品」の特別佛教、即ち別頭佛教を以て、これらの派別佛教を根本的に統一せられたのが、日蓮聖人の「壽量品」中心の佛教なのであります、印度に於いても龍樹・天親皆「壽量品」中心であつた、支那に於いても終りまで佛教思想の中心となつて居つたものは、天台宗の思想であります、そして天台大師は「壽量品」中心であります、日本に於いても、「法華經」を中心として聖徳太子がこれを開かれ、日蓮聖人に至つて「壽量品」中心に綜合したのであります。

以上の如く、印度・支那・日本にわたつて、「壽量品」中心は佛教歴史上の事實であり、思想上の事實になつて居ります、そのことを申上げて、これを以て「壽量品」の總論としておきます。

### 妙法蓮華經如來壽量品

如來秘密の三身(餘經迹門未顯の佛)

五百塵點劫の譬(無始本佛の巧喩)

三世形聲の兩益(六或示現)

非生現生非滅現滅の慈悲

父の良醫子の諸子(失心不失心)

是好良藥(戒定慧、滅後三時の異)

遣使還告(二乘・菩薩・迹化・本化の異)

一、誠信(三誠三請重請重誠)

二、正答(○長行○偈頌の中、長行)

### ◎法 說

三世益物

過去益物

『如來秘密』の下 出ニ執近情(1、所迷法、2、能迷衆、3、迷遠情)

破ニ近顯遠

『然るに善男子我れ實に』の下 法譬顯遠(1、法說顯遠、2、舉レ譬格量、ア、舉レ譬問、イ、答レ不知、ウ、合ニ顯遠)

第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

『是より來、我れ常に』の下 益ニ物所ノ宜

益物之處

『諸の善男子、是の中間』の下 拂ニ迹上疑ニ

『若し衆生あつて』の下 正明ニ益宜ニ

感應

施ノ化

形聲兩益

形益

『處々に名字の不同』の下

非ノ生現ノ生

『亦復現じて』の下

非ノ滅現ノ滅

『又種々の方便』の下

聲益

『能く衆生をして』の下

得ノ益歡喜

現在益ノ物

『如來諸の衆生の小法』の下 明ニ機滅ニ

明ニ應化ニ

非ノ生現ノ生

『是の人の爲めに我れ少くして』の下 現ノ生

『然るに我れ實には』の下 非ノ生

利益

『如來の演る所の經典』の下

形聲益

『諸の言説する所』の下 明ニ不虛ニ

『所以は何ん如來は』の下 標ニ不虛ニ

釋ニ不虛ニ

照ノ理不ノ虛 (如實知見、1、無ニ二種生死因果、2、無ニ在ニ生死之世ニ及無

レ入ニ涅槃之滅、3、非ニ滅度之實、非ニ生死之虛、4、非ニ二乘如、非ニ六道之

異、5、不レ如ニ三種生死衆生所見之三界相、6、二智明見六或形聲之益不ノ虛)

『諸の衆生の種々の性』の下 稱ノ機不ノ虛

機 感

施ノ化

『諸の善根を生ぜしめん』の下 非ノ滅現ノ滅

『是の如く我れ成佛してより』の下 明ニ本實不滅

明ニ果位常

學ノ因況ノ果

『然るに今實の滅度』の下 明ニ迹中唱ノ滅

利益

『如來是の方便』の下 不滅衆生有損

不滅有損

『若し如來常に在して』の下 廣釋ニ不滅有損

唱ノ滅於ノ物有損

『是の故に如何』の下 歎ニ佛難ノ值

『所以は何ん諸の薄徳』の下 釋ニ難値意

總結ニ不虛

『又善男子諸佛如來』の下 明ニ先ノ近後ノ遠

『衆生を度せんが爲』 明ノ爲ノ化ニ衆生

『皆實にして虚しからず』 明ニ皆非ニ虚妄

◎譬 說

開ノ譬

良醫治ノ子譬、譬 上三世應ニ化所ノ宜

醫師遠行譬、譬 過去益物

譬ニ應化

『譬へば良醫の智慧』の下 超譬ニ應化

『其の人諸の子息』の下 追譬ニ機感

『事の縁あるを』の下 譬ニ現滅

還已復去譬、譬ニ現在應化

『諸の子後に他の』の下 譬ニ機感

譬ニ應化

非ノ生現ノ生

譬ニ形聲兩益

『是の時其の父還り來り』の下 譬ニ形益

『父子等の苦惱する』の下 譬ニ聲益

第七講 如來壽量品・分別功德品 隨喜功德品・法師功德品

譬<sub>三</sub>佛受<sub>レ</sub>請轉<sub>三</sub>二諦法輪<sub>一</sub>

『而も是の言を作す此の大良藥』の下 譬<sub>下</sub>佛將<sub>三</sub>此誠勸兩門<sub>一</sub>化<sub>上</sub>

『其の諸子の中に』の下 譬<sub>三</sub>利益不虛<sub>一</sub>

非<sub>レ</sub>滅現<sub>レ</sub>滅

不久應<sub>レ</sub>死譬

『餘の心を失へる者』の下 唱死之由譬<sub>三</sub>非滅現滅<sub>一</sub>

正唱<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>死譬

『我れ今當に方便』の下 擬<sub>三</sub>去住<sub>一</sub>譬

『即ち是の言を作さく』の下 唱<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>死譬

諸子醒悟譬

『是の時に諸子父背喪』の下 現滅利益

『自ら惟ふに孤露』の下 未來機感

『其父子悉く』の下 尋便來歸譬、譬<sub>三</sub>未來應化<sub>一</sub>

『意に於て云何』の下 治子實益譬、譬<sub>三</sub>上三世益物不虛<sub>一</sub>

合<sub>レ</sub>譬

『佛の言はく』の下 合<sub>三</sub>過去益物<sub>一</sub>

『方便力』の下 合<sub>三</sub>現在益物<sub>一</sub>

『亦開く』の下 合<sub>三</sub>益物不虛<sub>一</sub>

偈頌即ち自我偈の科文は、次の偈文の講のはじめに掲げませう。

前の「從地涌出品」に地涌の菩薩が出て來つた、そしてそれらの菩薩は、彌勒菩薩すら十方世界に往返し周旋したけれども、未だ曾て見たこともない菩薩方であつたといふので、これらの菩薩は如何なる佛に從つて、如何なる國に居つて、そして如何なる佛法を習ひ、如何なる佛道を修行して居るものであるか、それを御伺ひしたいと申上げた、ところが釋迦牟尼佛はこれは皆俺の弟子である、と仰せられた、それは甚だ諒解し難い、如來は釋の宮を出で、伽耶城を去ること遠からざる所に於いて成佛されたのである、それから僅か四十餘年であるのにどうして斯様に澤山な菩薩方がお弟子であるか、自分達は佛を信するが故に、佛の仰しやることは皆間違ひのないことゝは思ふけれども、後の世の者が其の不道理なことを聞いて信じないでせう、どうか眞のことを聞かして頂きたい、斯うお願いした、そこで「如來壽量品」の説法が始まるのであります。

此の「如來壽量品」には、プリントの一ばん最初に七つの項目をあげておきましたが、まづ第一には、此の「壽量品」に於いて、はじめて

### 如來祕密の三身

第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

といふものが顯れました、從來の一般佛敎の佛と申しますものは、法身といふ眞理の身をもつてゐます、それは佛だけでなしに一切衆生皆法身といふ眞理の身を有つてゐます、それは宇宙法界に根本的に存在してゐる身です、そこで一般衆生は法身をもちながら其の法身の何ものたるかを知らないで、そのまゝ居るのです、それに對して、法身から報身といふのを覺り出す、これはどういふことかと申しますと、報はむくはれるといふことですが、何が報はれるのであるかといひますと、これは本來は智慧です、智慧であるが唯の智慧だけでなしに、その智慧によつてさまざまの功德を修めた、法身と申しますのは宇宙法界の本來の眞理で、それを「法華經」の「方便品」に諸法實相とせられた、諸法實相と申しますもの——十界の諸法皆實相といふ眞理の當體、即ち法界の本來の眞理、その法界の本來の眞理、その法界の本來の全體の眞理を智慧によつて覺る、然し單の智慧で覺るのでなしに、その智慧は單なる理性だけの智慧でなく、佛法では理性だけの智慧、理窟だけの智慧はそれは缺け目のある智慧だとします、それではどんな智慧が本當の智慧であるか、と申しますならば、其智慧はきつと功德の智慧でなければならぬ、功德の智慧とはどんなことだらうといへば、例へば眞理ではあるけれども善でない、善ではあるけれども美ではない、美であるけれども眞でないといふやうなのは、一面一面の眞理である、一面づゝの眞であり善であり美であるけれども、全體としての眞理ではない、功德と申しますものは、それは善でもあり美でもあり理でもある、智慧から道理を徹見しましたも、其の智慧が必ず人の爲、又世の爲めになるやうな働きにしか使はない、其の理は必ず善の方にしか使はない、美しい方にしか使はない、眞善美の爲にしか使はない、今日の科學でいふやうな眞理でありましたならば、其の眞理で他國を破壊する、その科學の集合したる力で他國を壓迫する、人間を壓迫する、そんなことに使つても矢張り立

派な智慧であり知識であります、澤山知識は磨くけれども、知識を磨くことによつて、益々人間と人間と争ふことをやらなければならぬ、さういふやうな智慧は、佛法では智慧としない、佛法の智慧なるものは、必ず功德を伴ふものでなければならぬ。

そこで此の報身の智慧といふものは、智慧が功德を伴つて、實際的の働きをしたものであります。さういふ智慧です、それが報身、そこでその報はれたものは何であるかといひますと、法界全體をば眞善美の當體である、斯ういふ風に報はれるところの佛身といふものが出て来る、其の報身といふもの、本當の智慧の働きをしたならば、諸法實相の法界全體は、悉く眞善美の具象的當體なのである、そこに居る衆生はそれを知らないから、それをばどんな方面からか知らしてやりたい、斯ういふので相手次第に、恰度いゝやうな相應した身體を示される、それを應身といひます、相手次第で、相手に適當した身體を示し、そして適當した御說法をせられる、従つて應身といふものにはさまざまのものがあります、或は劣應身或は勝應身などいふやうに、さまざまの姿があります、本來佛の應身は三十二相八十種好を具へたものですが、それより又すぐれた阿彌陀様のやうなものもあります、此の阿彌陀様は眞宗では報身といひますが、「法華經」の法門で申しますと矢張り應身です、そんな風に應身は慈悲の身です、然し智慧と功德が内容にありますから、その智慧と功德を以て衆生の善心をめぐむ、そして悪心を悲しんでどんな悪いことをして居ても、母が子供の悪いことを益々いたはるやうに、悲によつていとしみ、慈によつて良い所を助長する、さういふ慈悲の身が應身であります。

こんな風に、佛は本なかつた、みんな衆生で迷つてゐた、法身だけはもつて居つたけれども、宇宙法界の眞理を見

出すものが先に出る、それは智慧と功德の具象體で報身である、それから又慈悲が生じて、衆生のために親しい身を  
 示して救ふのであるぞ、斯ういふのが「壽量品」以前の佛様の三つの資格なのであります、法身から報身が出で、  
 報身から應身が出てゐる、これは時間的に出て行くのであるから、これを縦の三身といふ、それからこゝに應身の佛  
 がましますとしたならば、其の應身の佛には、其の後に報身があるに相違ない、其の報身の後には法身があるに相違  
 ない、こんな場合には應身をつかめば報身法身がある、斯う並んだ法報應の三身は横の三身であります、同時にある  
 三身は應身の場合にしかない、法身の場合は法身一つ、報身の場合は法身と報身とがあり得る、けれども應身の場合  
 は横に三つ並んである、けれども出て来た時間的にいつたならば

法身——報身——應身(縦の三身)

となりませす。

佛はどの佛でも、どれだけかの前に眞理を見出して報身になり、そして應身を示してゐます、應身を示して居る佛  
 には、きつと法報應の三身が横にあります、横の三身、縦の三身、斯ういふのが「壽量品」以前の佛の身なのであり  
 ます、それに對して此の「如來壽量品」の佛様は違つてゐます、斯ういふやうな佛様がさまざまに、十方にも三世に  
 もあるといふので、十方三世の佛があり、釋迦牟尼佛もその中の娑婆世界といふところの一人の佛である、その佛は  
 今度はじめて報身を得た、そして應身を示された、その報身を得たのはどんな姿だらうといふと、それは「華嚴經」  
 で示した姿が報身の姿である、十方臺上の盧舍那佛——法界全體が一大蓮華の世界で、そして其の蓮華の一々の葉に

も千の佛がある、其の又千の佛がみんな蓮華に乗つて、その中の蓮華にもみんな千の佛がある、法界は悉く佛の世界  
 だ、十界のさまざまのものでも、それは皆佛の功德の中の現はれである、そんな風に認めたのが即ち法界の眞理を徹  
 見して、それを功德化した姿である、さういふのを釋迦牟尼佛の報身とするのであります、そして人間として生れて  
 居るお釋迦様は應身である、釋尊は今度はじめて報身・應身を有たれた、仍で此の應身の佛には報身がある、阿彌陀様  
 も十劫前に、矢張り此の通りの三身を始めて有つた、十方三世に互つてさまざまの佛があるが、その十方三世の佛は  
 別々にましますのだ、斯ういふ風にいつて居つたのであります、そこで「法華經」の「寶塔品」におきまして十方分  
 身の佛を悉く集めて、これは釋尊が慈悲功德を以て身を分たれたものであるとせられた、そこで此の「壽量品」で  
 本當の佛様があらはれるのであります。

其の本當の佛様といふのはどんな佛様であるかといふと、その佛様は此のお經で申しますと、五百塵點劫以前の  
 久遠の成佛である、十方三世の佛は、皆此の久遠實成の佛の應身から示されたものだ、そしてそれは先刻いつたやう  
 な、縦の三身のやうな三身であるかといへば、「法華經」の三身は縦にあるのではない、また横にあるのではない、そ  
 れではどんな風にあるのかといふと、法身といつてゐる眞理の身、その眞理の身の中に、矢張り宛然と報身を示し應  
 身を示すところの要素が含まれて居るのを法中論三といひ、報身にも矢張り法身・應身を含んで居るのを報中論三とい  
 ひ、應身にも矢張り法身と報身とが内在されて居るのを應中論三といふ、普通には法身から報身が出るのであるが、  
 それは時間的に報身がない處から現はれて来るのではない、法身の中にチャント宇宙法界があり、その法界といふも  
 のは迷つて居る九界ばかりの法界ではない、本有の佛界が存在して、その智慧功德といふものが出て来る、報身、應

身の二が根本の法身の中に已にある、宇宙の根本に智慧慈悲の本體が、本有に含まれて居るのだ、それを佛法の術語では法中論三といひます、宇宙の根本の眞理の中に智慧慈悲がチャント存在して居る、従つて智慧の報身の中にも法身・應身があり、慈悲の應身の中にも法報二身がある。法身の中に他の二身が含まれてゐるとするから、これは縦ではない、これを不縦の三身といひます、でははじめから三身が横に存在するかといへば、必ずしも横にあるわけではない、法身・報身・應身の現はれ方は、まづ法身から、報身・應身といふ風に示して來るものであるから、それは矢張り不横の三身である。

此の中特に日蓮聖人の教義におきまして大切なことは、五百塵點劫以前の佛様であります、その五百塵點劫以前の佛様といふことの中に、無始の佛が示されてあります、五百塵點劫といふのは譬であつて、その譬は始のないといふことの譬であります、さうとるのが日蓮聖人の觀方で、天台大師の方の觀方は、五百塵點劫といふ數があるから、いはゞこれは、六百塵點劫、七百塵點劫とやれば、もつと多くなるといふことになる、そのことを、經文には東の方五百塵點劫とあるから、これを四方か十方に譬へれば、もつと／＼多くなるだらう、といふやうなことになつて、これを數と見るのが天台大師の觀方であり、日蓮聖人の觀方では數と見られないで、これを無始の譬と見られる、本來法界の中の中心點となる智慧功德の本體があるのである、けれども基督教の神様みたやうに、それは法界を造つたものではない、法界の不完全なもの、それも矢張り同時に存在する、不完全なもの、智慧功德の具象體たるものと同時に存在して居る、そして互に相具して居る、不完全なものでも、完全體の佛様の方から見ると、全體皆智慧功德

の本體になるのだ、智慧功德の根本の佛があつても、迷つて居る方から見たらば其の光は見えない、同一體がそんな風に見場所によつて違ふのだ、斯ういふ風に見られるのであります、それをば如來祕密の三身といひます。

『一身即三身ナルヲ名ケテ祕ト爲シ、三身即一身ナルヲ名ケテ密ト爲ス』

一身即三身——法身一體だと思つて居ると、法身の中には報・應がチャントはいつて居、報身の中にも、應身の中にも具はつてゐるのだ、『一身即三身ナルヲ名ケテ祕ト爲ス』、それが祕せられてゐる、それからまた三身があるのだが、これを一身と示してあるのだ、外の身はかくしてある、『三身即一身ナルヲ名ケテ密トナス』、密は微密であつて、三身であるが、それが一身のやうに見えて居る、かやうに一身に三身が祕せられ、三身が微密で、一身のやうに見える、それが如來祕密の三身であつて、さういふ三身をば、壽量品以前に祕せられて知らしめず、唯佛さまでだけが密に自ら知つてゐられたのだから祕密の三身といふ。かやうな無始の昔からの佛といふのは、無始の法身と見てゐた中に、チャント報身・應身がましますのだ、迹門で諸法實相の眞理と見てゐた中に、智慧功德を具し無邊の慈悲を具したまふ本有の三身如來が、チャント實在しますのだ、さういふことになるのであります。それが如來祕密の三身といふことであります。

それから、第二に

五百塵點劫の譬

といふのは、これは無始の本佛實在の巧喻です、これは本文の時にお話します、それから、つぎに



### 三世形聲の兩益

過去・現在・未來の三世にわたって、佛様はさまざまの姿を現はし、さまざまの教を説いて一切衆生を救はれる、一切衆生に應じてそれに相應はしい身を示してお教へになります時は、それは非生現生とて、生ずるに非ずして、生ずると現はし、非滅現滅とて、滅するに非ずして、滅すると現はすといふ、その慈悲——生ずといふも滅すといふもこれはすべて身のことでありまして、非生——はじめて佛さまが生れたのではない、本から佛様はわらツしやるのです、それを生れたと示されるのです、それから其の佛様が入滅せられる、大體生れたといふことが假りの姿ですから、入滅されるといふことも假りです、生れたのではないけれども生れたやうに示し、入滅されるのではないけれども、入滅されるやうに示される、佛様は出世せられたり涅槃せられたりするが、それはさういふ方便によつて衆生をお救ひになるので、それはすべて用らきであります、それが第四の

### 非生現生非滅現滅の慈悲

さういふことが「壽量品」に示されて居ります。

それから譬としては、これは法華七大譬の一つ、即ち第五には

### 父の良醫、子の失心不信心

ですが、父の佛は、智慧聰達にして明かに方藥に練れた、どんな病氣でも癒すお醫者で、一切衆生は子供のやうなものである、父の佛の慈悲功德、それを信じない子供もありません、けれどもそれは本心を失つて居るので、又本心を失はない子供もありません、然し本心を失つて居る者も失はぬ者も、兩方とも佛の子です、斯ういふ譬が出て居ります。それから第六として、その佛が最上の藥を示される、その藥は

### 色香美味の是好良藥

必ず色と香と味といふ、戒定慧の三つの功德がある、それが佛の滅後、正像・末の三時によつて、その時々用ひられる藥が違ひ、その利益が違ふ、それからその滅後即ち佛がおかくなつてから後には、佛の代理たる使を遣はして衆生を導かれる、その使は、或は正法時代には、阿羅漢様の姿或は菩薩の姿、その菩薩の中にも權大乘の菩薩、像法時代には迹化の菩薩、末法時代には本化といふやうな違ひがあります、常住の佛があり、その佛は過去・現在・未來の三世に互つて、常に衆生を救はうとせられる、その救はうとせられるのは、生れるのではないが生れると稱し、滅ならぬのでないが、滅なされると示して、そして心を失つて居る者を救はれる、佛がおいでになつて救ふことの出來ない者には、おかくれになつてから後に使を遣はして、きつとこれを救はれる、それが第七の

### 遣使還告

といふことで、さういふ佛の世々に互つての大慈大悲の働き、智慧功德の働き、それを示されたのが「如來壽量品」であります。

だから如來は眞理の體であつて同時に智慧功德の體であります、そして一切衆生の爲めに、それ相應の身を現はして、一切衆生の語を以てこれを導かれるといふ、三つの身、即ち眞理の身、智慧功德の身、それから慈悲の身、その三つが根本的に宇宙に存在する、それが「如來壽量品」の如來であります、「壽量」といふのは、壽命を量ると書くが、

その壽命は何であるかといひますと、佛法では壽命は功德の果報で、功德の果報が壽命であります、その壽命を詮量する、量といふことは詮量することです、詮はしらべる、その功德の果報はどんな限量があるのか、それは三世常恆無限の連続である、斯ういふことを明かにするお経が「壽命品」なのであります。

以上申上げましたやうに、「壽命品」はさういふ七つのが説かれてあります、以下本文にはいります。

一、誠信(三誠三請重請重誠)

一ばん始めのところは信を誠める、誠めて信ぜしめる、此の「壽命品」は一代經中、等覺の菩薩といつて、佛様につぐ菩薩、而も釋迦牟尼佛の次に佛になる彌勒菩薩さへも、全然まるで知らなかつた、その境界を説かれるのですから、法華已前の諸經、又「法華經」でも「壽命品」に至るまでの教を聽いて居る菩薩方では、到底智慧を以て入らうといふことは出来ないであります、これまでの意味からいッたならば、眞理は本から固有して居るが、智慧や功德は固有したものではない、後から出来上ツて来たものだからいふ風に考へられるのですが、此の「壽命品」におきましては、眞理の具象體、智慧功德の具象體、慈悲の具象體、さういふものは法界に根本からあるのだ、斯ういふことをお示しになるのですから、それは等覺補處の菩薩でもわからない、そこで信じろ、これを信じろ、これは間違ひなのだ、といふことを念に念を入れて先に仰しやるのです、汝等は理解は出来ないのである、これは事實だ、斯ういふことを先づ念を入れられた、それが一のところですよ。

「爾の時、佛、諸の菩薩及び一切の大衆に告げたまはく、諸の善男子よ、汝等當に如來の誠諦の語を信じ解るべし。」  
これが第一の誠めであります、

「復、大衆に告ぐたまはく、汝等當に如來の誠諦の語を信じ解るべし。」  
これが第二のお誠めであります、

「又復諸の大衆に告げたまはく、汝等當に如來の誠諦の語を信じ解るべし。」  
斯く三度まで念に念を入れてお誠めになつた、彌勒菩薩よ信じろ、その信から來たならばこれから説く道理が解る、けれども根本の信を後にして、解ッたら信じよう、信じて解るのでなしに、解ッてから信じようといふやうな、逆なことをいつて居れば、汝には解らないから信じられない、先づ信じて、その信といふ發足から行ッたならば汝等にも解る、これを三度繰返して居られますが、これを三誠といひます、それから、

「是の時、菩薩大衆、彌勒を首と爲して、合掌して佛に白して言さく、世尊よ、唯願くば之を説かせたまへ、我等、當に佛の語を信じ受けたてまつるべし。」

承知致しました、世尊よ、私達はきつと佛様の御語をば信じます、信じてこれをお受け致します、斯ういふ風に三度申上げた、  
「是の如く三たび白し已りて……」これを三誠三請といひます、三たび誠めて三たびお請ひした。

「是の如く三たび白し已りて、復言さく、唯願くば之を説かせたまへ。」  
重ねて復お願ひした。

『我等、當に佛の語を信じ受けたてまつるべし。』

これが三誠三請——重ねてお請ひした重請です。

『爾の時、世尊、諸の菩薩の三たび請ひて止まざることを知しめして、而ち之に告げて言はく、汝等諦かに聽けよ。』

これが重ねて誠められたので、重誠であります。

「方便品」の時には三たび止められて三たび請ふ、三止三請といふことがありました。「止みなむ舍利弗よ、復説くことを須るじ」——佛様は三度説かないといはれたのを、何卒説いていただきたいと、舍利弗が三度又お願ひした、その上に又もう一度重ねてお願ひしたら宜しいとお説きになつた、即ち「方便品」では三止三請重請許説ですが、「壽量品」の方では三誠三請重請重誠と、もう一度念を入れられて誠められてあります、特にもう一度念を入れて、又信じ受けなさいといけないぞと仰しやつて、

『汝等諦かに聽け』

その信仰の態度に於いて諦かに聽きなさい、それは何を信ずるのかといふ、

『如來の祕密神通の力を』

これから正答で、正しくお答へになりますのであります。

### 二、正答（長行・偈頌の中、長行）

其のお答へになる中に、法説と譬説と二つあります、法の上からお説きになつたのと、譬を以てお説きになつたと斯う二つあります、其の法説の中では、三世に物を益す——三世益物、物といふのは衆生のことです、始めのころは過去の衆生を御利益なさる、そこで先づ、

如來の祕密神通の力を、

と仰せられました、これはどういふことであるか、斯う申しますと、お釋迦様は四十餘年の前に佛におなりになつたのである、即ち近く成佛せられたのである、これを近成といひますが、諸の菩薩も、その心をもつて居る、執近の情、近成に執する心、それをお破りになるのです、其のお破りになる一ばん最初に、如來祕密神通の力——この神通の力が衆生には分らない、佛様の本體は衆生にはわからない、この神通の力をば所迷の法といひます、所迷の法といふことは、迷つてゐて此の如來祕密神通の力がわからない、その如來祕密は先刻いつたやうに、一身即三身、三身即一身で、一身に具して居る本有の三身、眞理の身と、智慧功德の身と、慈悲の身、それが本來からおありになるのである。それを神通の力——斯ういふのは、其の身は法身を示し、報身を示し、應身を示し、又應身の中からさまざまの十方三世の佛を示すといふやうに、世々番々の澤山の佛の姿を出してゐらつしやる、その神通の力、その神通の力で澤山の佛が出て居る、その神通の力の本體は、如來祕密の三身といふ根本の三身である、この如來祕密の方を體の三身といひます、神通の力の方を用の三身といひます、此の久遠體用の三身が所迷の法なのです、

如來の祕密神通の力を、

それではどんな者が、それに迷つてゐるか、今度は迷つて居る方の衆生を出されます、

一切世間の天人阿修羅は、

これが能迷の衆です、一切世間の天人阿修羅が迷つて居る衆生であります、その迷つて居るのは、どんな風に迷つてゐるのであるか、斯ういひますと、それは遠に迷ふ情——古い佛様であることがわからない、

『一切世間の天人及阿修羅は、皆、今の釋迦牟尼佛は、釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり』

さう思つて居る、これが『出三執近情』で、地涌の菩薩を一人も知らなかつた彌勒菩薩の如きも、實はこの『天人阿修羅』の三善道の見解を出ないといふことになるので、これが迹門佛教と本門佛教の天地の相違の大切な處です。

それから此の次の御説法が、さういふ近い佛様ではないのだ、これは久遠の佛様である、前の「涌出品」で涌出の菩薩がお弟子であるといはれた、よつてこゝで近情を破して遠成を顯はす、それが、

『然るに善男子よ、我實には成佛せしより已來、無量無邊、百千萬億那由他の劫ぞかし』

これが法と譬を以て、佛様が古くから成佛してゐらしやるといふことを示される中の、法を以て示されたのであります、俺は本當は無量無邊百千萬億那由他の劫——それは數へることは出来ない、さういふ昔からの佛であるぞ、そこで今度は譬を説かれる、

『譬へば五百千萬億那由他の阿僧祇なる三千大千の世界をば、假使に人有りて、抹きて微塵と爲し、東方なる五百千萬億那由他の阿僧祇の國を過ぎて、乃ち一の塵を下し。是の如く東に行きて是の微塵を盡さんが如し』

これが譬をあげて格量せられたのです、その中先づ譬をあげて問はれる、

『諸の善男子よ、意に於て云何ぞや。是の諸の世界は、思惟り校計りて其の數を知ることを得べしや、否や』  
たとへば、こゝにコップがあります、ところで此のコップを微塵にしてしまつて、此のコップの微塵の數を一つづゝ調べたら、どれほどになるかわからない、その微塵の一つごとに、コップをふやしたとしたらば、そのコップの數はどれだけになるかわかりません。

コップでさへもさうです、然るに三千大千世界だ、而もそれを五百千萬億那由他の阿僧祇といふ數の三千大千世界を集めて、それを悉く微塵にしてしまひ、そして五百千萬億那由他の阿僧祇の世界を過ぎて一つの塵を落して行き、五百千萬億那由他の阿僧祇の三千大千世界を塵にした數がなくなるまで落して行く、さうしたら其の間の世界がどれだけあるかといふことになつたから、等覺の彌勒菩薩も降參してしまつた。

『彌勒菩薩等、俱に佛に白して言さく、世尊よ、是の諸の世界は量無く邊無くして、算數の知る所に非ず、亦心の力の及ぶ所に非ず、一切の聲聞辟支佛が、無漏の智を以てすとも、思惟りて其の限數を知ること能はじ』

聲聞辟支佛の知ることが出来ないだけでなく、『我等阿惟越致地』といふ、もう決して迷の所には退かないといふ悟の境界にはいつて居る菩薩であつても、

『是の事の中に於ては亦達らざる所なり。世尊よ、是の如き諸の世界は量なく邊なしと』  
其の數は到底わかりません、等覺の位にあつても此の國の數はわかりません、それが「答不<sub>レ</sub>知」です。

『爾の時、佛大菩薩等に告げたまはく、諸の善男子よ、今當に分明に汝等に宣語すべし。是の諸の世界の、若は微塵を著きしものと、及び著かざりし者とを盡く以て塵と爲し』

微塵を著いたものも著かないものも、間に挟まれてゐるものも挟まれてゐないものも、もう一度微塵にしてしまふ、それを一緒にしてしまつて又粉にしてしまふ、さうしたらこれは幾つあるかといはれたが、それは到底わかりつこはなう、

『若は微塵を著きしものと、著かざりし者とを、盡く以て塵と爲して、一塵を一劫とせん』  
その一つの塵を一劫とする、

『我成佛せしより已來、復此にも過ぎたること、百千萬億那由佗阿僧祇の劫ぞかし』

それより以上、どれだけかわからない昔に自分は成佛したのである。それが「合顯遠」で、五百塵點劫の前といふもの、經文はそれより過ぎたること百千萬億那由佗阿僧祇劫ぞかしであります。

『是より來た我常に此の娑婆世界に在りて、法を説きて教へ化しつ』

これより次のところが「益三物所宜」です、その無始の昔から衆生の恰度いゝ加減なところに、さまざまの姿を現はしたり、教を説いたりして教化し利益するのである。五百千萬億那由佗阿僧祇の塵の劫數は、實をいつたなら、始めなき昔からの佛である、それより已來、我常に此の娑婆世界に在り、「法華經」以前の諸經、「壽量品」以前の諸經では、娑婆世界は十方世界の中で一ばんいけない世界である、娑婆世界は忍土である、我慢しなければならぬ世界である。十方の世界の方が淨土であるといつてゐたのが、此の「壽量品」に至つて、此の娑婆世界こそ久遠の本佛のまします本土であるといふことになつた。

『我常に此の娑婆世界に在りて、法を説きて教へ化しつ、亦餘の處の、百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を

導き利めり

それが物の宜しき所に利益すで、その利益される所はといふと、娑婆世界を中心にして、亦餘の所の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導き利めりで、中心は娑婆世界であります、これが「益物之處」です。

次は、

『諸の善男子よ、是の中間に於ても』

『此の中間』といふのですから、五百塵點劫の前から、今度此たびお釋迦様がお出になるまでの間、此の長い間に於ても、

『我然燈佛等と説き、又、復、其が涅槃に入ると言ひき』

こゝには然燈佛と一つだけあげてありますが、その長い間には澤山の佛が出たとお説きになつてあるので、それは何であるかといへば久遠の本佛の自在神通の力であります、如來祕密の久遠實成の本佛の體から出されたところの神通の力によつて、此の中間に於いて然燈佛等とある、此の「等」の中には三世のあらゆる佛、十方のあらゆる佛がはいつてゐます、そこでその佛が出て衆生を利益して入滅し、又外の佛が出て利益しては入滅する、さういふ風に説いたのであります。

『是の如きは、皆方便を以て分別せしなり。』

これは本當の佛でない、即ち垂迹の佛です、それは足迹のやうなものである、それがプリントの「拂三迹上疑」です、従つて俺が過去七佛の中の最後の然燈佛から「法華經」をうけて、今佛になつたといつて居るのも方便である、昔か

ら澤山の佛を神通之力であらはしてゐる、俺の方が本體である、といふことになるのであります。

『諸の善男子よ、若し衆生有りて我が所に來至らば、我れ佛の眼を以て、其の信等の諸根の利と鈍を觀、應に度すべき所に隨ひて、處處に自ら名字の不同、年紀の大小を説き、亦、復、現して當に涅槃に入るべしと言ひ、又種々の方便を以て微妙なる法を説き、能く衆生をして歡喜の心を發さしめき。』

これが正しく其の宜しきに隨つて利益される、その利益される利益の仕方を仰しやツた「正明三益宜」です、

『諸の善男子よ、若し衆生有りて我が所に來至らば』

これは「感應」で、感といふのは衆生、應といふのは佛様です、佛様を感じる心になつて居ねば、佛様がそこに出て來ない、佛は常にましますけれども、衆生の方に其の佛を感じる心性になつてゐなければ、佛様は出て來ない、宗教心が動かなければ相手の神様は出て來ない、これを譬へていひますと、感の方は水のやうなものです、應の方は月のやうなものです、月が上つても水がなければ月は映らない、『若し衆生有りて我が所に來至らば』——『我が所』といふ我とは佛様である、そこで感應する、

『我れ佛の眼を以て、其の信等の諸根の利と鈍を觀』

『信等の諸根』といふのは、

信 進 銳

定 慧

宗教心には此の五つがあります、信根・進根・念根・定根・慧根、此の根から各力が出る、根から功德の力が出る、そして功德になつて行く、信根——疑はない、佛の御説法を聞いて疑はない、さういふ心の根がある、その心の根には信力といふ力がチャントついてゐる、其の力が出て來て信が発生する、信の根が発生する、それから其の信にはきつと進むべき力がある、例へば日蓮聖人の教を聞いて信じた時は、きつと他の人を勧めに行く、これは必ずやる、さうしなければ居れない、それが本當の信であつたなら、チャントさういふやうに進む力を具して居る。それが進根進力、然し進む力だけで忘れてしまつては困る、そこで念根念力、進みツばなしで忘れてしまふ者は、進根はあるが念根のない者だ、そこで念根といふのは水の常に流れて止まらないが如く何時も平均に持つてゐるのが念根だ、それから念根は持つてゐても信仰の對象を彼方に變へたり此方に變へたりする場がある、信の對境が彼方に行つたり此方に行つたりするのは、それは定根が足りないのだ、信する相手の境即ち御本尊が一定してゐなければならぬ、それが定根定力この信進念定が常に働いてさへなれば、必ず其の中から佛様の御智慧を自分にさづかる、それは慧根慧力、此の五つのもの、利きと鈍きと、或る者は信根は利いけれども進根は鈍いとか、或るものは進根は利いが念根が鈍いとかさまざまのことがある、佛はそれをよく御存知になる。

『信等の諸根の利と鈍を觀』

そこで相手に相應した教をお説きになる。

この『度すべき所に隨ひて』御說法されるのは「施化」で、「感應」のところから今度は化を施す、我が所に來らば、佛はこれに對して彼等の信進念定慧の五根五力をチャント御覽になつて、そしてそれに應じて先づ姿をお現はしになる、そのことをば

『處々に自ら名字の不同』

或は阿彌陀様と現はれ、或は藥師様と現はれ、或は然燈佛と説きといふやうな鹽梅に、さまざまの名字の不同の佛様になつて示される、隨つて其の佛様は年の長い佛様もあれば、又八十入滅といふやうにお釋迦様のやうな佛様もある、さまざまの佛様の身の大きい小さいもある、差別した佛の姿を現はされるのである、これを「形益」といふ、佛様の姿を示される。

『處々に自ら名字の不同、年紀の大小を説き』

そして其の佛様が、

『亦、復、現して當に涅槃に入るべしと言ひ』

佛様がさういふやうに御出世せられて、そして又御涅槃におはいりになる。

『又、種々の方便を以て微妙なる法を説き』

これは「聲益」です。

『微妙なる法を説き、能く衆生をして歡喜の心を發さしめき』

本當は五百塵點の昔に成佛してゐらつしやるから「非生現生」——お生れになるのではないが、處々に自ら名字の不同、

年紀の大小を説いて佛様が生れられ、それから御入滅にはならないのだけれども、衆生のために御入滅を示されて、非滅にして現滅される、そして又さまざまの方便を以て微妙なる教を説かれたといふ聲益を示す、これによつて能く衆生をして歡喜の心を起させた、以上が五百塵點の昔から今釋迦牟尼佛として説法されてゐる迄の、過去の間に於いてさういふことを繰り返して一切衆生を救はれたといふことで、これが「壽量品」の佛の過去の御利益であります。

それから次に現在の益物で、現在に於てはどうか。

『諸の善男子よ、如來は諸の衆生の小法を樂ひ、徳薄く垢重き者を見つ。是る人の爲めに、我少くして出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説けり』

我は無始の昔から佛だといふやうなことは、説いても到底わからない、諸の衆生は小法を樂ひ、小さいことしかわからない、さういふ徳薄垢重の者のためには、久遠の佛などを説いてもわからないから、少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提をはじめて覺つたのであるといふ、十九出家三十得道の今の姿を示して居るのである、それが現在益物の「明三機感」で、衆生の小法を樂ひ徳薄垢重の者は、これを機感といひます、それに對して佛は、實は久遠の佛であるが、釋氏の宮にお生れになつて、天上天下唯我獨尊と唱へたといふことになつて居る、兎に角オギャアといつてお生れになつた、それが非生にして生を現ぜられたのです、けれども本當は此の時生れられたのではないといふことをお説きになる。

『然るに、我實には成佛せしより已來、久に遠けきこと斯の如し』

生を現じ、少くして出家し、十九出家三十成道といったが、これは本當はさうではない、實は久遠の昔からの存在である、今生れたのではない、生を現するけれども、それは生れたのではないのだ、唯方便である。

『但方便を以て、衆生を教へ化して、佛道に入らしめんとしてこそ、是の如き教を作せしなれ』

以上が非生現生の御利益であります、それから

『諸の善男子よ、如來の演ぶる所の經典は、皆衆生を度脱さんが爲めなり』

これは現在の聲益で、以上が現在の形聲兩益であります、佛がこの現在の形聲兩益を示される中に、六或といふのがあります。

『或は己が身を説き、或は佗の身を説き』

これは説くとありますから聲益で御説法の益であります、「己」といふのは佛様の身を示されたのです、「佗身」といふのは九界の身です、佛様は常に佛様の身だけを示してゐらっしゃらない、觀音菩薩、勢至菩薩といふやうなものも、本當は此の「如來壽量品」の佛からいひますと、矢張り此の如來壽量の佛様の一つの功德利益の中から出て來て居る、それを説かれる、九界の身のさまざまの功德と共に、その違つて居る迷の場所も説かれる、佛様の智慧功德、それをば詳しくお説きになる。

『或は己が身を示し、或は佗の身を示し』

これは形です、佛様の身を示し、九界の身を神通を以て示される、それから

『或は己が事を示し、或は佗の事を示す』

『己事』といふのは佛の國なのであります、「佗事」といふのは九界の國なのであります、それをば形聲の益——説法の利益と、それから神通で身及び國土を示される、その示されるのはどういふことであるかといひますと、此の形聲の二益によつて衆生を利益せられるのであります、其の利益したところからいへば、九界の身を示された時でも、決して佛様の偽りではない、佛の身を示しただけが眞實で九界の身を示したのは嘘かといふと、決してさうではない、悉くみな佛の慈悲の功德を實現せられたもので、虚しくないものであるといふので、

『諸の言説く所、皆實にして虚しからず』

それが「標不虛」で、今度は虚しくない譯を示されるのであります。

『所以者何となれば、如來は實の如に三界の相を知見たまひつ、生死の若は退き、若は出づること有ること無し』

これが第一項の「無三種生死因果」であります、「生死の若は退き、若は出づること有ること無し」といふのはどういふことであるかといひますと、生死に二つある、六道の衆生が生死するやうな生死それが分段の生死です、それから菩薩方の生死を變易の生死といひ、精神的の生死であります。

—分段(身の生死)六道衆生

—變易(精神の生死)菩薩

佛様はさういふ、二つの生死、を離れたお方なのであります。

亦、在世及び滅度なる者も無し『在世』といふのは、さういふ生死の世に在るのではない、それでは涅槃といふままで空寂の世界に居るのかといふと、空寂の世界にも居らない、それだから能く生死の相を示し、能く又涅槃の相を



示す、さういふ生死と涅槃といふ兩方のものから超越して居る存在であります、それだから何方の相をも出されません。

『實に非ず、虚に非ず』

それは、實といふ方は、涅槃にはいつたのが實であるかといへば、壽量品の佛は、さういふ涅槃にはいつて居るといふのが實であり、生死の所に出て居るのが虚であるとはいはないので、生死も佛にあつては亦實であるし、涅槃も亦涅槃が違つてゐたら虚なのであります、その何方をも超越して居るのです。

『實に非ず、虚に非ず、如に非ず、異に非ず』

二乗は此の世界は皆空寂の、平等な本體から出て居るので、差別のあるのは現象だけだと思つてゐる、又六道の衆生は差別して居るのが本當のものであると思つて居る、然し佛の方からいつたならば、それは差別でもなければ平等でもないのだ、だから能く平等し、能く差別することが出来るのだ、従つて、

『三界の三界を見るが如くならず』分段の生死の方の六道の衆生、及び變易の生死の方の二乗・菩薩、それらの者の見て居る三界とは違ふのだ、如來の見て居る三界は違ふのです。

『斯の如き事、如來は明かに見て錯謬有すこと無し』

これが佛様のお説きになるところの一切世間であります、さういふ風な總ての偏局を離れたるところの場所にゐらっしゃるから、そして生死を離れたところで、斯ういふ自在のお身ですから、それで非生現生を生ずるのでなくして生じ、非滅現滅するのでなくして滅することも出来るのです、その如來壽量の佛様の御壽命をわれ／＼は少しでもないいたゞいたならば、矢ッ張り生死をなくして、生死から出ることも出来るし、入滅するのでなくして入滅の相を示すのだと

いふところにも、安心を示すことが出来るのです、そこに生死を超越することも出来ます。

『諸の衆生に、種々の性と、種々の欲と、種々の行と、種々の憶想と分別の有るを以ての故に諸の善根を生さしめんと欲ひて、若干の因縁と譬喩の言辭とを以て、種々に法を説きつ、作す所の佛事未だ曾て暫くも廢めたまはず』

これは機に稱うて虚しからず、諸々の衆生の種々の性、種々の欲、先刻いひましたやうに、信・進・念・定・慧と心理にもあんなに人々の違ひがある、まして宗教心理でないところの一般の凡夫の有つてゐるさまざまの欲情、さまざまの傾向、さまざまの性格がある、それらに對して如來は、恰度それに當てはまつた御教化を下されるのであります、さういふ機感に對して、諸々の善根を生さしめんと欲ひて、若干の因縁と譬喩の言辭とを以て、種々に法を説かれたのであります。

『作す所の佛事未だ曾て暫くも廢めたまはず。是の如く、我成佛せしより已來、甚大も久に遠なり。壽命無量阿僧祇の劫にして常に住りて滅せず。』

これが「非滅現滅」で、本來佛は御入滅にはならないのであるといふことをば、

『我成佛せしより已來、甚大も久に遠なり。壽命無量阿僧祇の劫にして、常に住りて滅せず』

これが本體なのであります。

『諸の善男子よ、我本と菩薩の道を行じて、成げにし所の壽命今猶ほ未だ盡きず』  
それでは五百塵點以前の佛様が、始めからの佛様であるならば、何も本と菩薩の道を行じた、そして成じた壽命など

があるわけではないのではないか、といふことがあるかも知れない、五百塵點といふ数はどういふ数であるかといふと、それは『因壽』といつて、菩薩の修行をされたそれに報はれた壽命なのです、これに對して更に『果壽』といふものがあります、その『果壽』といふのは、佛の果報の方の壽命です、此の佛の果報の壽命は無始の壽命であつて、その佛の因行の方の壽命は五百塵點の壽命なのであります。

『常に住りて滅せず』

といふ方は佛の果報の壽命で、本佛の根本の壽命なのであります、法身の中に佛様がまします、眞理の法身の中に佛様の功德がまします、その佛様の功德の中の、恰度本因本果といふ功德が法界の本來の中にあるのだ、本果の功德を根本的に佛様の眞の本體として有つてゐらつしやるのだ、それと同時に、此の佛界の中に具して居る九界の功德がある、その九界の功德を働かせる時もある、佛界常住と共に九界の本因の功德——九界の働きをば佛が出す時、その時が菩薩道を修行される、此の菩薩道は本因で、本佛の働きである、本因本果を具したものが即ち本佛なのだ、その本佛の本果の功德は眞理と同體であつて、これは常住なのだ、同時に九界の功德をば動かされる時、それが本行菩薩道である、それを『因壽』といふ、それで因を擧げて果を況す。

『我本と菩薩の道を行じて、成げにし所の壽命今猶ほ未盡きす。復上の數に倍せり』

五百塵點の倍ほどあるのだ、まして況んや果壽といふ方は量り知るべからざるもの、即ち無始無終の壽命であります。

『常に住りて滅せず』

常住不滅の壽命であります、それであるに拘らず、

『然るに、今實には滅度に非ずして而も便ち唱へて、當に滅度を取るべしと言ふ』

此の『滅度を取る』といふことは佛の垂迹の中の所作である、さういふことを示したのであります。

それから以下が『利益』、どんな利益を説かれてあるかといひますと、

『如來は是やうの方便を以て、衆生を教へ化したまふ。』

それでは何故不滅であるのに滅すると示すのであるか、それは、如來が滅したまふと示さないと、衆生の損になる、如來が滅したまふといふことによつて、衆生が利益を受ける、如來がシヨツ中ゐらつしやると衆生が損になる、どんな損があるか、それを擧げられて、

『所以者何となれば、若し佛久しく世に住らば、徳薄き人は善根を植えず、貧窮く下賤くして五欲に貪り著み、憶想妄見の網の中に入りなん。』

佛様がシヨツ中おいでになると佛様を有難がらない、親がシヨツ中居ると親を頼りにして、親がどうかしてくれるだらうといふ風に向本氣にならない、だから滅せざれば損有りとなる。

『若し如來の常に在して滅したまはずと見なば、便ち憍恣を起し而て厭怠を懷き、難遭の想と恭敬の心を生ずること能はざらん。』

そこで入滅を示すのが衆生に於いて利益があるといふので、

『是の故に、如來は方便を以て説きたまふ。比丘よ、當に知るべし、諸佛の出世には値遇しまつるべきこと難し。所以者何となれば、諸の徳薄き人は、無量百千萬億の劫を過ぎて、或は佛を見まつるも有り或は見まつらざる者』

ありなん。此の事を以ての故に、我此の言を作す。諸の比丘よ、如來は見え得べきこと難し。斯ういつて教へるのであります。

『斯の衆生の等、如是の語を聞きなば、必ず當に難遭の想を生じ戀慕の心を懷き、佛を渴仰して便ち善根を種ゆべし、是の故に如來は實に滅せずと雖、而も滅度すとは言ふなり。』

以上が佛には値ひ難きことを數ぜられたのであります。

『又、善男子よ、諸の佛如來は法皆是の如し。』

どの佛様でも皆その通りせられるのである。

『衆生を度はんが爲なれば、皆實にして虚しからず。』

さういふ風に、生れるのでなくして生れると説き、滅するのでなくして滅すると説く、斯ういふことによつて利益することが出来るのであるから、非生の生を説き非滅の滅を説いても、決してそれは虚ではない、衆生を救ふための方便であるから悉くこれは不虛である、虚りではないのである。

以上が法説であります、本體の佛は常に常住にして衆生を慈愍し又お出ましになつてゐらつしやるのであります。

次に譬説——これを譬へていふと、

『譬へば、良き醫の智慧聰く達りて、明かに方藥に練れて善く衆の病を治す。』

これは佛様の方の應化を先にいはれたのです、此の前の「感應」の所では、感の方の衆生を先に示されて居りますが、今度の譬では、佛様の應化の方を先にいはれた、

これは佛みたやうなものです。『良き醫の智慧聰く達りて、明かは方藥に練れ、善く衆の病を治す。』

これは佛みたやうなものです。

『其の人、諸の子息多く、若は十、二十、乃至百を數ふ。』

天台大師は十といふのは聲聞で、二十といふのが緣覺、乃至百といふのは菩薩であると解釋されてゐますが、さういふ三乘の子供達がある。

『事の縁有るに以て、遠く餘の國に至りぬ』

これは過去の益物に譬へる、事の縁あるを以て、過去に入滅を現ぜられた、それに譬へられたのです。

『諸子、後に於て、佗の毒の藥を飲みしに、藥發りて悶え亂みつ地に宛轉べり。是の時、其の父還り來りて、家に歸れば、諸子毒を飲みて、或は本心を失へるも、或は失はざる者もあり。』

前のところは過去益物で、これからが現在益物であります、その中で諸の子が佗の毒藥を飲んだといふのは、煩惱に中てられたことであります、これは「機感」です、それに對して佛様がお出になつた。その父が歸り來つたといふのは佛様がお出になつたので、生ずるに非ずして生ずると現ぜられたのです。

『是の時、其の父還り來りて、家に歸れば、諸子毒を飲みて、或は本心を失へるも、或は失はざる者もあり。遂かに其の父を見て、皆大ど歡喜びつ、拜み跪きて問訊なく、善くも安穩に歸りませるよ、我等愚痴にして、誤りて毒藥を服みぬ。願くば救療して、更に壽命を賜はれよかし。』

機感の者がお願ひする、どうか御説法して頂きたい——お藥をいたゞきたいといつてお願ひした。

『父、子等の苦惱是の如くなるを見、諸の經の方に依りて、好き薬草の、色も香も美味も皆悉く具足せるものを求めて、搗き篋ひ、和へ合せつ、子に與へて服ましむ。』

これは佛様が御説法をせられる、その御説法を譬へたもので、『聲益』に譬へられたのであります。

好き薬草の色も香も、それから美味も悉く具はつて居る御説法、その薬は御説法に譬へたので、色といふのはどういふものだからといひますと、色は外部から物を見て分つものでありますから、これは戒を譬へられた、それから香は静かに匂ふものですから、心を鎮めなければわからないもので、これは定を譬へられた、それから味は口中に入らなければわからない、これは心の中の悟りで即ち慧を譬へられた、即ち色・香・味といひますのは、戒・定・慧の三學であります、これは何時も申しますやうに、戒堤・定水・慧月、斯う譬へます、煩惱の水は其儘にしておいたならば、どツかに流れてしまふ、氾濫する、そこでこれ／＼のことはしてはいけないといつて堤を築く、その堤が戒です。その堤を築くとその中に水が漫々とたゞえる、これを定水といつて堤の中の水は静かになる、静かになつた水が定の譬へで、そこに智慧の月が浮ぶ、これを戒堤・定水・慧月といふ、或は又戒によつて煩惱の賊を捕へる、それから定によつて煩惱の賊を縛る、慧によつて煩惱の賊を斬つてしまふのだと、斯ういふ譬があります、何方にしても戒といふものが一ばん先で、戒は何うしてはならぬ、斯うしてはならぬと外部から決めるので、これを色に譬へた、定は心を一境に集めて、慮を静める定水であるから、これを香を聞くのに譬へ、智慧は佛のをうけるのですから、これは味ひに譬へた、佛の教にはこの戒定慧の三が自ら具はつて居るのであります、それを子に與へて服せしむのであります、但、與へて服せしむと共に、

『而ち是の言を作さく、此の大良薬は、色、香、美味、皆悉く具足せり、汝等服ふべし、速かに苦惱を除きて、復衆の患無けん』

これは佛が勸誡の兩門を以ての化に譬へられる、これをお上りなさいと勸める、これを服んだならば苦しみを除くことが出来るのだぞお服みなさいと勸めて、服まなかつたならば苦しむぞ、斯ういふ誠めること、勸めること、此の二つを佛様はきつと言つておきかせになるのであります。

『其の諸子の中に、心を失はざる者は、此の良き薬の、色、香、俱に好ききことを見て、即便ち之を服ひ、病盡く除き癒えたり。』

これは利益が虚しからざることをいはれたのです、

『餘の心を失へる者は、其の父の來れるを見て、亦歡喜び問訊ねて病を治さんことを求索めきと雖、然も其の薬を與ふるに、而ち肯て服ひず。』

これは、佛様が入滅を示さなければならぬといふのは、どういふ譯であるかといふと、その佛の教を在世でも用ひないものがある、さういふ場合には先づ佛はおなくなりになつて、入滅して渴仰の心を作させるのであります、その爲めに入滅せられるので、その入滅せざるべからざる所以を、これはお舉げになつたのであります。

『所以者何となれば、毒氣深く入り、本心を失へるが故に、此の好き色香ある薬に於ても、而ち美じからずと謂へり。』

そこで父は、

『是の念を作さく、此の子愍むべし、毒の爲めに所中れて、心皆顛倒せり、我を見て喜びて、救済を求索むれ雖も、是やうの好き薬をだに、而も肯て服ひず。我今當に方便を設りて、此の薬を服ひしむべしと。』

そこで佛様が去つて行く、それは入滅を現するといふことを譬へられたのであります。『即ち是の言を作さく、汝等當に知るべし、我今衰へ老いて、死の時已に至りぬ。是の好き良薬を今留めて此に在く、汝取りて服ふべし、差えじと憂ふること勿れ。』

これは死すべしといふことを譬へられたので、此の中に大切なことがあります。

『是の好き良薬を今留めて此に在く、汝取りて服ふべし、差えじと憂ふること勿れ。』

此の薬さへあつたならば、即ち色香美味——戒・定・慧三學の具足したる佛の教を遺しておいたならば、必ずこれを用ひれば病は治るぞ、

『是の教を作し已りて、復他の國に至り。』

佛は入滅してしまはれた。

『使を遺して還り告げしめ』

これが大切なところであり、其の使は、

『汝が父已に死せりと。是の時、諸子、父の背き喪りぬることを聞きて、心大ど憂ひ惱みつ、而ち是の念を作さく、若し父在しませば、我等を慈しみ愍みて、能く救ひ護りたまはんに、今は我を捨て、遠く他國に喪りましぬ。自ら惟へば孤露にして、復恃怙むところ無しと。常に悲じき感を懷き、心遂に醒め悟りつ。乃ち此の薬の色、香、味

ひの美しきを知り、即ち取りて之を服ひつるに、毒の病皆癒えたり。』

これが、佛がおかくれになつて残された戒・定・慧を具足したる薬である、その薬は小乗の薬、權大乘の薬、それから法華經迹門の薬、法華經本門の薬、これだけ薬の種類がある、みな是好良薬であつて、色香美味とつて居る、『今留めて此に在く』、『此に在く』とはどういふことであらうか、所に約しますると、これは娑婆世界、特に閻浮提——此の世界である、時に約すると正像末の三時、これが『此』といふことである、それから『使を遺して』といふ此の『使』は何であるか、斯う申しますると「大涅槃經」といふお經があります、その「大涅槃經」の中に「四依品」といふのがあります、『依』といふことは依止といふことで、依り所、標準です、此の依り所に法の四依と人の四依とと二つがあります。



『法四依』といふことはどういふことであるか、『人四依』といふことはどういふことであるか、といひますと、人四依といふのは、これは位であります。

- 初 依
- 二 依
- 三 依
- 四 依

『初依』といふのは凡夫なのです、凡夫であるけれども法の依り所になるやうに、代表的修行をする凡夫なのです、それからだんく菩薩の位が上にまゐるのでありますが、法の依り所となる人間が四種類ある、佛がおかくれになつてから後、正・像・末の衆生はどうするか、それは俺の代りになるべき四種類の依り所の人間を、死んでから後に遣はす、それが此の使なのであります、其の遣はされる人間は、必ず法の四依といふものによつて教を説く、『法四依』といふことは、どういふことだといふと、

依レ法不レ依レ人

依レ義不レ依レ語

依レ智不レ依レ識

依三了義經二不レ依三了義經一

必ず佛の滅後に依り所となるべき四依の人は法四依による、それはどんなことだといふと、『法ニ依テ人ニ依ラザレ』——佛の教を根本にして、佛以下の人間のいふ所を依り所にしない、それが正しい依り所になるところの第一の資格であります、それから次には佛のお經文に依るけれども、そのお經文の義によつて濫りに語だけに依らない、それから、それではどうして義理を見るのかといひますと、それは佛の智慧といふものを標準にして、お經文の義理を見る、菩薩以下の識には依らない、佛様の智慧といふものを物指にしますので、それでは佛様の智慧がどこにあるかわからないではないか、といふならば、『了義經ニ依テ了義經ニ依ラザレ』、佛様の智慧は何によつて知ることが出来るかといふならば、佛様のお經は澤山あつて、その澤山なお經の中には矛盾したこともあるが、それを總括して了つて、

矛盾したこともみんな大觀したならば、チャント一つのものを説かれたことがわかる、それが了義經である、如來一代の御説法の趣意が根本的にはつきりわかる、義理を領解することの充分に出来るお經、それに依るのであります、如來一代の御説法の義理が充分に領解することの出来るお經に依つたならば、佛の智慧に依ることが出来る、それによつて外のお經を解釋すればよい、それからその經の義理に依つて外のお經の文に依らない、さういふ法の四依といふものに依る人が、それが人の四依だ、斯う「涅槃經」に説いてあります。

今此の「如來壽量品」に、

『使を遣して還りて告ぐ。』

といふ使は、此の「四依品」の四依の人であります、此の四依の人は小乗の四依、大乘の四依、それから迹門の四依、本門の四依と斯う四つの四依があるのであります、四つの薬を四類の四依が弘通する、その弘通する時は正像末の三時に弘通する、正法の時是小乗及び權大乘の薬を以て世の中の人を救ふ、像法の時迹門の四依が出て迹門の薬——是好良薬を以て衆生を救ふ、末法の時本門の四依が本門の是好良薬を以て、そして末法の衆生を救ふので、それははつきりと決まつて居るのであります、今日蓮聖人は即ち本門の四依であつて、本門の是好良薬南無妙法蓮華經の五字七字の三大秘法を以て救はれるのであります、さういふことが自らこゝに示されて居るのであります。

それから、

『其の父、子の悉く已に差ゆることを得つと聞き、尋て便ち來り歸りて、咸く之に見えしめたらんが如し。』  
といふのは即ち未來益物といひまして、佛様がおかくれになつてから後でも、遣使還告によつて、正法像法の時には、

小乗や大乘の藥を服して、そして佛様はいらツしやらないが、信仰によつてお目にかゝることが出来る、そして佛様は彼等に安心をお與へになることが出来るのであります、それは

『其の父、子悉く已に差ゆることを得つと聞き、尋て便ち來り歸りて、咸く之に見えしめたらんが如し。』  
といふ未來の益物であります。

『諸の善男子よ、意に於て云何ぞや。頗し人の能く此の良き醫の虚妄の罪を説くもの有らんや、不や。不なり、世尊よ。佛言はく、我も亦是の如し、成佛せしより已來、無量無邊百千萬億那由佗阿僧祇の劫なり。衆生の爲めの故に、方便の力を以て、當に滅度すべしと言ふも、亦、能く法の如く我が虚妄の過を説く者有ること無からむ。』  
以上の中、『佛言はく』の最初のところは過去の益物、『方便の力を以て』といふところは現在益物、『亦能く法の如く我が虚妄の過を説く者有ること無からむ』といふのは、佛は衆生を利益するのに、實に在しますのに始めて生れたといひ、決しておかくれにならないのにおかくれになつたといふ、さういふのは衆生を利益する爲めの方便として必要なので、その方便によつて衆生が皆、常にまします佛に値ふことが出来るから、語は虚妄であるが利益は本當に利益するのであるから、決して虚妄ではないのである、斯ういふ『不虛』をば譬の終結の語に遊ばされたのであります。  
以上簡略ながら長行だけをお話しました、來月は「自我偈」にはいります。

如來壽量品偈頌(自我偈)科文

『我れ佛を得てしより』の下

法説

三世益物

過去益物

成佛已久

中間益物

常住ニ此處

現在益物

非レ生現レ生

非レ滅現レ滅

未來益物

未來機感

常住不滅

不見因縁

得見因縁

第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

『汝等智有らん者』の下

結三利益不虛

『譬の善き方便もて』の下

譬説

開譬

過去益物

『狂子を治せんが爲の故に』の下

現在益物

『能く虚妄を説くものなきが如く』の下

皆實不虛

『我も亦爲れ世の父』の下

合譬

合二過去益物

『凡夫の顛倒せるを爲て』の下

合三現在益物

『毎に自らは是の念を作す』の下

合三皆實不虛

前には散文で如來常住の事を説かれました。今度は韻文で、重ねて其の義理を説いて、散文に説かれた處に洩れてゐる所を、韻文の方で説かれ、又韻文の方で仰しやつてゐない處を散文の方により廣く説かれた處もある。そこで重ねてその義を述べんと欲して偈を説いて宣はく、とあつて歌のやうな詞でくり返されるのであります。

始の所は法説といつて、直接法の上から御説きになつたところをば、歌の様にして二度お説きになつたのが、爲に法説を頌す、その中に第一が、三世益物を頌すと申しまするので、過去、現在、未來の三世に涉つて、佛は徹底的に衆生を教化遊ばす、益物といふのは物は衆生といふことです。即ち常住不斷の大慈悲の化導、それをお説きになる、

そのまた第一が過去益物で、過去に一切の衆生を利益遊ばされたそれが過去の衆生教化、それから現在益物は現在に佛が世におでましになり、又お洩れになつて、そして一切衆生をお導きになる、それが現在の衆生教化であります、それから未來益物であります、これは釋尊がお洩れになつてから後で、それから後衆生教化の化導を遊ばされること、さういふ様に、事實は常にまします佛ではあるが、現はれたり、かくれたりせられる、事實いらつしやるに係はらず、おかくれになつたり、お現はれになつたりせられるのだ、それに依つて、種々に衆生を利益するのであるからと、お教へになつてゐられて、

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて宣はく、

我佛を得てしより來た 經にし所の諸の劫數は 無量百千萬 億載阿僧祇なるぞかし。』

これは過去益物の御金文であります、それで、こゝには只無量百千萬と書かれてありますが、散文の方で此の前に申しましたが、五百塵點久遠の昔、その久遠の五百塵點は譬へであつて、事實は無始無終の昔で、世の始めこのかたの教である、自我偈とは、此の偈のはじめに『我佛を得てしより來た』とある。そのはじめの『自我』の二字をとつて自我偈といふのであります、『我』とは久遠實成の本佛、釋尊を本佛と申上げるのであります、それで『釋尊が佛を得られてから』釋尊が佛を得てしよりといふのは、お悟りになつた始からである、この佛には、この前も御話し申しましたが三身がある、『法身』といふ眞理の身體、『報身』といふ智慧と功德の身體、それから『應身』といふ慈悲の身體、その三身が成就されてからこのかたといふことではありますが、それが無量百千萬億載阿僧祇であるといふ、それは散文で書かれた様に五百塵點の昔に我は佛を得たのである、けれ共それは譬へであります、事實は無始の昔から常に在



します佛なのである。これは過去益物の中の、『成道されてより久しいのである』、五百塵點の昔、事實は無始の昔から久しいのであるといふこと。それから以來

『常に法を説きて、無數億の衆生を教化して、佛道に入らしめつ、爾より來ぞ無量の劫なる』

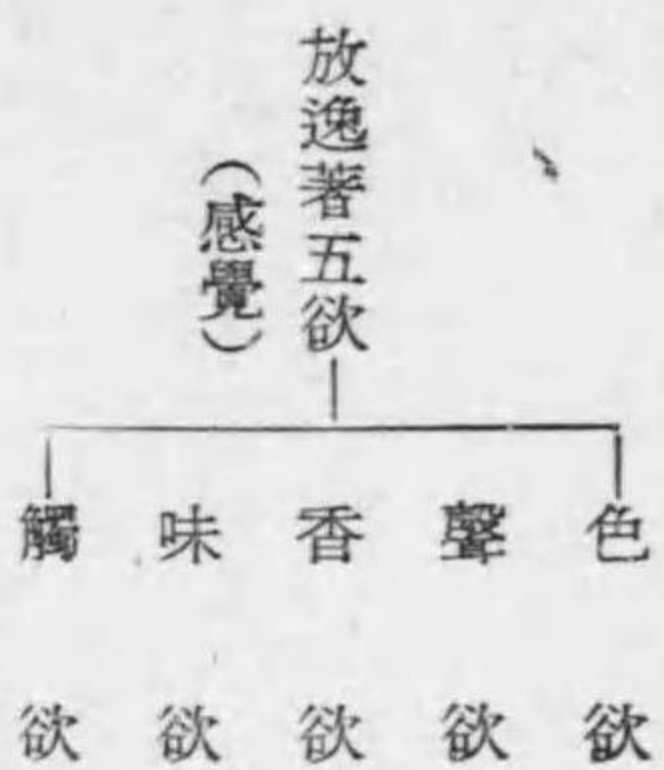
これが中間益物、これは五百塵點の昔から大聖釋尊がお生れになつた時まで、その間が『中間益物』であります、その五百塵點劫の長い長い間に、十方三世の佛の姿を現はされた、そして十方にも三世にも常に無數億の衆生を教化して、悉く佛の道においれになつた、それでは、何處にその佛がいらつしやるのであるか、それをその次にお説きになつて居ります。

『衆生を度さん爲めに故て、方便して涅槃を現せど、而も實には滅度せず、常に此に住りて法を説く、我常に茲に住れども、諸の神通力を以て、顛倒の衆生をして、近しと雖見えざらしむ』

中間の一切衆生を利益される、それで十方國土の佛となり、或は三世の佛となり、そして無量の衆生をお救ひになつた、それでは何處でお救ひになるのであるか、『衆生を度さん爲めに故て方便して』、その間三世の佛、十方の佛様がみんなお現はれになつたり、おかくれになつたりする、方便として涅槃するが、『而も實には滅度せず』五百塵點以來の佛は常におなくなりになることはないのである。それは方便して生れたり、涅槃に入られたり見せられてはゐるが實には不生不滅で、生れも滅れもせられないのである、『常に此處に住まりて法を説く』、『我常に此に住まりて法を説く』、『此處』とは、何處であるかといふと、それは娑婆世界である、法華經以前の御經では佛は、この娑婆世界は一番いけない世界で、十方の衆生の中でも、一番罪の多いもの、一番佛縁の少ないもの、それらが娑婆世界に生れる、所

謂罪業の深いものが住んでをる處であるから、穢土である、西方十萬億土には極樂世界がある、また十方にそれにおかれないさまぐの佛の國があるのである、此の娑婆世界には佛はあんまり生れない處であると、そんなふうにしておかれたが、この法華經に至りましては却つて娑婆世界は佛の本土である、佛の眞正にいらつしやる處は娑婆世界である、とお説きになつて居られる。

それぢやなぜ我々衆生は、その釋尊にその本佛にお目にかゝることが出来ないものであらうか、それは佛が、『諸の神通力を以つて、顛倒の衆生をして、近しと雖も而も見えざらしむ』、娑婆世界に居られれば一番我々に近い處であるではないか、然るに其一番近い娑婆世界に常住していらつしやる佛が、佛の神通力でそれを見せない様にしてをられるのである、それはどういふ譯であるか、それは佛が神通力だけで、さうしてをられるのであるかといふと、必ずしもさうではない、顛倒の衆生をしてとある、佛に對し深い信仰があつてこそ佛を見るのである、佛が在つしやること、分らないことにも二つある、その中の一つは『顛倒の衆生』といふ頭に有り難くない二字がついてゐる、即ち逆様に見てゐるといふことである、目が逆様に附いてゐるからである、なぜ逆様に見るのであらうかといふと、衆生は尊い心があるものをそれを尊いとしなないで、尊くないものをば自分の眞物の様に思つてゐるのである、『放逸にして五欲に著し惡道の中に墮ちなん』放逸著五欲、五欲は物質に對する欲、物を見る欲、聲を聞く欲、物の薫りの欲、舌に味ふものゝ欲、身に觸るものゝ欲、肉體にぶつかるものゝ欲、すべて感覺的なもの、感覺をもつて自分が觸れると、快いもの、その快いものに執着する爲めに、すべてをわすれる、それが放逸で、



只それぢやア、その五欲即ち感覺的欲を無くすることがよいのかといふと、必ずしもさうではない、法華經の流通分の觀普賢經には『不斷煩惱不離五欲』とある、煩惱を斷ぜず五欲を離れず、離れないで佛の事を行ふ、さういふことが出来る、けれども五欲を離れないといふことはよいけれ共、五欲に著してはいけない、それが色聲香味觸の肉體に感ずる事柄、それがこびりつくのである。このこびりつく、こういふ執著といふものが附いてゐるために、放逸と規則なしで、欲しい儘に自分の理性を忘れてしまふ、もし本心に住してゐれば、決して五欲などに追ひ使はれないのであつて、それも一つの佛性のひらめきであります、それを忘れてしまつて、そして肉體から來る五欲に著する、處が人間の心といふものは、多く顛倒してゐる、身體が御主人であるか、心が御主人であるか、心の中でも、眞正の佛性、佛性は通俗的には良心みたいなものである、それが御主人であるか、或はその感覺にぶつかる處の心が御主人であるか、孰れが御主人なのかといふと、佛からいへば身體よりも心の方が御主人である。快感よりも佛性の方が御主人である、それがあべこべになつてゐる、それが顛倒の衆生である。顛倒の衆生は、佛性は常に自分の住んで居る娑婆世界にいらつしやる、それ程近いのであるけれ共、こちらの目が逆様になつてゐるから見えな、顛倒の衆生の方は我

々の方である、顛倒の衆生には佛が在しますといふことを、佛様が御見せになつてもよかりさうなものであるが、それを見せない、佛の神通力を以て御見せにならない、それが佛の「慈悲」である。『近しと雖も見えざらしむ』衆生は佛は此處に在します、他の處には在しませんのである、娑婆世界に在します、さらに最も一番近い處としては、自分の心の中に在します、佛は、一番近い衆生の心の中に、在しますのである、が、それがわからない、以上が過去益物の中の常住此處を頌された。

五百塵點以來、佛は常住にまします、そして、十方三世に姿を現はして、生に非ずして生を現じ、滅に非ずして滅を現じ、様々な姿を現じた、それでは何處に現じたか、それは娑婆世界に現してゐられる、その他の極樂世界、若しくは密嚴淨土といふ様な處は、みな佛様の寄留地であつて眞正の佛様のいらつしやる本籍の處ではない、それでは、娑婆世界なれば見えさうなものである、處が見えない、それは何故であるか、目が逆様に附いてゐるからである、その逆様に目が附いてゐるものには、見せても何にもならないからである、佛は近くにいらつしやるのであるが、見える様にしておられない、以上が過去益物である。

それから次が現在益物でありまして、そこで釋尊が御現はれになるやうになる。そのお現はれになる佛は、どういふ風にお現はれになるのであるか、その原因はどうか、そのお現はれるになる佛が又おかくれになる、それは又どういふ譯でおかくれになるのであるか、此處にそのお現はれになる理由、そのおかくれになる理由を述べられて居られる、そのお現はれになる理由をお説きになつた處が

衆見我滅度 廣供養舍利

第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

咸皆懷戀慕 而生渴仰心  
 衆生既信伏 質直意柔軟  
 一心欲見佛 不自惜身命  
 時我及衆僧 俱出靈鷲山

以上が非生現生である、そこで新しくお生れになるのではない、けれ共、それがお生れになつた様にお現はれになるのだ、で、先刻申上げました様に、此の御經は長行といふ散文の方でお説きになつた處をば、その通り重ねてお説きになつた、又韻文でお説きにならない處を散文でお説きになり、散文でお説きにならない處を韻文でお説きになる、始の處の五百塵點の處は散文で説かれたから韻文では説かれない、それから六或化導、これは前にお話したが、佛が佛の姿だけでは功德をお説きにならない、佛の姿でも、功德をお説きになることもあれば、又、佛以下の九界の姿でお説きになることもある。又佛の境界の他に、九界にも現はれられる、佛の自在神力によつて、お説きになる、その姿を委しく御説きになつた御文『或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す』とあつた、この事はこの偈ではお説きにならない、その代り散文の方で説かれてない方の事が説かれてある、此處では、佛様がお生れになつておかくれになる處を、おツしやらなくてはならない筈であるが、處が此處の處は、さうではない、衆生は滅度を見て廣く御舍利を供養し奉り、咸く戀慕を懷き、これは大聖世尊がおかくれになつた事を、お説きになつた、そして今一切衆生が世の日月とお慕ひ申した大聖、今その日月が、落ちたのである、何をもつてか、此の慈父の大慈大悲の御化導をしんだものであらうか、といふので、その火葬にした御舍

利をば、處々に塔を建て、御供養申上げた、一面肉體の方の御骨を御供養するのみならず、又佛の法の御身體、即ち法身の御舍利を供養し、世の中に廣く經文を流布し、そして肉體のおん舍利又は法の御舍利が廣まつて、それによつて、佛様の御利益をひろめる、法の御利益をひろめる、恰度渴したものが水を飲むが如き渴仰がなくてはならない、佛の大智大慈がなくては我々衆生は救はれる事が出来ない、渴したものが水を求めるが如く心に渴仰の心を生じ、さうして佛に信伏する、その信伏するといふことは、どんな心ばえであるか、それは質直にして心柔軟の信から来る信仰、その條件の信仰必ず質直なる心、質直なる心が大切である、質直なる心、その質直なる心は自ら佛の大慈大悲、佛の大智慧の前に隨順する、佛の大智慧に向つて争はうとしない、佛の大慈大悲に向つて争はうとしない、まツすぐな心を持つてをれば必ずそうなる、質直にして心柔軟となる、そのものが『一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命をも惜まず』一心に、御佛の御功德を仰ぐ、佛を渴仰する、佛に見え奉らんとする心の外に何物もない心、その佛を見んとする心の他に何物もない、『自ら身命をも惜まず』、自分の身體の方を主にしたるもの、自分の身體を自分だと思つてゐる心、それが一番いけない、それで、その顛倒を無くするには身命といふ、身をば惜まない、身の命を惜まないといふことが、信仰の一番必要なものになるのです。

不惜身命といつても必ず身體を無くすることではない、かの善導大師が阿彌陀様の處に行きたい爲に柳の木から落ちたといふことがある、又善導大師に限らず支那にも日本にも極樂を慕つて命を捨てた人がいくらかもあるが、さういふのではない、ではどういふことかといふと、……それは先刻申した様に、心と身體とどツちが、自分の眞正の主であるかといふと、それは身體の方は眞正の主ではない、眞正の主は一心に佛を見奉る心の方が、自分の主である。こ

の一心に佛を見奉る心が『佛性』に通じてゐる、その『一心欲見佛不自惜身命』その『至心』の心、それが『唯一心』である、それが至心である、その唯一心至心、絕對の一心、その一心が佛を見奉らんと欲するといふ心に決まつた時、之をば『感應』の時といふ。衆生の方が佛を求めて自分の命を惜まず、命がけて佛を求める、世間には普通の色戀でも命懸でやるものがさらにある、心中なんていふものは、しよつちゆうやつて居る、まして佛を見奉らんが爲に命を惜まないといふ感その感がある時、佛は必ず實在の姿をお示しになる、其至心の心の上にお示しになる、信仰の心の中にお示しになる、それが應で、その時が『感應』の『時』である、『我及び衆僧俱に靈鷲山に出づ』、『我』とは佛様、我とは本佛、『及』は菩薩、『衆僧』は二乗である。日蓮聖人はかういふやうにお説きになつた、我は本佛釋尊である。及は菩薩、我及びこの及びで菩薩を攝めて居られる、衆僧は二乗である、『俱』とは六界である。合して十界、それだけが『靈鷲山』にお出ましになるのである。これは、法華經をお説きになりました時分に、靈鷲山でお説きになつた、靈鷲山といふ山はどういふ山かと申しますと、この山の形は鷲の形みたいな山である。そして形から鷲の山といふばかりでなく、此處には鷲が住んで居つて、様々な鳥を獲つて来て喰らふ鷲が澤山住して居る、それであるに係はらず此處には、昔から覺りを開いた仙人が澤山に居つた山である。鷲が衆鳥を獲り喰らふ山であつて、そして又仙人が居る山であると、そういふ條件が附いてゐる、之はどういふことを示してゐるか、これは鷲の山は鷲は煩惱である。それから仙人が住して居る、それは法性である、法性と無明と二つが一所に存在する、それは煩惱即菩提、死即涅槃といふことを示してゐる、この娑婆世界といふものも、矢張りその通りで即ち娑婆世界を示して居る、娑婆世界は衆生から見たなれば煩惱の世界である、處が佛の方から御覽になれば此處は常寂光の本國土である、佛様には

この方が本國土である、それは單に娑婆世界のみならず、靈鷲山のみならず、我々の人間の身體もそうである、人間の身體も、肉體の方が御主人になつたなれば鷲が鳥を喰らふ様なものである、若し佛性が主人になつたなれば仙人の住所と同じ様なものである、その二つのものが一つの處にある、その靈鷲山にお出ましになる、煩惱即菩提の靈鷲山、その靈鷲山に佛がお出ましになる、その靈鷲山がほんとうの法性世界、我々の方からは煩惱に見てゐる世界、それがこの法華經の寶塔品から後の囑累品の處までの十二品である、此の十二品の中で此の娑婆世界や靈鷲山はどんなことになるかといふと、まづ此の娑婆世界は寶塔品で三變土田して、八方四百萬億那由佗の三千大千世界即ち三千二百萬億那由佗の三千大千世界までもひろがって、清淨の國土となり、十方分身の佛が、その中に充ち満ちたとある、即ち三千二百萬億の大千世界が娑婆世界となつて、その中に佛が充滿し、全く佛様の國となつてゐる、その中心が娑婆世界で、そのまた娑婆世界の中心に、靈鷲山があつて、その虚空で、釋迦佛が法華經を説いてをられるといふのであります。

すなはち佛と菩薩二乗六道の凡夫が、同居してゐる娑婆世界が、今やそのまゝ法華經の説處となつては、常寂光の淨土となつてしまつた、それと同じく肉體と精神とを持つて居る人間の身體も、その精神の方の一番根本の、法性によつて淨化されるのを、『一心欲見佛不自惜身命』といはれた、『一心欲見佛』は法性で、『不自惜身命』は煩惱即菩提となること、法性に依つて煩惱を法性化してしまふことであります。

『一心欲見佛不自惜身命』と、煩惱の身を惜まない心、それは煩惱の身を法性化してしまふ心である、さういふ時に本佛及び菩薩が、此の世界にお出ましになる、それを日蓮聖人はお説きになつて、『靈鷲山とは御本尊也』と解釋され

て居ります。これは大聖人が弘安元年身延におかれまして、六老僧始め御直弟子方の爲に御說法になつた「御義口傳」に書かれてあります、この「御義口傳」と申すのは、大聖人の御說法なされたる要領を、日興上人がお書きとりになつたものであります、その「御義口傳」に、「自我及衆僧俱出靈鷲山は、靈山一會儼然未散の文也、時とは感應末法の時なり」自我及衆僧は單なる感應でなしにそれは末法である、我は釋尊及は菩薩衆僧は二乘、靈鷲山は寂光土である、「時に佛も菩薩も衆僧も俱に靈鷲山に出づる也、本門事の一念三千の御文也、御本尊は此の姿を顯し出し玉ふなり」あの十界の御本尊に顯はれてゐるのは、中央が南無妙法蓮華經である、それはどういふ事であるかといふと、「南無」は「歸命」「妙法蓮華經」は佛の悟りであります、即ち佛の御心で、その佛の實體を一心に見奉らんと欲して自ら身命を惜まずといふ事が、「南無妙法蓮華經」といふことで、その南無妙法蓮華經に、我々が一心に歸命したその時、十界の佛菩薩二乘六界所謂十界悉く、其信仰の前に顯はれたまふのである、「我及び衆僧俱に靈鷲山に出づ」、そこで始めてお現はれるになるのではないが、所謂、非生現生で、常に在します本佛にはまします、信のないものには、近しと雖見えざらしめられた、たゞ信仰する心の柔軟なるものに向つて始めてお現はれるのである、南無妙法蓮華經は佛のほんとうの法界を拜する唯一の條件であります、そも／＼妙法蓮華經とは、法界のありとしあらゆるものは、こと／＼妙法の蓮華でないものはない、みなその法を離れてゐないといふことで、法とは一切の存在は、因果によつて存在する、それは恰度、蓮華が華と果とが、同時に存在してゐる、外の草木は、或は花が咲いてから後に葉がなる、或は葉がなつて華がさかない、或は花が咲いて葉がならない、或は花が多くて葉が少いなどいふやうなのがある、蓮華は、華のつぼんでゐる時から、その中に蓮の實はすでに存在してゐる、原因結果は此の蓮華のやうなもので、因

ある處必ず果あり、因の終りが果、果のはじめが因なのであるから、蓮華の花果の同時なるが如く、因果は俱時であるのが、此の宇宙の間の有ゆるもの、法則であるといふので蓮華といはれ、法といふのはあらゆる存在するもので、所有存在するものは、悉く蓮華の因果の理法に據つて存在する、然もその存在するものには善いものも悪いものもある、迷つてゐるものも、悟つてゐるものもある。それには因果の理法が具はつて、いはゆる善因善果、惡因惡果、迷因迷果、悟因悟果といふ様なことによつて存在してゐるが、善といふも惡といふも、迷といふも悟りといふも、決して實體が異つたのではない、たゞ用らきが違ふにすぎないのである、昨日までの惡人も、その惡をさとれば今日からでも善人になることができる、迷つてゐる心では、一切みな迷の緣であるが、悟れば迷も却つて悟の緣となる、それと同様に迷へば悟りも迷となる、佛はその一つの心が善惡、迷悟の用らきをするといふことを徹底して覺られたから、所有迷つてゐるものも、悉く悟りのものとしてしまふ力を持つておいでになる、よく毒を變じて藥となす之を稱して妙となすといつて、悪いもの、迷ひのものも、善いものになり悟りのものになるし、また善いもの悟りのものも迷へば悪いもの、迷ひのものとなる、しかもその體はかはらないから、それを妙といふので、一切の法はみな妙法、善も惡も迷ひも悟りもみな蓮華と因果の法によるから、妙法蓮華經である。その道理が宇宙を一貫して居るからこれを經といふ、かく宇宙は妙法蓮華經であるとたゞ佛のみ悟り出された、かく法界全體みな妙法蓮華經である、佛のみよく悟り、佛のみよく自在にそれを應用することが出来る、即ち妙法蓮華經と一つになつてゐられる。それだから佛の所作は南無妙法蓮華經である、佛の體も南無妙法蓮華經である。眞正に妙法と一つになつてしまつてゐる人格、法と一つになつてゐる人、所謂人法一如、そういふことになつてゐられるものは佛の外にない。そこで根本の佛の名は南無妙

法蓮華經であります。

かやうに、南無妙法蓮華經といふことは、佛の本體の名であり體であり、心であり用らきであります、個々の佛の名前は、或は釋迦牟尼佛、或は阿彌陀佛、或は藥師如來、或は大日如來等とあります。これ等はみな佛の澤山な功德のある中の、一部分の功德を示した名前ではないのです。例せば、お釋迦様の如きも、釋迦氏の族から出た智慧の人が、牟尼即ち寂默の禪定に入つて、さうして菩提樹下に默然として覺りを求めて、それで遂に正覺を成ぜられた、そこで釋迦牟尼佛即ち能仁寂默覺者といふ、さういふ名前の佛は、一つくの假の佛であつて、一切の佛の根本の名ではない、ほんとうは釋迦牟尼佛も、阿彌陀如來も、藥師如來も、大日如來もみな南無妙法蓮華經なのであるぞといふので、南無妙法蓮華經が本佛で佛のほんとうの御名前である、御本尊の中に、南無妙法蓮華經を、光明點といふので書いてあります、あれは佛は智慧の大光明をもつて十方三世の一切衆生を照し玉ふ、その佛の智慧をあらはしたまふ報身、また同時に、慈悲の光明を示された應身を示されたもので、同時にまた妙法蓮華經は佛の眞理の身體で、それをみづから證してゐられる法身であります。妙法蓮華經の法身だけは、我々も持つてゐる、佛の身體も我々衆生の身體も皆妙法蓮華經が本體であることは同じです、妙法蓮華經の體だけなれば、我々も佛も同じである、本佛とはちつとも違ひはない、しかし妙法蓮華經の本體に徹底した功德、迷悟善惡の諸法を徹底して、悉く之を功德化してしまふ、妙法蓮華經の所有功德をみんな自分の功德にしてしまふ、それで妙法蓮華經の眞理と一つになつた、其は妙法蓮華經に徹底した南無した、さういふ慈智を持つていらしやるそれが佛様であつて、さういふ慈智を持つて法界を御覽になると、一切衆生は同じ體を持ちながら迷つてゐるのだから、捨てゝはおけないと、一切の智慧の本である、佛の一念三千の南無妙法蓮華經の覺りの玉を、大慈悲をもつて文字音聲の袋に入れて、末代幼稚の吾等の頸にかけさしめたまふたのであります。

あの御本尊の姿は、南無妙法蓮華經といふ佛の本體、智慧、慈悲の光明が、左右の十界三千世界の諸法を照らす、十界三千の諸法がそれによつて、みな光明功德の體となる、それがあの御本尊の御姿でありまして、即ち南無妙法蓮華經の佛の一念、この一念は單なる主觀的の一念ではない、南無妙法蓮華經といふ一念、この佛の一念は、直ちに十界三千の諸法を照らして悉く功德化し佛乗化してしまふ一念で、それが本佛果上の一念三千で、その姿が南無妙法蓮華經の大曼荼羅であり、この『時我及衆僧、俱出靈鷲山』の姿であります。

その中心を、法華經の本門八品の中に御示しになつた、我々が眞にその佛を見奉る爲に、身命を惜まなくなつたならば、恰度妙法蓮華經に命を捧げてしまふといふことになる。

我々の生命は自分の欲望の爲に生きて居る自分ではなくて、佛のお悟りになつた妙法蓮華經の眞理の爲に生きてゐるのである、そのほうが眞正の命である、この信念が決定した時、佛の無窮の命を自分のものにする事が出来る、『一心欲見佛不自惜身命』、それによつて始めてあの御本尊の中に入ることが出来る、その時に始めて我及衆僧俱に靈鷲山に御現はれになる、我々の心の中の貪欲、心の瞋、心の愚痴、心の恐怖、みな悉くこの御本尊の中にはいる、貪欲は鬼子母神が代表する。瞋恚は提婆達多、愚痴は龍王、詭曲の心は阿修羅王が代表する。どんな瞋恚の心でも佛をあやまち奉つた提婆達多以上はない、それがみな法華經の妙を顯はすものとなつた、かやうに絶大なるものが御本尊の中に顯はれてゐる、その御本尊の中に南無妙法蓮華經の中に十界は存在して居る、十界は南無妙法蓮華經の爲に存

在してゐる、その南無妙法蓮華經の功徳を顯はす爲に存在してゐる。

我が迷ひみな悉く御本尊の中に收められてゐる、そして南無妙法蓮華經の生命中に淨化せられる、そして我々の身も心も、あの御本尊の中に這入つてしまふ、自分の所有瞋恚、貪欲、邪見、様々なもの自分の持つてゐる善いもの悪いもの、みな悉く御本尊の中に入つて淨化されてしまふ。

我心、御本尊の如くあるべし、その淨化された心、それが生にあらすして始めて生を現はす事、所謂非生現生である、我佛を見奉る事即ちそれである、この御文は現在益物を示された御文になつてをります。

それから次は非滅現滅で

『我時に衆生に語らく常に此に在りて滅せず、方便の力を以ての故に、滅と不滅ありと現すと、餘の國に衆生の、恭敬し信じ樂ふ者あらば、我復彼の中に於ても、爲に無上の法を説く、汝等此を聞かすして、但我滅度すと謂へり』滅にあらすして滅を現すをお頌ひになつた、衆生が信仰を起したその時、佛がお出になつて、眞正の譯を御答へになる、實は我此處に在りて滅せず、滅に非ざる佛である。けれども方便の力をもつて滅と不滅を示すのである。

曩に滅を示した、それから、柔和質直にして心柔軟なるものに對しては滅しないと示した、それは方便の力である、それは此の娑婆世界に存する衆生だけではなく、一切十方の衆生に對して矢張り同じである。

『餘の國に衆生の恭敬し信じ樂ふ者あらば、我復彼の中に於ても、爲に無上の法を説く、汝等此を聞かすして、但我滅度すと謂へり』

以上が非滅現滅であります。かうして現在益物を御頌ひになつたのです。

『我諸の衆生を見るに、苦の海に没み存つ、故に爲に身を現さずして、其をして渴仰を生さしめ、其の心戀慕ふに因りて、乃ち出で、爲に法を説く』

これからが未來益物の中の、未來の機應であります、機は我々衆生、應は佛である。諸の衆生を見るに苦の海に沈んで居る、それはなんの爲に苦に沈んで居るのであるか、それは煩惱の心と、其の業因とに因つて、それで苦の海に沈んでゐる、所謂顛倒の衆生である、さういふものには佛様は身を御示しにならない、近しと雖も身を示さない、そして彼等が苦に堪へない、堪へなくなつてどうしても佛を求めなければならぬ、さういふ時に始めて渴仰の心を生ぜしめる、煩惱五欲に惱んで、爲に佛を求めなければならぬと云ふ心、その心の生じた時、佛はお出になるのである。

『神通の力是の如し、阿僧祇劫に於りても、常に靈鷲の山、及び餘の諸の住處に在り、衆生は劫盡きて、大火に燒かるゝと見る時も、我が此の土は安穩にして、天人常に充滿てり、園林諸の堂閣は、種々の寶もて莊嚴しつ、寶樹には華も果も多く、衆生の遊び樂しむ所なり、諸天は天の鼓を撃ち、常に衆の伎樂を作し、曼荼羅華を雨らして、佛及び大衆に散す』

これは散文の時に、常住にして滅せずといふ事を御説きになりました事を、御頌ひになりました、お現はれになるのもおかくれになるのも、共にこれ佛の神通力である、『阿僧祇劫』これは矢張り單なる阿僧祇劫でなしに、五百塵點以來又は未來、『これよりも過ぎたること復た上の數に倍せり』といふ時を現はされてゐる、之は散文の時にいはれたから略してある。その五百塵點以來乃至未來に於ても、常に餘の諸の住處にある。

これをば天台大師は、こんなふうになつて御説きになつてゐる、常在靈鷲山常に靈鷲山に御出になるのだといふのは、常

に御在になるはうは、佛御自身の智慧の身體、眞理と一つになつてゐる身體、その方が御在になるのだから、これは「自受用報土」である、「自受」は佛御自身のお悟りになつてゐる身體、そして佛はちやんとこの自受用報土といふ方に御在になる。

それから靈鷲山、靈鷲山はどういふ報土であるかといふと、常に衆生に見せしめてある、之は佛が衆生に見せしめる爲に御在になる場所である。之が「他受用報土」、それから餘の諸の住所といふのは「方便有餘土」、方便有餘土といふのは、報土は佛の悟の世界、方便土は衆生に見せしめる世界、又これは眞正の智慧の方の世界ではないが、恰度阿彌陀如來や藥師如來の世界、方便した世界である、常在靈鷲山は釋尊の在ツしやる處、「餘諸住處」といふ方は十方三世の佛土の姿を示したのである、衆生大火に焼かるゝ時といふ世界は成住壞空のある世界で、佛敎では此の娑婆世界が壞れる時には、三災があると説いてあります。その中の火に焼かれる時にも、この靈鷲山は常在である、自受用報土及他受用報土共に、この佛の智慧の世界は、安穩にして天人常に充滿して居る、こゝにいふ風に物質世界から超越した世界であります。

天台大師はこの「天人常に充滿せり」これをば單なる天上や人間でなしに、「天」は法性第一義天といふ眞理の世界に住んでゐる衆生である、それは十地の菩薩である、人といふのは十住、十行、十回向といふその位の菩薩である。即ち此處に住んでゐるものは、天も人も悉く菩薩の心を持たないものはない。

「天人常に充滿せり、園林諸の堂閣は、種々の寶もて莊嚴しつ、寶樹には華も實も多く、衆生の遊樂む處なり」この様々の寶でもつて莊嚴したといふのは「他受用報土」で、他の總ての人間も佛の功德利益を受ける、佛自らのみが眞理を悟つてゐるから樂しんでをられるのではない、他の爲に佛は示してをられる、種々の寶を以て莊嚴してゐる。

「諸天は天鼓を撃ち常に衆の伎樂を作し、曼荼羅華を雨らして、佛及大衆に散す」諸天といふのは、諸の天上界また其の中の衆生、日天、月天、四天王、帝釋天、梵天などの天人、天鼓は天上界の鼓、微妙のねいろを出す鼓、この鼓はたゞかざるに諸の怠慢を誡むる爲に鳴る、それが無問自説といふので第一義天とすれば、十住十地の菩薩が、問はれないで自ら悟りの法を説いてゐるのである、それは蘇東坡の詩にもこゝにいふがある、『溪聲廣長舌、山色清淨身』溪の聲も佛の御説法してをられる様に聞く事が出来る、山の色は四季様々に變つて我々の心を慰めてくれるが、これも佛の三十二相の姿と見る事が出来る、佛の常住身として見る事が出来る、若し佛の心を以て見たなれば、溪の響も御説法として聞く事が出来るであらう、山の色も亦佛の御身體と仰ぐ事が出来るであらう、その様に諸天を撃つ無問自説、各々その處で法を説いてゐるのである、そゝにいふ世界、それが佛の常住の世界なのである、その娑婆世界は堪忍世界であると説かれてありますが、此の心から見れば、一切の苦樂共に妙法と聞く事が出来るものであるから、我々の苦しむことも又妙法である、自分を玉成するものであるといふことが出来る。

日蓮聖人は、聖人を迫害するもの、法を誹謗したもの、それらの三類は却つて、日蓮聖人を法華經の行者にしたものであると仰せられて居ります。

又日蓮聖人が、その檀越への御書の中にこゝにいふことをいはれたのがあります、『世間の留難來るとも取りあへ給ふべからず、賢人も聖人も此事はのがれず、たゞ女房と酒打ち飲みて南無妙法蓮華經と唱へ玉へ、苦をば苦とさとり樂をば樂とひらき、苦樂共に思ひ合せて南無妙法蓮華經と打唱へ居させ給へ、これ豈に自受法樂にあらずや』之は聖人



が四條金吾殿に與へられた御書であります、四條金吾は非常な日蓮聖人の信者であつた爲に、随分と朋輩からも迫害を受け、主人からは譴責を受ける様なふうになり、様々の迫害にあつた、そのときに日蓮聖人が安心をお教へになつた御書の一つで、その最後の結びに、衆生所遊樂、衆生が遊樂する處なり、只妙法蓮華經と唱ふるのみ、南無妙法蓮華經これ豈衆生所遊樂にあらずや、とこういふ御文があります、自分の意に適せざること、自分をなやまさんとすること、世間の種々の難が來ても、一切に取り合ふな、難が來ても之を難として取合ふな、どうして取り合はないのがいゝか、難が來れば、一般の人々は厭ふのがあたりまへであるが、どう厭つてもむかうから來るのはどうにもならないではないか、病氣になつた、病氣になつたといつて厭だといつてもどうにもならない。病氣になるには、病氣になる理由があつてなつたんだらう。そう思つてしまつたことによつて、たゞくよくするより第一氣も樂になる、亦その原因について考へれば結果も好い、たゞ病氣に取合つてくよくよしてはいけないといふやうに、どんな難が來ても、取り合ひ給ふな、どうしたらよいか、賢人も聖人も此の難は通れられない、御釋迦様でも九横の大難に遭はれた、孔子様でも盗人と間違へられたり、謀叛人に間違へられたりした、賢人聖人でも難がないといふ事はない、大體此の人生は難のない處には居られない、娑婆世界である、娑婆世界といふことは堪忍の世界、即ち堪へ忍ばねば生きて居られない世界である、堪忍の世界であるからこそ、それに堪へ忍ぶと、功德が出て來るのである。

苦を苦と悟りである、苦を苦とやむのではない、苦を苦と悟るのである、樂を樂とこびり附いてはいけない、樂と開くのである、苦を苦と悟り、樂を樂と開きとある、開くといふことは、悟ることと同じで、悟るといふのは、こびりつかずに、開けることである、すなはち悟りの眼目が開けることである、苦樂共に思ひ合せて、南無妙法蓮華經と唱へゐさせ給へ、この安心になつてしまつて、そして一切妙法蓮華經の法の前に、一切本佛の任運の儘にして、後は女房と酒打飲みて南無妙法蓮華經と唱へゐさせ給へ、これ豈自受法樂にあらずや。後は矢でも鐵砲でも持つてこい、といふ度胸を据ゑてしまふ、さうすればどんな難でも、大概向うの方から解消してしまふ、日蓮聖人の法難は、一面からいつたなれば、我此土安穩天人常充滿の世界である。龍の口で首を斬らうとしたけれ共、それが向うの方で斬れないで、退散してしまつたときであります。以上が常住不滅の佛の世界を御示しになられたのです。

それから次は『不見因縁』で、因縁によつて、佛を見る事が出來ない、その因縁といふのは、『我淨土は毀れざるに、而も衆は燒け盡きて、憂怖諸の苦惱の、如是に悉く充滿てりと見る、是の諸の罪の衆生は、惡業の因縁を以て、阿僧祇の劫を過ぐれども、三寶の名をだに聞かず』如來壽量品には、佛のみ名を聞かないのは、それは惡業の因縁であるとのある。

その惡業の因縁とは何を指して惡業の因縁といふのであるかといふと、それは、根本は、妙法蓮華經に背くことである。常住の法のあることを信じないといふ、その一切惡業の根本因縁によつてである、それでは次の『佛を見奉る因縁』はとてふと、

『諸有修功德、柔和質直者、則皆見我身、在此而說法』

諸の所有功德を修め、とあるその諸のあらゆる功德であるが、その功德の始は柔和質直にして一心に佛を見奉らんとする心である、即ち一心に本佛、本法、本化の三寶に歸依する、この本佛といふのは、澤山の佛寶の中でも特に本

佛、それから本法は澤山の法寶の中で特に本法、それから本化は、澤山の僧寶の中で特に本化、その本佛・本法・本化の御名を聞くことが出来ない、そこで諸のあらゆる功德を修め、柔和質直なるものは、則ち皆我が身、此に在て而ち法を説くと見るで、本佛本法本化の常住にましますことを見る事が出来、また法を聞く事が出来る、  
 「或時はこの衆の爲に、佛の壽量り無しと説き、久しくありて乃し佛を見まつるものには、爲に佛には値ひ難しと説く」

柔和質直なるものには、常に佛のまします事を説く、五濁の重きものには、佛久しきに涉つて見せしめず、彼等が渴仰の心を起した時に、始めて出で、爲に法を説きたまふと説く、

「我が智力是の如く、慧の光照らすこと無量に、壽命は無数の劫ぞかし、久しく業を修めて得る所なり」

その用らきはみな佛の智力である、佛の智力とあるのは、法華經の佛は、何を一番中心にしておいでなのかと申しますると、先刻申上げた様に、報身の智慧、その智慧が主體であります、それから應身は慈悲の光、この智慧と慈悲との二つの光りで眞理の法身を顯はし、一切衆生の法身をも顯はさしめたまふのであります。この中で或は新に生れられないに係はらず、生れることを示し、滅したまはないのに係はらず滅度を示されると云ふのは、佛の力である、「慧の光照らすこと無量に、壽命無数の劫ぞかし、久しく業を修めて得る所なり」この偈は、佛がみづから佛としての覺りを得、眞理と一つになつてゐられる功德をいはれたもので、「慧の光照らすこと」といふことは、あの御本尊の中央に、南無妙法蓮華經の光が輝きわたつて、左右の十界三千の諸法を照らし、その十界三千の諸法には、又十界三千の諸法が具してあるのであるから、その中の、智慧の報身の光は、また輝きわたつて、無量の世界をばその智慧の光で

照らして居る、その智慧の光で様々な功德を修められたものであるから、その功德を修められた結果、壽命となつてゐる、壽命は佛法では功德の報いであると説かれてゐるからして、壽命無数劫であるといふことは、功德無量であるといふことと同じである、慧光が無量の境を照らす、照らした光は様々な功德を修める、その照らした光功德の光りの果報として、無量の劫にわたつての常住の命となられた、それは慧光が無量の境を照らし功德を修めた、その久しく業を修めて得る所である、無量の際をきはめた智慧の光は、その無量の境を照らすと共に、その中の智慧なきもの、無量の煩惱に苦しんでゐるものには、智慧の光と慈悲の光によつて、彼等を恵みよろこばしめたまふ、應身、報身二つの身が、五百塵點以前からの身であるといふことを御説きになつたのが、この壽量品でありまして、即ち應身報身の顯本が根本の問題であつて、法身の常住は、諸經に説かれてゐますが、此の報身應身の顯本は、壽量品以前の經にはないので、いまこの法華經をおいてはじめて法身常住とともに報身、應身もまた常住だといふ三身常住の旨が説かれたので、以上が『得見の因縁』で、未來益物がをばります。

次は『皆實不虛』の利益の文になるのであります、此處で阿彌陀如來のことを一寸申し上げます、阿彌陀佛は無量光佛、無礙光佛、無量壽佛といはれてゐます、無量壽佛の他に無量光佛、無礙光佛といふ名があるが、何れも阿彌陀佛であります。

そこでこの經文に、慧光照無量壽命無数劫とありますから、慧光照無量は無量光佛、壽命無数劫は無量壽佛で、つまり壽量品の佛は阿彌陀佛であるといふ説がありますけれども、四十八願の主の阿彌陀如來を専門に説いてある經文には、十劫以前に成佛した様に説いてありますから、その以前には阿彌陀佛は出られたことはありません、況して五

百塵點劫以前などに阿彌陀佛が成佛してゐたなどとは何のお経にも出てをらない、そこで天台大師はこういふことをいつてをられる、『實は有量にして無量と名づくるもの、無量壽佛是なり』。名前ばかり無量であるといつて之を抹殺してしまつてをられる、それからもう一つおもしろいお話をしませう。

恰度恩師智學先生が明治十七年立正安國會をお創りになつて、その後、宗門革命祖道復古義會を起して、東京ではじめて道路演説をせられた。これは佛教大家の道路演説の嚆矢である、その直後に、天台宗の水谷仁海といふ人があつた、この人は自ら水谷仁海大菩薩といふ旗を作らせ、その弟子の仁行といふ人が、その旗を取りつけた車を挽き、昔の醫者の乗つた駕をその車の上に取りつけて、それに這入つて、ある適當な場處まで行くと、車をとどめて仁行が前席を少しやつて人を集め、それから駕の戸を開くと、仁海大菩薩、その駕の中から説法をする、ところがこの仁海大菩薩なかくえらいことをいつてゐるので、佛教各宗の中で、眞言宗の大日如來は法身の佛である、淨土宗や眞宗で稱する阿彌陀如來は報身の佛であるといふ、そして天台宗では、現實の佛の釋迦如來を本尊とする。それでこの三身の佛は實は悉く法華經に統一されてゐるものである、いままでは眞言宗では大日如來、淨土眞宗は阿彌陀佛、天台宗では釋迦如來等と、各別に本尊を認めて居たが、それをこう改めるがよい、『大光普照、壽命無量、南無釋迦牟尼佛』と、大光普照は法華經の序品の偈の文で、大光遍く照らすとある。法華經の序品に釋迦牟尼佛が無量義處三昧に入られ、眉間より白毫の光をはなつて、東方乃至十方の萬八千の世界を照らすと説かれてある、それで大光普照その大光普照の四字で、眞言宗の大日如來を統一する、それから壽命無量は、壽命品の長行の文で、これで阿彌陀佛を攝する、そして南無釋迦牟尼佛といふのは神力品長行の文だから、『大光普照、壽命無量、南無釋迦牟尼佛』と唱へる。

つまり、佛教各宗は法身報身應身をおの／＼本尊に立て居る、その三身の代表的な佛を、悉く攝めて一切佛教を統一することができると叫んだ人である、これは理窟はなかくおもしろいのです。

この理窟は一往はとほる、がそういふ法を末の世に弘めるといふについて、經文や釋義の豫證の根據がない。それは神力品の付囑といふことがないからである。それだから天台大師も妙樂大師も題目については、幽玄に解釋して居られる、それを日蓮聖人に至つて付囑を受けたる末法の大導師として、始めて南無妙法蓮華經を本門の題目として、五重玄義の含まれた佛の魂なりとして、彰灼に顯説せられたのであります。そこで

『汝等有智者は、於此に疑を生ずこと勿れ、當に斷ちて、永に盡しむべし、佛の語は實にして虚しからず』

以上が利益不虛でありまして、三世益物はみな實にして虚しからざるを頌はれたのであります、以上が法説を頌されたのです。

次は

『醫の善じき方便もて、狂ひ子を治さんが爲に故て、實には在れども而も死せりと云ふに、能く虚妄を説く者無からんが如く』

以下は譬説であります。この始は開譬であります、父の良醫が方便をもとある、こゝの『醫の善じき方便をもて』の一句は、過去益物を譬へられてゐます。

それは醫がこれまで善じき方便をもて澤山の衆生を救はれたといふことを、中に含まれてゐる、それから『狂ひ子を治さんが爲に故て實には在れども而も死せりと云ふに』これは現在益物を示された、父のゐるうちは子が藥をのま

ない、父は遠くに行つてゐる、そして他國に行つてから父は遂に亡くなられたといふ、それを聞いて狂子が亡き父を慕ふのあまり、始めて薬を飲む様になつたといふ譬である、滅に非ずして滅を現するといふことの譬であつて、それは現在益物である。この譬の方では過去益物、現在益物だけで、未來益物を略されてある。「實には在れども而も死せりといふに、能く虚妄を説く者無からんが如く」それをもつて虚だといふことは出来ないといふことを頌はれた。

『我も亦爲世の父として、諸の苦患を救ふものなり』

この二句は、譬を法説に合された中、過去益物を合はされた。

その次が現在益物の譬を法説に合して、

『凡夫の顛倒せるを爲て、實には在れども而も滅すと言ふ、常に我を見るを以ての故に、而ち憍恣の心を生じ、放逸にして五欲に著み、惡道の中に墮ちなん、我常に衆生の道を行すると、道を行ぜざるとを知り、應に度すべき所に隨ひて、爲に種々の法を説く』

以上現在益物を譬に合された。佛が常住にお出になると、衆生は珍らしがらない、そのみならず憍恣の心を起して、放逸となり五欲に著み、惡道の中に墮ちるであらう。そこで滅に非ずして滅を現される。

『度すべきところに隨ひて、爲めに種々の法を説く』種々に衆生の道を求むる者、求めてゐる機感のその人間の深さ淺さに對して、それに對して恰度適しい様な道を説くのである。是は恰度前の六或化導を示されてゐるものである、佛は言語ばかりで法を説いていらつしやるのではない、また身體を示して法を説かれる、夫々その機に適當した身體を示して法を説き法を行はれる、それで十界の身體を示して十界の法を説く、種々に法を説く、その種々に法を説く

結果は、何であるか、それは最後は必ず、

『毎に自らこの念をぞ作する、何を以てか衆生をして、無上の道に入り、速かに佛の身を成就ぐることを得しめてむと』

これは常住の佛でましまし唯一の法であるものを、種々に法を説かれ、非生現生、非滅現滅せられるのは、決して佛の虚りでないぞ、それによつて、本佛の妙法の功德を與へられる爲めであるといふこと、即ち利益不虛を頌はれたのであります。

佛身の成就を得せしめんが爲に無上の道、即ち如來壽量品の常住の本佛をしらしめ、常住の本法をしらしめ、そして寂光の世界に住せしめる、その無上の道に入らしめる爲に、それまでに様々な法を説いてをられる、『毎に自らは念を爲す』とある最後の佛の心は、衆生を如來常住の道に入らしめ、そして如來壽量とおなじ様な心、同じやうな身とするにはまづ佛のみに如つた精神的存在たらしめ、それによつて、色心共に常住ならしめる、そつういふ佛の道に入らしめる爲である、『毎自作是念以何令衆生、得入無上道速成就佛身』何を以てか衆生をしての初めの『何を以てか』のこの二字をば、これを「悲願」と云ふ、『毎に自らは念を作す』是の念といふことは、どういふ念であらう、それは如來常住の道に入らしめねば息まないといふ念である、然しいきなり如來常住の道を説いても解らない、そこで『何を以てか』といふ、これはその様々な方便を御説きになる『何を以てか』のこの悲願、どんなことをしても、どんな手段をしても無上の道に入らしめなければならぬ。入らしめなければ止まない。との大慈大悲は、過去・現在・未來の三世に『毎に自ら』と暫らくもお息みがないのです。

我が恩師が今や藝術宣傳を開いてをられる、それをどうかするとういふことをいふものがある、舞踊や芝居を以て法を傳へることは、無理なことではないかと……然しこれは『何を以てか』の大悲願から出られたものであつて、この悲願、この何を以てかの悲願はあらゆる方便、あらゆる手段を悉く含めてゐるものである、『爲に種々の法を説く』その種々の法を説くといふことは、『何を以てか』の悲願から出たものである、それから『速成就佛身』何が佛身を成就することの因であるかといふと、一切衆生は本佛の法身を持つてゐる根本にそれをもつてゐるのである、その本佛の法身を成就するのが妙法受持の行である、速成就佛身は凡夫の身體を捨て、佛の道を行するのではない、本佛の佛身は根本から衆生も持つてゐる、本佛の身を持ち乍ら、それを本佛と別なる凡夫の身であると妄りに考へてゐる、その妄想を『一心欲見佛、不自惜身命』と轉換させ、本佛の身を速かに成ぜしめるのである、法身を速かに成就させるのである、その速かといふのは、『信』の一字である、佛のからだは自分が持つてゐるのであるから、その佛のからだの作すべき所作さへやればそれでよい、自身は元來本佛の身であるのであるから、本佛の所作さへやればよい、それは常住の佛の心、佛の所行たるこの法華經を保つことの外にない、そして法華經を以て、一切衆生を救はうとは、佛が『本と立てし誓願』である、その佛の誓願を我が誓願とし、その法華經を實行すること即ち法華經を信じて、その法華經のとほり修行して、廣宣流布のお手傳をすること、それが即ち『速成就佛身』で、彼の如來の所遺として如來の事を成ずることであると、こういはれたのと、意は同じである。

また『若しよく持つことあれば則ち佛身を持つなり』とも説かれてゐる。佛の身は自分が根本から持つてゐるのであるから、法華經を修行するといふことは、佛の所作をするといふことである、それは佛の身を成ずる事である、それは信の一字で出来るのである、『無作三身の所作とは何物ぞといふとき南無妙法蓮華經なり』と仰せられてゐる、無作三身の所作とは最尊最上の道である、無作三身とは壽量品の佛のことで、本有無作の三身といふ本佛のことである。この無作三身の所作をすること、それが速成就佛身である、『今日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱へ奉るものは、速成就佛身疑ひ無きものなり』それは速成就佛身である、その所作は身口意の三業に所作する、南無妙法蓮華經と、悉く身口、意の三業において所作するのである、身も口も意も、妙法蓮華經の本佛本法本化に信してしまふことである、その教へのまゝに行ふことである、をはりにのぞんで、古來の有名なる此の品の歌を三首紹介して、その意義を述べませう。

『鷺の山隔つる雲や深からん常にすむなる月を見ぬ哉』

康資王の母』

鷺の山は常に佛の在します處、鷺の山に常にましますといふ佛、その佛を月に譬へた、そのお月様、常に住むなる佛の月を見ることが出来ない、それは何か隔てるものがあるからであらう、それは雲であらう、放逸著五欲、放逸にして五欲に著する、そういふ雲が深いから、常にすむなる月、住むを澄むに通はせてあるのだが、その月の佛を見ることが出来ないのである、鷺の山には常に本佛が在しますのであるが、煩惱罪障の心が深いからその常にすむなる月を、佛を見る事が出来ないであると、嘆いた心である。

次は、圓位法師、即ち西行法師で、これはもつと叱つてをられる、

『鷺のやま月を入りぬと見る人はくらきに迷ふ心なりけり』

法華經の佛は、滅度してしまはれたとさう見る人は、無明の闇に迷つて居る人である、若し無明の闇に迷つてをらな

いものであれば、常にすんでゐる月を、その心に仰ぐことが出来る筈であるといふので、やはりこの壽量品の常住不滅を詠んだものである、それから終りに花山院の御製がある、

『世の中はみな佛なりおしなべて何れの物とわくぞはかなき』

これは壽量品の中の先刻お話ししました、佛知佛見即ち如來如實知見から見たなれば、みんな妙法蓮華經でないものはない、十界みな悉く妙法蓮華經である、然しその十界みな妙法蓮華經であるといふことを、佛以外には自分勝手に用ひることは出来ない、我々は、佛の教に隨ひ佛になることに依つてのみ、これを一分づゝ味ふことが出来る、妙法蓮華經に歸依する時所謂毒變じて藥となるがごとく、法華經の大藥師に依らねばならぬのである、大藥師の教に隨ひ、大藥師の藥を飲む、それに隨ふことが出来れば、世の中はみな佛である、本佛の心になつてしまつたとすれば、世の中はみな悉く妙法蓮華經である。どれもみんな佛である、佛はこれだけで、この外は佛でないといふ様なことは、みんな間違ひである。

その佛の教へに隨つた時、やがて我に違ふものでも、我を惱ますものでも、みなこれ我を佛たらしむるもので、この世さながら『常在靈鷲山諸天擊天鼓』の世界であるといふことが出来る、人みなの世界が、さういふ世の中にならなければならぬといふことが、『一天四海皆歸妙法』である、苦を苦と悟り、樂を樂と開き、苦樂になづまない、くつついてしまはないといふこと、苦樂を超越して、常に佛の心を心とする信仰の心こそ、『常在靈鷲山』の佛に接すること、この信の一字こそ肝心であります。さうしてその信は、如來如實知見の大智慧を信する心で、『信の一字を以て、三世諸佛の智慧を買ふ』といはれたのもその事でありませう。

### 分別功德品

本門正宗分の餘

- (一) 經家大饒益を叙す
- (二) 如來壽量を聞く功德を分別す  
無生法忍(十住位)、開持陀羅尼(十行位)、樂說無礙辯才(十回向位)、無量旋陀羅尼(初地位)、不退法輪(第二地位)、清淨法輪(第三地位)、八生(第四地位)、四生(第八地位)、三生(第九地位)、二生(第十地位)、一生(等覺)、發心(十信清淨位)
- (三) 時の衆佛恩を報ぜんとして供養を設く
- (四) 彌勒孤起偈もて領解を述べ(十九行偈)

- 1、時衆の領解を叙す(二行)
- 2、如來の分別を頌す(九行)
- 3、時衆の供養を頌す(八行)

以下本門流通分 (經を訖るまで十一品半、五品半にて虚空會を訖る、此の半品より不輕品に至る迄の三品半は、弘經の功德深きを明して流通を勸む。此の品と後品とは、初心の因の功德を明し、法師功德品は初心の果の功德を明し、不輕品は因果の功德を具したる人に因せて信毀の罪福を明す。此の品には初心の功德に、現在四信と滅後五品とあり)

### (五) 本門の功德に先づ現在四信の第一、

第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

一念信解の功德を明す

- (一) 人、2、功德、3、格量の準を明す、4、行位不退
- (六) 重頌もて明す (1、格量多少、十二行半、2、行人の功德、二行、3、行位不退、五行半)
- (七) 第二、三、四の三位の功德を明す (1、第二略解言趣は人を擧げて格量し、2、第三廣爲多説は人を擧げて格量し、3、第四深信觀成は人を擧げて功德の相を明す)
- (八) 滅後五品の人の功德を明す (1、初隨喜品の相、2、第二讚誦品の相、3、第三說法品の相、4、第四兼行六度品の相、功德、第五正行六度品の相、功德)
- (九) 重頌もて明す (1 第二品を頌す、2、第三品、3、第四品、4、第五品)

今日は、法華經十講中の第七講の下で、分別功德品第十七、隨喜功德品第十八、法師功德品第十九であります。この分別功德品は、これを二つに分つて、始の方から十九行の偈の所までが、本門正宗分であります。十九行偈から後の半品が、流通分に這入ることになつてゐます。

壽量品を承はつたその結果の功德を、佛が分別された、どれほどの功德があるかといふことを分別された、さういふ經であるから分別功德品といふのであります。始の所の第一は、經家大饒益を叙す、如來壽量品を承つたその時の大會の人々の、受けた大きな功德を説かれたのであります。

『爾の時、大會、佛が壽命の劫數の長に遠げきことと是く如くなるを説きたまふを聞いて、無量無邊阿僧祇の衆生は、大じき饒益を得たりき』

その第一の經家饒益を叙す、この大會の中には、迹門の二乘、即ち諸法實相の妙理によつて、始めて成佛することの出来る様になつた二乘全體が、菩薩の中に這入つてゐるのであります。それから、本門に至つては二乘以外の菩薩、その菩薩方が、初めて如來壽量品を聞いて、佛の唯一なることを知つた、それと同時にその永久の生命たる如來壽量品の中にある、その久遠の佛が、自分の主であり師であり親であることを、初めて覺ることが出来た、永遠に壽命の長遠なること、無始無終の生命であるといふことを、はじめて承はつて大饒益を受けた、それではその大饒益とは、どんな功德を受けたのかといふこと、それを佛がお説きになるのであります。

『於時、世尊、彌勒菩薩に告げたまはく、阿逸多よ』

阿逸多とは、彌勒菩薩の名であります。無能勝と譯する、彌勒菩薩は、釋尊の次に、この娑婆世界に八相成道して、衆生を利益する補處の菩薩である、こうきまつてゐるから、彌勒菩薩の名前は、無能勝といひます。

『我是の如來の壽命の長に遠げきことを説く時、六百八十萬億那由他恒河沙の衆生は、無生法忍を得たり』

この無生法忍といふのは、忍といふことに  
 生忍—生緣慈悲  
 法忍—無生法忍

の二つがある、これは菩薩でも有つてゐる慈悲で、佛には、その上に無縁慈悲

といふものがあります。

そこでその生忍と法忍といふ中で、無生法忍とは、どういふものかといふと、まづ生忍といふのは一切衆生が、已れに向ひ彼等の心にその所作に様々な逆らつたことを澤山やつても、それを一切悉く忍耐する。それから法忍は衆生ではない、いはゞ宇宙全部の事柄、さういふ無生の法に於ても、どんな事でも忍耐する、それが法忍である、生忍から法忍、それから又これは、その忍ぶといふ意味から忍といふことがあるものだから、そこで慈悲が出て来る、生忍によつて生縁慈悲が出る、この忍からいろ／＼な自分に逆つた事があつても、一切衆生に向つて忍ぶ、その忍ぶところから、彼等を慈悲する、慈悲するといふことが出て来る、彼等の違逆の事がらを忍ぶことが出来ないとなると、これに對する積極的の慈悲は出てこない、また法縁の慈悲、宇宙法界の中のあらゆる事がらが、自分の身に心にどんなことが出来ても忍ぶことができる、それが無生法忍である、この無生法忍といふ方からもまた慈悲が出てくる、今、壽量品を承はつて、その無生法忍を、六百八十萬億那由他恒河沙の衆生が得たのである、その無生法忍は、どの位であるかといふことを、この表の中に書いておいた、これは十住の位である。眞理に自分が、安住したといふことである、菩薩の位は、かつていひましたが、十信、十住、十行、十回向、それから十地、それから等覺、それから佛、これが五十二位で、妙覺の佛、こゝまでどういふふうの五十二位が、七階になつてゐる、その中でこの十住の位は、佛の覺りの眞理を自分の住家としてゐる、そこに安住した、眞理に安住した處から、更に動いて行くのだから、

十行である、自分が動くばかりでなく、他の衆生を教化する爲めに様々な法を説く、自分が動くばかりでなく、自分が眞理を動かしたのみならず、それを一切衆生のために、めぐらしてゆくといふので十回向、それから十地、此の位の菩薩になると、その證つた眞理が自分のものとなつて、恰度大地が様々な草木を、發生せしめる様に一切の芽がそこから出て来る、眞理の證り、その大地から様々な草木が發生するようになって来る、自分がさういふふうになつてしまふといふ。今の無生法忍を得たといふのは、この十住の位に入つたのである。それで一切衆生ばかりでない、あらゆる法、情、非情に通じた、あらゆる法に對しての、忍辱を得たのである、又同時に慈悲を得たのである、それはなんであるかといふと、妙法の眞理に、安住することが出来たからである。

『復千倍の菩薩摩訶薩有りて、聞持の陀羅尼門を得たり』

聞持は、一度聞いたことを、少しでも失はない、陀羅尼は總持である、功德を任持して決して失はない、それはどういふことであるかといふと、それは十行の位である、無生忍を得て眞理に安住した人々は上の經文に、六百八十萬億那由他恒河沙の衆生は、無生法忍を得たとあり、それより上の位を得たものが千倍もある、眞理に安住したのみならず、眞理から發生する、あらゆる法門、あらゆる功德、さういふものをばちやあんとして自分のものとして總持して失はない、微塵だに失はない、それから更にどういふことになるかといふと、次には一切衆生に施してゆくといふことが、必要なこととなる。

『復一世界の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、樂說無礙の辯才を得たり』

世界と申しますのは、一つの三千大千世界で、その微塵にひとしい菩薩摩訶薩が、みな樂說無礙の辯才を得た、



一切衆生に、眞理の法をさまざまに、無礙に説くことが出来るやうな辯才を得た、前に聞持陀羅尼を得てあらゆる法門に通達することが出来たから、それを活用することが出来たのであります。これは十回向の位。

『復た一世界微塵數の菩薩摩訶薩有りて、百千萬億無量の旋陀羅尼を得たり』

それは、百千萬億無量の旋陀羅尼とあつて、化道が自在になつた、初地の位に入つたのである。

『復、三千大千世界の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、能く不退の法輪を轉らす』

それは第二地である、

『復、二千の中國土の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、能く清淨の法輪を轉らす』

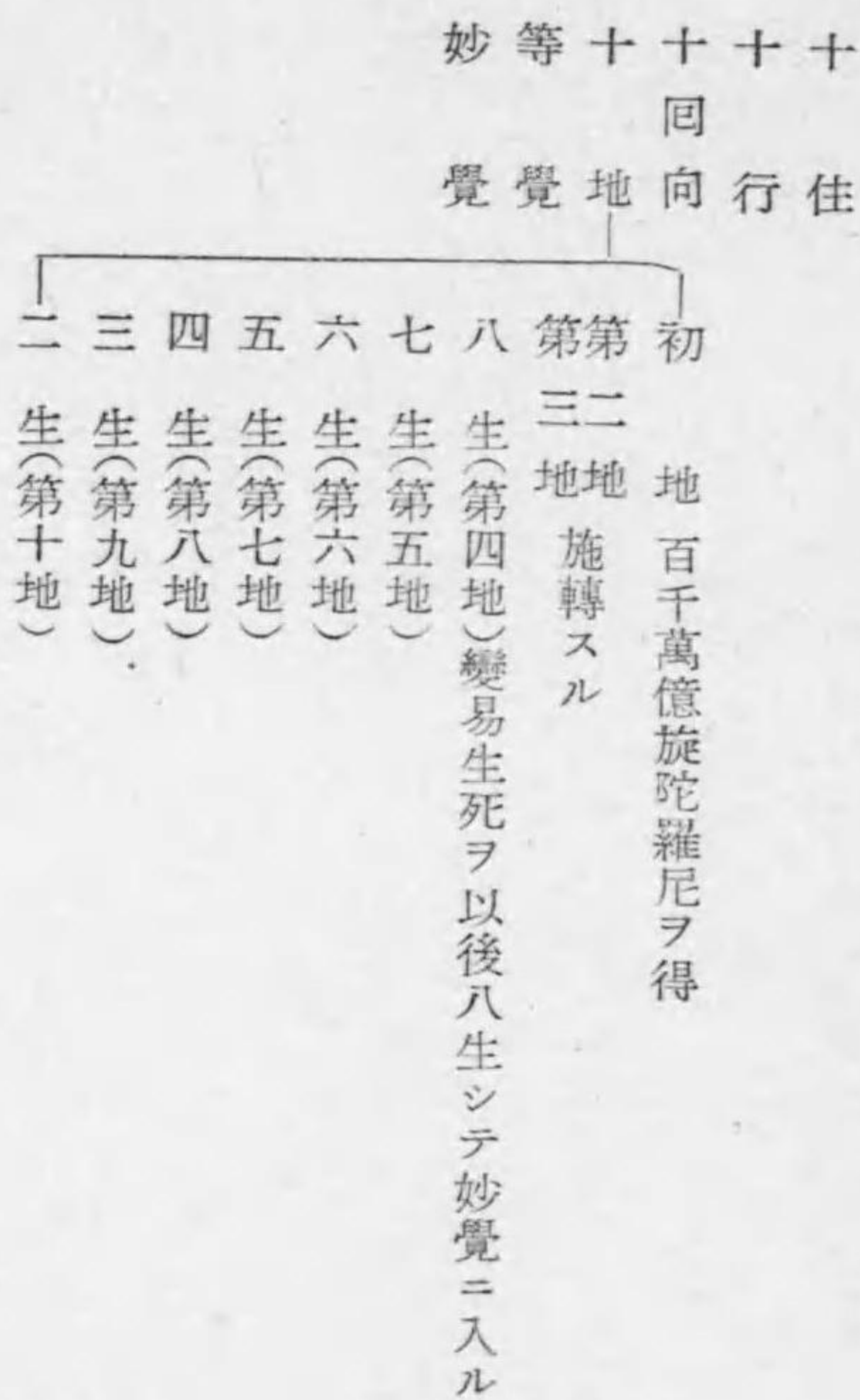
それは第三地を示す、

『復、小千國土の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、八生して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』

この數は六百八十萬億那由他恒河沙の衆生が、無生法忍を得た、復、千倍の菩薩有りて、聞持の陀羅尼門を得た、復、一世界の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、樂説無礙の辯才を得た、復、一世界の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、百千萬億無量の旋陀羅尼を得た、こゝまでは數が増えて來た。それから二千の國土の微塵數の菩薩摩訶薩有りてと、こゝは數が減つて來てゐる、『小千國土の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、』それはどうなつたかといふと『八生して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』また

『復、三の四天下の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、三生して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復、二の四天下の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、二生して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復一の四天下の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、一生して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』

とある、この中、八生といふのはどういふ譯であるか、これは、



上の文が初地で、今の能く不退の法輪を轉らすが第二地、能く清淨の法輪を轉らすのが三地だから、こんどは第四地の所がこれが八生である、それから七・六・五・四・三・二生が、五・六・七・八・九・十で十地となる、それから一生は十一地で、こゝまでくると等覺の位である、その上は妙覺となる、四地から八生すると妙覺の佛となる、八生して阿耨多羅三藐三菩提を得る、小千國土の微塵數の菩薩摩訶薩は、八度生れかかつて佛になるぞ、然しこれは、肉體的に生れ變るのでなくして、精神的に生れかはるのである。これを變易生死といひ、これに對して、肉體的に變つてゆ

くのを、分段生死といふ、菩薩方は變易生死して、それで八生して佛になる、これは第四地を入つたものである、更に「復、四の四天下の微塵數の菩薩摩訶薩有りて、四生して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」これも亦滅つてゐる、四の四天下といふことは、一の四天下には日月が一つあるといふのである、四の四天下には四の日月があるといふわけである、八生の次は七生の五地、六生の六地、五生の七地これだけは略してあるものとして、天台大師は判釋せられた、そこで八地に住した人は四生すると佛になる、こんどは九地の人は三生すると、十地・等覺・妙覺となつて、三度生れ變れば妙覺になる、又（ポールドを指しながら）十地の人は二生すれば等覺・妙覺と佛になる、又等覺の人は一生すれば妙覺にはいつてしまふのである、そういふふうにならば如來壽量品を聞いておのゝく大功徳を得た。

『復、八の世界の微塵數の衆生は皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發しぬと』

これは十信の心にはいつたといふことである、眞の法華經の本體たる如來壽量品の、佛界緣起の法界に向つて、確信を得たのである、十信の心を起したのである。十信の初位は信心で、その信心を起したのである。それを天台は六根清淨の人だとせられてゐる。だから數が増して、十住の無生法忍を得たものよりズンと多い。

それから次は、時の衆佛恩を報ぜんとして供養を設けて、

『佛、是の諸の菩薩摩訶薩の、大じき法の利を得ることを説きたまふ時、虚空の中に於て、曼陀羅華、摩訶曼荼羅華を雨らしつ、以て無量百千萬億の寶樹の下なる師子の座の上の諸佛に散し、並に、七寶の塔の中なる師子の座の上の釋迦牟尼佛、及び久しく滅度ましませる多寶如來に散し。亦、一切の諸の大菩薩、及び四部の衆に散しぬ。又、細末なる旃檀沈水の香等を雨らし。虚空の中に於て、天の鼓自らに鳴りて、妙なる聲深く遠けし。又、千

種の天の衣を雨らし、諸の瓔珞の、眞珠の瓔珞、摩尼珠の瓔珞、如意珠の瓔珞を垂れて、九方に徧く、衆の寶の香爐には無價の香を燒きて、自然に周りに至りて、大會を供養しつ。一一の佛の上には、諸の菩薩有りて旃蓋を執持け、次第に而上りて梵天に至る。是の諸の菩薩、妙なる音聲を以て、無量の頌を歌ひて諸佛を讚歎へたてまつる』

これは恰度この功徳を如來が分別される、大會の菩薩はみな自ら歡喜信受の形で、佛を供養する歡喜の心、さういふ供養の姿を示したものである、その中で

『諸の菩薩有りて旃蓋を執持け、次第に而上りて梵天に至る』

これを、天台大師はこういふふうにならされる、旃蓋は翻へる、これは轉の義である、蓋は、これは上からこうかぶさるのであるから、覆の義である。この旃蓋を執持け、蓋を執持け、次第に地から上つていつた、そして梵天まで上つていつた、これは如來壽量品を聞いて、功徳を得た、その菩薩方のことを、一つの姿として示した、地からだん／＼上つていつた地は何を示すのであるか、それは地は始の義である、梵天の梵は淨の義である。これはどういふことを示したのであるか、諸の菩薩は、皆、十信の位の菩薩が、十住・十行・十回向・十地といふふうになら自分の功徳を増していく、それを『増道』といふ、そして自分の煩惱、生死の煩惱を次第々々に餘計になくしていく、それを『損生』といふ。かくてだん／＼展轉して菩薩の位が上つて行く、それはちやうど旃蓋がこうやるやうに（手をひらく動かしながら）、次第々々に展轉していく、その展轉していくと同時に、段々と慈悲の方が上からかぶさる、大きな旃蓋みたいに展轉していくやうに、自分が増道損生していく、生死煩惱を少くして、佛の覺がひらけていく、（ボ

「ルドを指しながら」施は智斷の展轉増上する方、蓋は慈悲が遍く覆ふていく、その事を譬へられた。十住の菩薩が、十行十回向とだんくと、智斷の轉と慈悲の覆ふことが増していく、かやうに次第に展轉して慈智を倍増していく、次第々々に倍増して、佛の智慧に到る、梵天は佛の世界をいつたものである、十地から佛まで上ツていく、それがちようど、旛が翻へる様にだんくと上ツて、増道損生していく、蓋が上から覆ふやうに慈悲が倍増して行くことを、こゝろいふ風に譬へたものであると、天台大師は、おっしゃつた。

以上が、時の衆佛恩を報ぜんとして供養を説くであります。

次は、四、彌勒孤起偈もて領解を述べ。

佛が功德を分別された、そして衆生が喜んだ、歡喜の心を起し、自ら佛を供養し、一會の衆生が供養する、そこで彌勒菩薩は韻文の言葉で以て之を頌められる。

『爾の時、彌勒菩薩、座よりして起ち、偏に右の肩を袒ぎつゝ、合掌して佛に向ひ、而て偈を説きて言さく、

佛希有の法を説きたまふ、昔より未曾て聞かざる所なり、世尊は大じき力有し、壽命量るべからず、無數なる

諸の佛子、世尊が分別して、法の利を得る者を説きたまふを聞き、歡喜身にぞ充滿てる』

これは佛の功德分別を承はつて、みな歡喜だ、これだけは、こゝろいふ覺を得たといふ、確實な證明を下されたから、そこで一會の衆生は、みな歡喜だのであるといふことを頌ひ、次には如來が分別せられたことを頌ふのである。

『或は不退の地に住り、或は陀羅尼を得、或は無礙の樂説を、萬億の施總持あり、或は大千界の、微塵數の菩薩有りて、各々皆能く、不退の法輪を轉らす、復中千界の、微塵數の菩薩有りて、各々皆能く、清淨の法輪を轉らす

復小千界の、微塵數の菩薩有りて、餘各八生有りて、當に佛道を成げ得べし、或は四三二の、此の如き四天下の

微塵數の菩薩有りて、數に隨へる生にして佛と成るべし、或は一の四天下の、微塵數の菩薩は、餘一生在ること

有りて、當に一切の智を得べし、是の如き等の衆生、佛の壽の長に遠けきことを聞きつ、量無き無漏の、清淨の果

報を得き、復八の世界の、微塵數の衆生有りて、佛の壽命を説きたまふを聞きて、皆無上の心を發しつ、世尊の説

きませる無量、不可思議の法は、多く饒益ふ所有すこと、虚空の邊無きが如し』

以上は佛の分別されたことを偈を以て頌めた、へたのであります。その次

『天の曼荼羅、摩訶曼荼羅を雨らしつゝ、釋梵恒沙の如く、無數の佛土より來りぬ、栴檀沈水を雨らして、繽紛と

して亂れ墜つるさま、鳥の飛びて空より下るが如くにて、諸の佛に供へ散し、天の鼓は虚空の中に、自然に妙の

聲を出し、千萬億の天の衣、施轉り而來り下りつ、衆寶の妙の香爐に、無價の香を燒き、自然に悉く周徧てて、

諸の世尊に供養す、其の大菩薩衆は、七寶の旛蓋の、高く妙にして萬億種なるを執げ、次第して梵天に至る、

一一の諸佛の前には、寶の幢に勝れたる旛を懸け、亦千萬の偈以て、諸の如來を歌詠ひたてまつる、是の如き

種々の事、昔より未曾て有なき所なり、佛の壽の無量なることを聞きて、一切のもの皆歡喜ぶ、佛の名十方に聞え

て、廣く衆生を饒益ひたまふに、一切のものは善根を具へて、以て無上の心を助くるなり』

以上がその時の供養を述べたのである、そこでこの最後の一行半の偈であります。

聞三佛壽無量、一切皆歡喜

佛名聞十方、廣饒三益衆生

一切具三善根一 以助無上心一

これは佛の壽命無量なることを聞いて、一切皆歡喜をした、それではどういふふうにか歡喜したかといふと、十信、乃至、等覺、妙覺の功德を得た、それと同時に、佛の名前が十方に聞えた、廣く衆生を饒益する、その佛の名はなんであるかといふと、それは佛壽無量なる佛である、その佛壽無量なる佛は、どんな佛であるかといへば寶塔品以來の、十方のあらゆる佛はみなこの佛の分身である。それから三世益物の佛は、みな唯一の佛である。本地唯一の佛が十方に姿を現はすのである。本地の佛が三世に利益するのである。その佛は唯一の佛である。それでは何といふ佛であるかといふと、それは釋迦牟尼佛であります。その佛の名には、一切義、一切の善根を備へてゐる、南無釋迦牟尼佛の中に、一切の佛を備へてゐる、阿耨多羅三藐三菩提心を、それによつて助ける、どう助けるか、一切衆生の本來持ツてゐる佛性を、引き出す力が、その佛の名前の中にはいつてゐるといふのである。その佛の名前は、南無釋迦牟尼佛であるが、それは未だ垂迹の名であつて、眞證の名は、南無妙法蓮華經である、南無妙法蓮華經の中に、一切の善根が備はつてゐる。そして一切の衆生の佛性を引出していく力が備はつてゐる。

知三法常無性 佛種從緣起一 是故說三乘一

といはれたのも、又大聖人が

釋尊因行果德二法、妙法蓮華經五字具足、我等受三持此五字一、自然護三與彼因果功德一

といはれたのも、みなこの意味である。

法は常に無性なり、佛種は緣より起ると知らしめす、この故に一乘を説きたまふ。佛種は緣に從て起るのである。

その緣とは何かそれは一乘によつて一切衆生の佛性が起るのである。一大事因緣は妙法蓮華經である、その妙法蓮華經によつて衆生は佛性を起すのである。

此の妙法蓮華經は、境智相照して一切の善根が備はつてゐる、そしてそれで、衆生の持つてゐる菩提心を引き出していくのである。觀心本尊抄に、「釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を護り與へたまふ」とある。

こういう場合は釋尊の因行果德が妙法蓮華經の五字の名に即してゐる、一切の善根は釋尊の因行果德に具はつてゐる、そこで衆生の無上心を助ける、無上心とは何であるか、我々衆生の本來もつてゐる佛性である。その無上心を一切具善根の妙法蓮華經の名によつて引き出す、そういふふうには、日蓮聖人の方からは、この最後の言葉を、解釋せられるのであります、以上が第四章の處であります。

以下本門流通分、經を訖るまで十一品半、五品半にて虚空會を訖る、此の半品より不輕品に至るまでは弘經の功德の深きを明して流通を勸む、この品と後品の隨喜功德品は、初心の因の功德を明すといつて、初心の修行者の、その修行の一番最初の功德を明した、それに對して法師功德品は初心の果の功德を明し、不輕品は因果の功德を具したる人に因せて信毀の罪福を明すので、即ち不輕品は、初心の行者が、六根清淨の果の功德を得た、それを一人の人間が、チャントこれを實行していくことを明かにしたものである。それで本迹の經の修行の方法がわかつたから、次の神力品と囑累品に付囑といふことがある。そこでこの分別品で、上の彌勒菩薩の偈の後からをば、流通分に入れられてゐるのは、これから現在の四信といふものが説かれる。即ち佛が現在まします時に、會座にて聞いてをった人間を

して、法華經を展轉せしめられる、その人々が法華經を弘める、そこでそれから流通分とせられた。

弘める時には、自ら信じ人をして信じしめるのだから、何でもかでも信から始まる。そこで四信といって、四の信の位がある、即ちいかなる位もみな信仰が因だから、四つの信の位があるといふのである。それから佛が、おかくれになつてから即ち滅後には五品といつて五つの品の位がある。現在には四信の位があり、それから佛の滅後には、五品の位がある、それを示されたのが、此の分別品の後の部分である。

現在ニ、四信ノ位、滅後ニ、五品ノ位

そこで、本門の功德に、先づ現在四信の第一、一念信解の功德を明される、一にはどんな人であるか、二には、どんな人が、どんなことをするが、三には、その功德を格量る標準を示した、それから更に、その功德を得たものが、行位不退である、修行でも、位の上でも不退である、退轉しない、そういふことを明された。

「爾の時、佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、阿逸多よ、其れ衆生有りて、佛の壽命の長に遠けきこと是の如くなるを聞きて、乃至能く一念の信と解だに生さば」

一念信解の位、これは四信の第一である、一念の信と解だに起さば、信と解と兩方ある、信仰のみでなしに、その信について、ある一つの解を起さなくてはならないといふのである、日蓮聖人は、こういふふうにおつしやつてをられる、これは解といふものゝ、信といふものゝにくつ附いてゐる解で、獨立したほどの解ではないといはれるのである、それなれば聖人はなぜそういふことを斷言せられたのであらうか、といふと、日蓮聖人は、この一念信解の次の位は、第二の略解言趣である、略ぼ言の趣きを解する、如來壽量の略解ニ言趣一だ、如來の生命は五百塵點の昔か

らの生命である、それはどういふ譯であるかといふことを、略知ることであるといふ位が第二に在るのであるから、この第一の一念信解の中の解とは、決して言趣を略ぼ解るといふほどの解でもない。只信といふものゝ中に含まれてゐる、兎に角命がけて信するといふ限りは、どこかに信じてゐる理由の何ものかであるに相違ないのである、信じ解るとあるけれども、信そのものゝ中に解は含まれてゐる状態が一念信解である、信じてゐるその人その人の相應の解だけでよい、一念信解の位といふものはそれでよい、さてその位の得る處の功德はどうかといふと、限量有ること無けむ、「一念信解の人その人の得る所の功德は限量有ること無けむ」そこで、それでは、どの位の功德があるかといふ目安を付ける。

『若し善男子善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に、八十萬億那由他の劫に於りて、五の波羅蜜を行せん、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なり。般若波羅蜜をば除く。是の功德を以て、前の功德に比べんに、百分千分、百千萬億分して、其の一にだも及ばず。乃至、算數も譬喩も知ること能はざる所なり』

これが目安であります。

この中にある五波羅蜜といふのは、

- ・檀波羅蜜——布施
- 尸羅波羅蜜——持戒
- 羼提波羅蜜——精進

毘梨耶波羅蜜——忍辱  
禪波羅蜜——禪定

これ等の五波羅蜜をば、八十萬億那由佗劫の間修行した、但し般若波羅蜜（智慧）を除く、この般若波羅蜜をなぜ除くかといふと、法華經は諸法實相の智であるからである、五波羅蜜を行する、この五度を以て、八十萬億那由佗の劫に於て修行した、この功德を、一念信解の功德に比較すると、たゞ法華經の一偈一句の法門を聞いて、單に難有と思つたその一念信解の功德と、どちらの方が功德が多いかといふと、それは一念信解の功德の方が優れてゐる、五波羅蜜を永い間修行して得た功德を、この一念信解の功德に比較するときは、正に百分、千分、百千萬億分しても、その一つだも及ばない乃至算數も譬喩も及ばぬばかりに違ふといふのである、そこで、日蓮聖人は、守護國家論の中で、念佛と法華經との功德の多少を比較せられた時に、念佛三昧は此の五波羅蜜の中の禪定波羅蜜の一つに過ぎないのであるといはれてある、要するにこれは法華經の方が、どんな僅な法、それは一偈一句のどんな僅かな信、一念の信解でも、遙かに爾前經の五波羅蜜の功德に勝れてゐるといふことをいはれたものである。前に法師品の處にありました一偈一句一念隨喜とある、あの一偈一句、一番僅な一偈一句の信仰でも、極く僅かな、所謂一念ばかりの隨喜のやうなものでも、その功德は、阿耨多羅三藐三菩提に當るといふのである、然しながら、今こゝで一偈一句は、單なる一偈一句でなしに、如來壽量品の一偈一句である、その如來の久成したまへる實在の佛の功德、佛の生命の一偈一句を明されてゐる。その功德は、爾前述門の五波羅蜜を、八十萬億那由佗劫といふ永い間修行した功德に比べて、勝れてゐること、算數も譬喩も知ることが出来ないといふことを示されたのであります。

それから

『若し善男子の、如是の功德有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於て退くといはんは、この處有ること無からむ』

それは、位の上からも、決して退かない處へいつた、事實修行の上に於てもその處にいつたなれば、根本に於て退轉することは出来ないといふ事を、佛が衆生に格量きかされました。

それから次、第六は重頌です。

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく』

若し人佛の慧を求めて、八十萬億那由佗の劫の數に於て、五の波羅蜜を行ぜん、是の諸の劫の中に於りて、佛及び緣覺の弟子、並に諸の菩薩衆に、珍異なる飲食と、上服と臥具とを布施し供養し、施檀もて精舎を立て、園林を以て莊嚴しつ、如是の等の布施、種々に皆微妙にして、此の諸の劫數を盡して、以て佛道に回向せん』

これは布施波羅蜜であります。

『若し復禁戒を持ち、清淨にして缺漏無く、無上の道の、諸佛の歎ふる所なるを求めむ』

これは持戒波羅蜜です。

『若し復忍辱を行じて、調柔なる地に住り、設ひ衆惡の來り加ふとも、其の心傾き動かす、諸の有ゆる法を得し者の、増上慢を懷けるありて、斯が爲めに輕め惱まされん、是の如きをも亦能く忍ばん』

これは忍辱波羅蜜です。

『若し復勤めて精進し、志念常に堅固に、無量億の劫に於いて心を一にして懈怠らざらん』

これは精進波羅蜜です。

『又無數の劫に於りて、空閑き處に住ひつゝ、若し坐し若し經行り、睡を除きて常に心を攝めむ、是の因縁を以ての故に、能く諸の禪定を生じ、八十萬億の劫に、安住ひて心亂れず、此の一心の福を持ちて、無上の道を願ひ求めつ、我一切の智を得て、諸の禪定の際を盡さんと』

これは禪定波羅蜜です。

『是の人百千萬億の劫數の於中に此の諸の功德を行すること、上に所説が如くならんも』

これは五波羅蜜を修行した菩薩です。

『善男子等の、我が壽命を説くを聞き、乃至一念だも信するもの有らば、其の福は彼にも過ぎたらん』  
即ち今の一念佛解の人の功德は、八十萬億那由他劫に五波羅蜜を行じたる功德にも勝れるのです。

『若し人悉く、一切の諸の疑悔有ること無く、深き心に須臾も信ぜむ、其の福此の如きを爲む、其れ諸の菩薩の、無量の劫に道を行するもの有りて、我が壽命を説くことを聞いて、是れ則ち能く信受せん、是の如き諸の人等は、此の經典を頂受けつ、我も未來に於て、長壽くして衆生を度さむこと、今日の世尊の、諸釋の中の王として道場にして師子吼したまひ、法を説きたまふに畏かる所無きが如く、我等も未來世には、一切に尊び敬はれ、道場に坐せん時、壽を説くこと亦是の如くならん』願はむ、若し深き心の有らん者、清淨にして而も質直に、多聞にして能く總持ち、義に隨ひて佛語を解らむ、如是なる人等は、此に於いて疑ひ有ること無からむ』

この中で、この如來壽量品を聞いて、そして佛の常住の有難さを悟つた、それでどうして、佛が無量の壽命を有つ

てをられるか、そして宇宙世界の、唯一の存在者であらせられるかといふことを信じ、その佛に隨順し、その佛の心を得たならば、我々も、その無窮の壽命を得るであらう。佛の八相成道する徳があつたならば、矢張り如來成道の無窮の壽命を得ることが出来るであらう。その時、自分からいつたならば、過去は永くはないが、將來は無窮の壽命になつてしまふのであらう。これを新成顯本といふのです。

然し新しく成佛したんだから、顯本することが出来ない、今度佛になつたものが、何時から佛になつたといふことはいへない、だから新成顯本といふものは無いだらうといふ話がある、これは、そういう場合は、面倒な問題になりますから餘りこれは詳しく言ひませんが、大體法身といふものは、自分は常住法身の生命から來るものです、法身を以て、自分の古い命だといふことは誰でもいふことが出来る、それから將來無窮の生命も、眞に眞理を證すれば誰でもいふことが出来る筈です。

それは法身は無始無終であるといふことにきまつてゐるからです、そこで新成顯本の場合は、始めがあつて終りがない、ちやうど恩師が、滿洲國に王道を説かれた時分に、これから滿洲國が新しく王道を實行したならば、これから先の方では天壤無窮であるといふことをいはれてゐますが、矢張り同一の意味で、道そのものが天壤無窮であつたならば、その道を実行するものはこんど新しき天壤無窮になる、新しく成佛したものが、常住の佛の生命と一つになつた場合、それはこれからが無窮の生命になるのです、そこで、その天台の方では、さういふ譯ですから、佛にも新しい佛と、古い佛と様々ある、釋迦牟尼佛は、東方五百千萬億那由他の世界の塵の數に成佛已來の劫數を喩へられましたが、最もそれより久しいものは四方の五百千萬億那由他の世界の塵の數に喩へ、尙ほ更に久しいには十方の五

百千萬億那由他の世界の塵の數に喩へるといふことがいはれてゐますが、それは一種の迹門での方便説で、日蓮聖人の立場から申せば、如來壽量品の五百塵點は一つの譬喩である、無始の生命の譬喩であると、かう説かれてゐます。そして今の此の菩薩が成佛した時の顯本即ち新成顯本は、釋尊の命を自分の命にする、釋尊の生命の中にはいつてしまふ、そういふやうな結果になります。

次は第七で、これは、第二信第三信第四信の三信の功徳を明されてゐます。

『又、阿逸多よ、若し佛の壽命の長に遠けきことを聞きて、其の言の趣を解るもの有らむに、是の人の得る所の功徳は限量有ること無くして、能く如來の無上の慧を起さん』

これは第二信の略解言趣です、これは最初の一念信解よりは、更に解の方が生長して、略ぼ佛の壽命長遠の旨趣を解するので、それから第三信は、廣く他の爲めに説くで、廣爲他説といはれます。

『何に況んや、廣く是の經を聞き、若し人を教ても聞かしめ、若し自らも持ち、若し人を教ても持たしめ、若し自らも書き、若し人を教ても書かしめ、若し華香瓔珞、幢旛繪蓋、香油蘇燈など以て經卷を供養せんをや。是の人の功徳は量無く邊無くして、能く一切種智を生さん』

つぎの第四信は深信觀成で、

『阿逸多よ、若し善男子善女人の、我が壽命の長に遠けきことを説くを聞きて、深き心に信じ解らば、即ち爲佛常に香鬘峯山に在して、大菩薩と諸の聲聞衆の、圍繞せると共に、法を説きたまふことを見む』

如來常住に在しますことをば、主觀的に確實に信仰し觀見することが出来るぞ、そういふことの仰せで、常在靈鷲

山といつても、たゞこゝに居るぞと佛がおツしヤツた、質直柔軟にして、その御語を信じ、一心に佛を見たてまつらんと欲して、身命を惜まずとなる、この時にその常在靈鷲山の佛が、靈鷲山に儼存しましたまはれることが信ぜられ觀ぜられるのです。そしてそれを自分の心の中に、はつきりと見ることが出来ることです。

『又、此の娑婆世界の、其の地瑠璃にして、坦然として平正けく、閻浮檀金を以て八の道を界し、寶の樹行び列り、諸の臺、樓觀など、皆悉く寶もて成されつ、其の菩薩の衆咸な其の中に處へることを見ん、若し能く是の如く觀ること有らむ者は、當に知るべし、是を深信解の相とは爲く』

以上、佛、在世には、一念信解・略解言趣・廣爲他説・深信觀成とこの四の位があります、この四の位は、みな信から成立してゐるもので、四信といひ、その四信の位は、菩薩の十信といふ位の前にある位であります。

次の第八は滅後五品で、滅後には四信が五品となる。なぜかといふと、お經を讀誦する位が増すからです。

『又、復、如來の滅しぬる後に、若し是の經を聞きて而も毀し訾らず、隨喜の心を起さむは、當に知るべし、已に深信解の相と爲く』

滅後の五品の位の第一は、初隨喜品で、それから第二は讀誦品、第三は説法品、第四は兼行六度品、第五は正行六度品、かういふふうの五の位があります。

今讀みました處は、法華經の教をうツかり譏らない、なる程その通りだと隨喜喜ぶ、これが深信解の相の始めを得たものである、深信觀成の深信のはじめです。在世には四の位がありました、みな信を以て一貫して、その一番初めの一念信解は、最初心の功徳を説いたものです、眞實の信は四つとも一です。ですから今滅後の初隨喜品の時



に、法華經を聞くことが出来て、それを隨喜ぶ歡喜の中に、一念信解の信の中の、四信を貫く眞の信が、その歡喜の中にはいつてゐるので、そこで隨喜の心を起さむは、當に知るべし、已に深信解の相ぞといふことになりす。

『何に況んや、之を讀誦んじ受持たん者をや、斯の人は則ち爲如来を頂に載せまつるなり。阿逸多よ、是の善男子善女人は、我が爲めに復塔寺を起て、及び僧の坊を作り、四の事を以て衆の僧を供養せんことを須むす。所以者何とならば、是の善男子善女人の、是の經典を受持ち讀誦んぜん者は、爲已に塔を起て、僧の坊を造立み、衆僧を供養せるなり』

これは第二品の讀誦品です、飲食、衣服、宿る場所、飲みもの(湯藥)といふ四つの事を以て、諸の僧を供養することは出来ない、この法華經の妙法を眞證に信解し、讀誦んじ、受持つてをツたなればそのことだけでよい、『是の善男子善女人の、是の經典を受持ち讀誦んぜん者は、爲已に塔を起て、僧の坊を造立み、衆僧を供養せるなり』その法の中に、あらゆる三世十方の佛法僧の三寶は、皆此處にましますのであるから、別に僧を供養することは要らないのであるから、よく隨喜し、よく讀誦するものは、

『則ち爲、佛の舍利を以て七寶の塔を起つるに、高く廣く、漸く小にして梵天に至り、諸の旛蓋及び衆の寶の鈴を懸け、華香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、衆の鼓、伎樂、簫笛、箏篋、種々の舞の戲ありて、妙なる音聲を以て歌唱ひ讚頌ふるなり。則ち爲、已に無量百千萬億の劫に於りて、是の供養を作し已れるなり』

そこで次には説法品、

『阿逸多よ、若し我が滅しぬる後この經典を聞きて能く受持ち、若し自らも書き、若し人を教ても書かしむること

有らむには、則ち爲、僧の坊を起立し、赤旛檀を以て、諸の殿堂を作ること三十有二、高さ八多羅樹、高く廣く嚴しく好しくして、百千の比丘其が中に於て止み。園林、浴池、經行、禪窟、衣服、飲食、牀蓐、湯藥、一切の樂の具、その中に充滿たむ。如是なる僧坊、堂閣。若干百千萬億にして其の數量り無き、此を以て現前に我及び比丘僧に供養するなり。是の故に我説く、如来の滅しぬる後に、若し受持ち讀誦んじ、佗人の爲めに説き、若し自らも書き、若し人を教ても書かしめつ、經卷を供養すること有らんには、復、塔寺を起て、及び僧の坊を造り、衆僧を供養することを須むす』

法華經をば、信じ及び受持ち讀誦んする、さうしたならば、佛の爲めに塔を起てたり、僧の爲めに坊を造つたりする、さういふことは必要ない。何故かといふなれば、この法の中に法華經の中に、佛は在しますといふことが、法師品の中にある。故に塔を起てることもいらない、更に此處では僧坊を造ることもいらない、佛も僧も悉く、本經の中に納まつてしまつてゐる、これをば一體三寶といふ。佛法僧は三であるけれども、それを一に收めてしまふ、今は法の中に收めてしまふ。又佛の中にも納めることが出来る、僧の中にも一つに納めることが出来る、今は法の中に納められたのです。佛法僧の中で一番の根本は何であるかといひますと、佛が根本である、佛が法を悟り、法を説き、僧をして傳へしめられるのである。けれ共、一切衆生が今度自ら佛の悟りに入らうといふのには、又自分達が法を得なくてはならぬ、單に佛の法を信する信者だけではいけない。その信の中にも、おのづから解りがなければならぬ。解るとは法を解るのである。法を信じそして解るのである、だから此の衆生が佛の悟りに入つて行く方からいふと、法が中心にならなくてはならない、或は佛が中心になり、或は法が中心となり、或は僧が中心となるのは、みな

約束の相違で、教には佛が中心、行には僧が中心、證には法が中心です。今は佛は如來壽量品を説かれた、そして佛の常住の生命をお顯はしになつた、そしてその佛は入滅される、残るものは佛の魂を説かれたこの法、即ち法華經で、この法華經の中に一切總ての法が收めてある。この方からいへば、先づ法が根本であります。

そういふ方面からいへば、佛の塔を起てたり、僧を供養することは必要がないのであります。

『是の經典を受持ち讀誦んぜん者は、爲已に塔を起て、僧の坊を造立み、衆僧を供養せるなり、則ち爲、佛の舍利を以て七寶の塔を起つるに、高く廣く、漸く小にして梵天に至り、諸の旛蓋及び衆の寶の鈴を懸け、華香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、衆の鼓、伎樂、簫笛、箏篋、種々の舞戲ありて、妙なる音聲を以て歌唄ひ讚頌ふるなり。則ち爲、已に無量千萬億の劫に於りて、是の供養を作し已れるなり』

法を受持し讀誦する、この中にあらゆる功德、佛を供養し僧を供養する事もみなはいつてゐます。

『阿逸多よ、若し我が滅しぬる後はその經典を聞きて能く受持ち、若し自らも書き、若し人を教ても書かしむること有らんには、則ち爲、僧の坊を起立し、赤旃檀を以て諸の殿堂を作ること三十有二、高さ八多羅樹、高く廣く嚴しく好しくして、百千の比丘其が中に於て止み、園林、浴池、經行、禪窟、衣服、飲食、牀蓐、湯藥、一切の樂の具其中に充滿たむ。如是なる僧坊、堂閣、若干百千萬億にして其の數量り無き、此を以て現前に我及び比丘僧に供養するなり、是の故に我説く如來の滅しぬる後に、若し受持ち讀誦じ、他人の爲めに説き、若し自らも書き、若し人を教ても書かしめつ、經卷を供養すること有らんには、復、塔寺を起て、及び僧の坊を造り、衆僧を供養することを須めず』

こゝまでは、お寺を造つたり、坊さんを供養することは必要ないと、こう説かれてある。これは一體どういふ譯であるか、これに就て天台大師はこのことをば、こう書いてをられる。

『初心ハ縁ニ紛動セラレ、正業ヲ妨ゲムコトヲ畏ル。直チニ專ラ此ノ經ヲ持ツハ即チ上供養ナリ、事ヲ廢シ理ヲ存セバ、所益弘多ナリ』

これはどういふことかといふと、所謂初めの隨喜品から説法品までの人は、初心の人である。その初心の人は塔を起てたり、お寺を造つたり、僧を供養しなくてはいけないといふやうなことになる、外縁的の事行に紛動せられることになる、正業といふのは、諸法實相の眞理を眞實に自分のものにする行、それを妨げられて、根本の肝心なものを獲へることが出来なくなる、そこで直ちに法華經を受持するといふこと、そのことが最上の供養である。佛の塔を起てるよりも、僧の坊を造るよりも、最も大切な事は、それは如來の精神です、それから理を存しとは、如來壽量品を受持することである、眞理をば受持することである。それはその方が利益が多いのである。この壽量品の如來常住の眞理に根が立つてゐれば、後のものは枝葉である、そう書いてある。そこでこういふふう塔を起てたり、僧を供養する必要はないと、如來はわざ／＼仰しやつてある。初隨喜品が有難い、その次は讀誦する、次は説法する、それからその次の處に行くと、今度は兼行六度品である、然しそういふ塔を起てたり僧を供養することや、六波羅蜜を修行することは、必ずしもいらぬが、やつていけないことではない、必ずしも必要でない、後心のもの、即ち最早法華經の壽量品の眞理の確信が立ち、それを人に説法するまでに至つた人は、

『況んや復人有りて、能く是の經を持ち、兼ねて布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧を行ぜんをや。其の徳最も

勝れて量無く邊無けむ。譬へば虚空の、東西南北四維上下に量無く邊無きが如く、是の人の功德も亦復是の如し。量無く邊無くして、疾く一切種智に至らん」

以上は兼行六度品、即ち壽量品の信仰に、兼ねて六波羅蜜を行する位であります。上の一心、智慧とある一心とは、禪定の換名なのです。

次に

『若し人、是の經を讀誦んじ、受持ち、他人の爲めに説き、若し自らも書き、若し人を教ても書かしめ、復能く塔を起て、及び僧の坊を造り、聲聞の衆僧を供養し、讚歎へ、亦百千萬億の讚歎への法を以て菩薩の功德を讚歎へ。又、他人の爲めに、種々の因縁をもて、義に隨ひて此の法華經を解説し。復、能く清淨に戒を持ちて、柔和なる者と共に同じく止み。忍辱にして瞋無く、志念堅固にして、常に禪に坐することを貴びて、諸の深き定を得つ。精進勇猛にして諸の善き法を攝め。利根く智慧ありて善く問難に答へん。阿逸多よ、若し我が滅しぬる後、諸の善男子善女人の、是の經典を受持ち、讀誦んぜん者にして、復如是なる諸の善しき功德有らば、當に知るべし、是の人は已に道場に趣きて、阿耨多羅三藐三菩提に近づき、道樹の下に坐せるなり。阿逸多よ、是の善男子善女人の、若し坐し、若し立ち、若し是の經を行する處、此の中には便ち應に塔を起つべし。一切の天人、皆應に供養すること佛の塔の如くにすべし』

是は正行六度品、正しく六度を行する位である、以上は、滅後の五品といふものを説かれた、この滅後の五品の中で、特に根本と枝葉とを區別されてゐる。根本はこの經の信念である、六度は枝葉である、そういふことが解りました

て、前の一念信解の功德は、八十萬億那由他の間、五波羅蜜を修行した功德は、到底、この一念信解の功德に及ばないといはれてゐる。それは根本と枝葉との相違から出て來るといふことが解るのであります。

次は第九で、重頌もて明すで、これには第一の初隨喜品が略せられ、いきなり第二の讀誦品です。

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく  
若し我が滅度の後に、能く此の經を奉持たば、斯の人の福量り無し、上の説きつる所の如し、是則ち爲、一切の諸の供養を具足しつ、舍利を以て塔を起て、七寶をもて莊嚴しつ、表刹甚も高く廣く、漸く小にして梵天に至り、寶の鈴千萬億ありて、風の動かすに妙なる音を出し、又無量の劫に於て、而ち此の塔を供養するに、華香諸の瓔珞天の衣衆の伎樂あり、香油蘇燈を然し、周く匝りて常に照明なり、惡世末法の時、能く是の經を持たん者は、則ち爲已に上の如く、諸の供養を具足せるなり』

此處に、『惡世末法中、能持是經者、則爲已具足、如上諸供養』といふ言葉があるといふことを、注意しなくてはなりません、受持の一行だけでこの一切がままつてゐる。つぎは第三の説法品。

『若し能く此の經を持たんは、則ち佛の現在に、牛頭の梅檀を以て、僧の坊を起て、供養するに、堂有ること三十、二、高さ八多羅樹なり、上じき膳と妙なる衣服、牀臥など皆具足し、百千の衆の住處、園林諸の浴池、經行及禪窟、種々に皆嚴しく好しくせるが如し、若し信解の心有りて、受持ち讀誦んじ書き、若し復人を教ても書かしめ、及び經卷を供養しつ、華香抹香を散らし、須曼瞻蔔、阿提目多伽の、薰の油以て常に之を燃さん、如是に供養せん者は、量無き功德を得んこと、虚空の邊無きが如く、其の福も亦是の如けむ』

以上、讀誦品と、説法品ををばつたので、つぎは

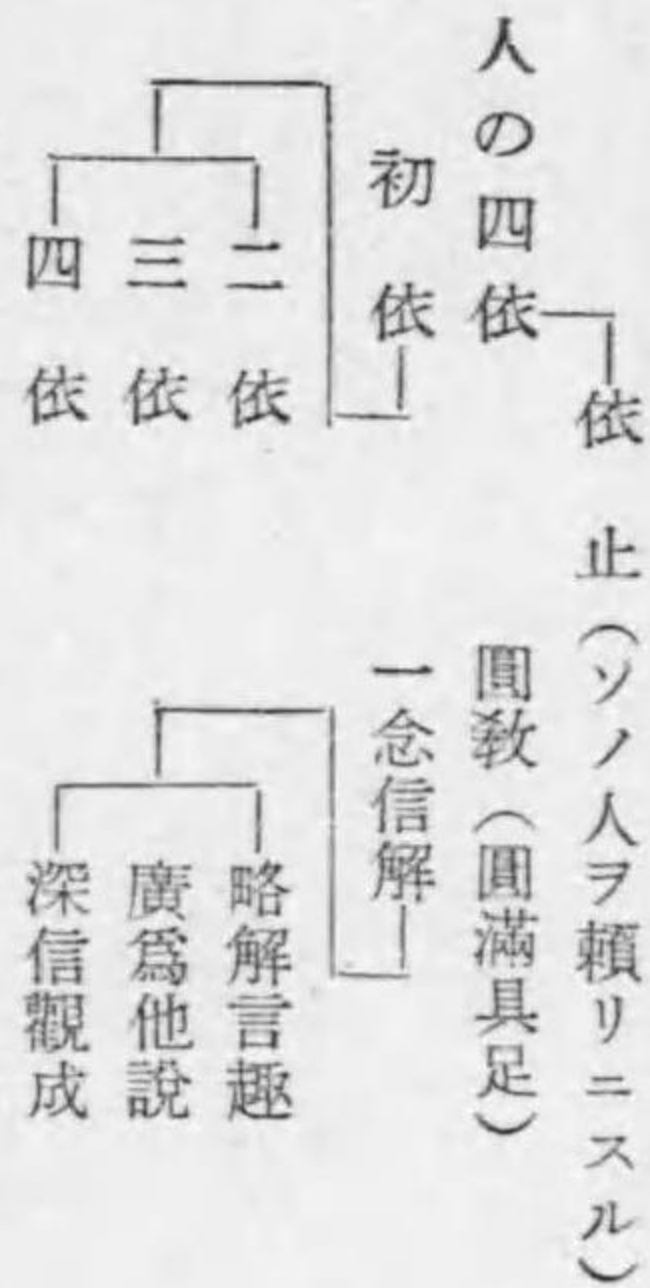
『況んや復此の經を持ちて 兼て布施し持戒し 忍辱にして禪定を樂ひ 曠らす惡口せざらんをや』

第四兼行六度であります。

『塔廟には恭敬し 諸の比丘に謙下りて 自高の心を遠離け 常に智慧を思惟りつ、問難すること有らんも曠らす、隨ひ順へて爲めに解説さん 若し能く是の行を行めなば 功德は量る可からず 若し此の法師の 如是の徳を成就 げたるを見ては、應に天の華以て散らし 天の衣を其が身に覆ひ 頭面に足を接りて禮し、心を生すこと佛の想ひの如くにせよかし』

是は正行六度品であります。

『生心如佛想』これはどういふことであるかといふと、この前にも人四依といふことを話したことがあります。



佛が現在ささいな時になつて、その人により止まる、その人を頼りにする、正行六度の人がある時代なれば、その人を頼りにする、位が一番下の初隨喜品の人しかなければ、その人を、佛の想の如くにしてこれを供養すべし。この偈

は『惡世末法の時、能く是の經を持たん者は、則ち爲己に上の如く、諸の供養を具足せるなり』。この偈の中に惡世末法というてをられるのは深い譯がある、日蓮聖人の御化導は、ちやうど諸の比丘に謙下りて解説されたものであるといふと、然らば四大格言の如きは全く反對の行動ではないか、といふ人があらうが、それは正しくないもの、所謂正法を受持しないものに向つては、大折伏を行はれたが、心正しき比丘に在つては、眞に謙下りを實行されてられる、自高の心、傲慢な心は、日蓮聖人にはない、大聖人自ら仰つてをられる。『日蓮は持戒にも無戒にも、聖にも賢にも、有智無智にも當らず、牛羊の如きものなり』とまで、自らの身を謙下つておほせられてゐる、決して自高の心なぞはない、人の四依の中には、二依、三依、四依といふものがあるが、それはこの圓教の中、初依の中にみんなはいつてゐるもので、圓教と云ふのは、一つで萬事のちがひなく、總て圓滿具足してゐる、それが圓教である。先刻申しました一念信解の中に、略解言趣も、廣爲他說も、深信觀成も、みな一念信解の中にはいつてしまふ。五品にしても、初隨喜品の中に、讀誦、説法、兼行、正行、みな初隨喜品の中に入れてしまふ、それが末法の中の究極の圓教であります。

『又應に此の念を作すべし、久しからずして道場に詣り、無漏無爲を得て、廣く諸の天人を利まんと、其の所住り止る處、經行若し坐し臥すところ、乃至一の偈をも説かば、是の中には應に塔を起て、莊嚴して妙に好しからしめ、種々に以て供養すべし佛子、此の地に住らば、則ち是れ佛受用したまひ、常に其の中に在して、經行若し坐し臥したまはむなり』

佛と共に、その人は、この法華經を受持し實行する人で、その人は如來常住の佛の現在すことを見ることが出来る

のである、といふことを説いたものであります。以上を以て分別功德品を終ります。

### 隨喜功德品

- (一) 初品の功德を格量する中、彌勒の間に、長行、偈頌
- (二) 佛先づ五十展轉内心隨喜の人を明すに、展轉相教ふ、格量の本、意を擧げて問ふ、誠實に答ふ、正しく格量すの五あり

(三) 直ちに外の聽法の人を明すに、自ら往いて聽く、座を分ちて聽かしむ、他を勸めて聽かしむ、具さに聽いて修すの四あり、以上は長行

- (四) 偈頌に先づ内心隨喜の人に、五十人、格量の本、正しく格量すの三あり
- (五) 外の聽法の人に、他を勸む、自ら往く、座を分つ、聽いて修すの四あり

次は隨喜功德品であります。

前の分別功德品の滅後の五品の中では、始めに五品を列ねて、後の四品の功德を格量され、初隨喜品のことがある。詳しく説かれなかつた、たゞ『隨喜の心を起さむは、當に知るべし、已に深信解の相と爲く』それだけしか説いてない。それでこの初隨喜品だけを特に選び出して、お説きになつてゐるのが是の隨喜功德品です。そこで隨といふことは一體どういふことであるかといふと、隨順事理、事理に隨順するといふことです。それから、喜といふことはどういふことであるかといふと、己を慶び人を慶ぶといふことだといふのであります。隨とは事理に隨順することであるといふその理といふことは、一體どんなことであるかといふと、理は佛の本地深遠にして量り知るべからざるものである。事といふことはどんなことであるか、佛の三世益物が又量るべからざる功德である。理は佛の本地であり、事は三世益物されることである、即ち佛の本體は眞理である。その佛の本體、佛の智慧を以て證りたまふたる常住の眞理に隨順する。また佛の三世益物の慈悲に隨順する。即ち眞理と智慧と慈悲とに隨順することが隨で、己を慶び人を慶ぶといふのは、佛の本地を信することが出来る、三世益物を信することが出来る、その佛の大智大慈の中に入るのであるから、だから必ず救はれるにきまつてゐる。そこでみづから慶ぶ。たゞみづから慶ぶのみでなく、佛の智慧、佛の住したまふ眞理、それから佛の三世に休みなき御慈悲をおもふと、自分がヂツとはしてゐられない、どうか人にもそれを知らしてやりたいといふことになる、即ち佛の三世益物の慈悲を受けついで少しでも人を慶ばせやうとなる。自分は佛の眞理と智慧と慈悲との中に這入れた、どうかそれを受け續いで、人にも知らしめねばならぬ、とその心が止められなくなり、それが隨喜の本體であります。そこでその初隨喜の功德を格量せられるについて、第一には、彌勒菩薩の間であります。

『爾の時、彌勒菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊よ、若し善男子、善女人有りて、是の法華經を聞きて隨喜ば

ん者は、幾所の福をか得べきと。而ち偈を説きて言さく、

世尊の滅度したまへる後に、其れ是の經を聞くこと有りて、若し能く隨喜ばん者は、幾所の福をか得るとや爲む。

先の分別功德品では、滅後五品のはじめの隨喜品の位は、少ししか承はりませんでしたから、どうかそれについて詳しく説いて頂きたいと、彌勒菩薩が佛にお願ひするのに、長行と偈頌とを以てしたのです。

次は二、佛が、先づ内心隨喜の人の功德を明されるので、その第一は展轉して相教ふで、これが有名な五十展轉であります。

「爾の時、佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、阿逸多よ、如來の滅しぬる後に、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び餘の智ある者の、若しは長け若しは幼きもの、是の經を聞きて隨喜び、已て法の會より出で、餘の處に至らん。若しは僧の坊に在りて、若しは空閑き處、若しは城邑、巷陌、聚落、田里にして、其の聞ける所の如く、父母宗親、善友、知識の爲めに、力に隨ひて演説かん。是の諸の人等、聞き已りて隨喜び、復行きて教を轉へむ。餘の人聞き已りて、亦隨喜びて教を轉へむ。かやうに展轉りて第五十に至らん。」

これは、法華經の一番簡易な、信仰の例を擧げられたもので、始め法華經を説いてゐる處でそれを聞いた人が隨喜して、未だこれを聞かざる人に傳へる。これを聞いた人が、又隨喜びの心をおこして、更に次の人に傳へる、その次の人がまた隨喜喜んで、次の人に傳へる、斯して次々と傳はり、第五十人迄に至つた。さうしたなら初めの人聞いた時よりも、どれだけか間違つてゐることは勿論であるが、兎に角、自分の得た隨喜を未だこれを知らない人に傳へようといふ心で、傳へて第五十人までも來た。是れを展轉相教といひ、また五十展轉の隨喜といふ。そこでこんどは、その第五十人が、内心に隨喜喜んで、その功德をば、聞法隨喜の功德を明す格量の本、即ち功德を量る標準とせられる。隨分と間違つて傳はつても來たであらうが、その第五十人目の人が隨喜した功德ですらも、これほどであるぞよと、一番淺かるべき隨喜の功德をば、格量の本とせられるので、

「阿逸多よ、其の第五十なる善男子善女人の、隨喜べる功德をば我今之を説かん。汝當に善く聽くべし。若し四百萬億阿僧祇の世界なる六趣四生の衆生の、卵生と、胎生と、濕生と、化生と、若し有形のもの、無形のもの、有想のもの、無想のもの、非有想のもの、非無想のもの、無足なるもの、一足なるもの、四足なるもの、多足なるもの、是やうの等の、衆生の數に在るものをば、人有りて、福を求めて、其の所欲に隨ひて、娛樂の具もて皆之に給び與へむ。」

まづ四百萬億阿僧祇の世界の、六趣四生の衆生に、彼等が、所欲ところのものが、皆あたへられる、そして「一一の衆生に、閻浮提に満てらん金、銀、瑠璃、砗磲、碼碯、珊瑚、琥珀の、諸の妙なる珍寶、及び象、馬、車乘、七寶もて所成る宮殿樓閣等を與へん。是の大じき施主は、是の如く布施すること八十年を滿し已りて、而ち是の念を作さく、我已に衆生に娛樂の具を施すこと、意の所欲の隨にせり。然るに此の衆生皆已に衰へ老いて、年八十を過ぎつ、髮白く面皺めり。將に死せんこと久しからじ。我當に佛の法を以て而て之れを訓へ導くべしと。即ち此の衆生を集へて、法の化を宣布きつ。示し教へ利み喜ばしめて、一時に皆須陀洹の道、斯陀舍の道、阿那舍の道阿羅漢の道を得て、諸の有漏を盡しつ、深き禪定に於て皆自在なることを得、八の解脱を具へしめむ。」

ふ、この功德は、どれほどの功德であらうか、これが格量の本即ち標準であります。  
「汝が意に於て云何ぞや。此の大施主の得る處の功德は、寧ろ多しと爲さんや、否や。  
彌勒、佛に白して言さく、世尊よ、是の人の功德は甚も多くして、量無く邊無し。若し是の施主、但衆生に一切の樂の具を施すだにも、功德量無きに、何に況んや阿羅漢の果を得しめつるをやと。」

これは佛と彌勒菩薩の問答で、はじめのが、意を擧げて問ふで、つぎのが誠實に答ふであります。この中の、是の人の功德は甚も多くして、量無く邊無し。とありますのは、とても我々の心ではこれを量ることが出来ない功德で御座るぞ、といふのであります。

次は、佛が正しく格量し給ふので、

『佛、彌勒に告げたまはく、我今分明に汝に語らく、是の人一切の樂の具を以て、四百萬億阿僧祇の世界なる六趣の衆生に施し、又阿羅漢の果を得しめて、得る所の功德だに、是の第五十人の、法華經の一偈を聞いて隨喜ばん功德には如かざることを、百分、千分、百千萬億分の其の一にだも及ばじ、乃至、算數も譬喩も知ること能はざる所なり、阿逸多よ、如是に、第五十人の展轉りて法華經を聞いて、隨喜ばん功德だに、尙無量無邊阿僧祇なるぞかし。何に況んや、最初に會の中に於て、聞きて而ち隨喜ばん者をや。其の福の復勝れたること、無量無邊阿僧祇にして、比ぶることを得べからず』

これは大へんなことである。その人の功德——此の第五十人が隨喜喜んだ、一念信解の功德は、四百萬億阿僧祇の世界の六道四生の衆生に、八十年も布施して、最後に阿羅漢の位まで得せしめたといふ功德よりも、百倍、千倍、百千萬億倍以上算數も譬喩も知ることが出来ないほど勝れた功德である。八十年の間布施を四百萬億阿僧祇の世界の六道四生の衆生に施して、後に皆阿羅漢を得せしめた、その功德も、此の法華經の初隨喜の五十展轉の第五十人の人の、その稀薄なる信解に比べると、算數譬喩も及ばないほど異つてゐるぞ、何に況んや、最初の法會の中に於て聞きて、而ち隨喜ばん者をや、と佛が正しく格量せられたのであります。これはどういふことを一體示されたものであり

ましようか、日蓮聖人以外の、支那日本の佛學者は、こういふ方面の法華經の流通といふことについて、全く無關心であつた。考へなかつたのです。法然上人が書かれたものを見ますと、何故念佛を廣宣るやうになつたかといふと、法華經は菩薩二乗の爲めに説かれたのであつて、我々凡夫の爲めに説かれたものでないといつてゐられます。これは法然上人だけでなくして、支那の學者の多くはそんな事をいつてゐるのです。

それに對して、たゞ天台大師は特にこういふことをいはれてゐます。

『上來ノ持經功德ヲ稱美ス、時ノ衆ハ咸ナ眞因ノ位ニ入テ、乃チ斯ノ德ヲ致スト謂ヘリ。』

この眞因といふのは初住といふ菩薩の位です。十住の中の初住、眞理にちゃんと安住しはじめたといふ位に入つたのである。その位の人に、そのやうな功德があるものだとおもつてゐたのです、そこで

『初心ノ初ニ於テ、輕弱ノ想ヲ起ス』

初心の初といふ、前の初隨喜品、一念信解といふ位に、既にこういふ立派な功德があるといふことを想はないでゐるのです。

『忽チ好堅地ニ在リテ芽已ニ百圍、頻伽鼓ニ在リテ聲衆鳥ニ勝ルヲ聞キ、希有奇特輕疑釋然タリ、故ニ隨喜功德品ト名ヅク』

今この隨喜功德品の第五十人すらもこんな功德がある。ちやうど例へていふと、好堅といふ木は、初め芽が出ると恐ろしい大きな木であつて、地中にあるときその芽が已に、百人もかゝつてやつと圍へるといふやうな大木である。それから、頻伽鳥は鼓中にありて、その聲衆鳥に勝れたり。まだ卵から出ない、鼓の中にゐながらも、すでに、その

鳴く聲は、澤山ある鳥の中で一番勝れてゐる。それと同じ様に法華經は、諸經の中で最も勝れた最尊最勝の經である、したがってその經を聞く人の功德が深い、それを佛は格量されようとして、この五十展轉の、第五十人の功德を格量された、たつた一偈でも、一念に僅かに有りがたいと思へば、その功德は以上の様に多い。であるからこれまで一念信解の初隨喜の功德を、輕忽にしてをツた疑ひが、こゝで釋然とはれ渡つた。そこで特に是の品を隨喜功德品といふのである、と、こゝいふ風に解釋されました。

天台大師は以上の様に解釋されてをられますが、尙解らないのではないかとて、妙樂大師が、更に「文句」の「記」に、左の如くいはれてゐます。

恐クハ人謬リ解センモノ、初心ノ功德ノ大ナルヲ側ラズ、而カモ功ヲ上位ニ推リテ、此ノ初心ヲ蔑ル、故ニ今彼ノ行淺クシテ、功ノ深キコトヲ示シテ、以テ經力ヲ顯ス。

多くの人々は、そんな功德は決して初心の何等解らないものにあるわけがないと思ひ、初住の位の功德であらうなどと、功を上位に推る、そこで佛は特に行淺くして、一念信解のやうな場合、行は淺くしても、而もその功德の深いことを示されたこの品は、それによつて經力の大きなことを顯はされたのである、法華經といふものは、佛の智慧と慈悲を全部入れている、法華經の法の中に、佛の智慧と慈悲を含藏せしめてある、それだから、是を持つ功德は大きいのである、聲は法螺貝の中にはいつたなれば、大きく響いて山をも貫くといふ様な鹽梅に、初心の功德は、あたりまへは極く淺いものであるのだけれども、經力によつて功德が大きくなる、その經力とは即ち法力であります、及ぼしては、常住の佛の、その法の中に佛力が悉く含まれてゐる、ちやうど壽量品の中で例へられた良醫が、智慧と慈悲

の是好良藥を、遣使還告の使の中に殘してあると説かれてある。他の藥や、または他の手段では、救ふことが出来ない場合でも、是好良藥に於て、初めて狂子を救ふことが出来る、子供を育てる慈悲も智慧も皆是好良藥の中にはいつてゐる、そこで、この經を受持するといふことが、佛の塔を起てたり、僧を供養することよりも、根本的に重要なことである。六波羅蜜を行しても、此の法華經を忘れてしまつたなれば、僧を供養しても、佛塔を起ても、何にもならない。それが佛の分別功德品及び隨喜功德品の精神である。

それから次は第三、直ちに外の聽法の人々の功德を明すで、前は第五十人目の人の内心隨喜の功德を明されたから、今度は直ちに初めて法を説くところ即ち初會で、法を聽いた人、前の内心隨喜に對して外聽法の人々の功德といふ風にはれたのです、そこでこの第五十人の初めに直ちに往いて法を聽いた人の功德はといふと、それが

「又、阿逸多よ、若し人は是の經の爲めの故に、僧の坊に往詣り、若し坐し若し若は立ちて、須臾も聽受けなば、是の功德に緣りて、身を轉へて生るゝ所には、好しく上妙なる象、馬、車乘、珍寶の輦輿を得、及び天の宮に乘らん。」

「若し復人有りて、法を講ずる處に於て坐せるとき、更に人の來ること有らむに、勸めて坐して聽かしめ、若し座を分ちて坐せしめん。是の人の功德は、身を轉へて帝釋の坐處、若し梵天王の坐處、若し轉輪聖王の所坐へる處を得ん。」

これは、つぎの座を分ちて聽かした人の功德を説かれたものです、次に

「阿逸多よ、若し復人有りて、餘の人に語りて言はく、經有り法華と名けたてまつる。共に往きて聽くべしと。即ち其の教を受けて、乃至須臾の間も聞かんに、是の人の功德は、身を轉へて、陀羅尼の菩薩と共に一處と生るゝこ



とを得ん。利根くして智慧あり、百千萬の世に、終に瘡癩とならず、口臭からず、舌常に病無く、口も亦病無けむ。齒は垢に黒まず、黄ならず、疎ならず、亦脱落せず、差はず、曲らず、唇下り垂れず、亦褻り縮まず、鼻澁らず、瘡疹れず、亦缺け壞れず、喝み邪らず、厚からず、大からず、亦顰黒まず、諸の惡むべきこと無けむ。鼻鬪く匿からず、亦曲り戻れず、面の色黒からず、亦狭く長からず、亦窻み曲らず、一切の喜ぶべからざる相有るこゝと無けむ。唇、舌、牙、齒、悉く皆嚴しく好しからむ。鼻脩く高く直く、面貌圓に滿ち、眉は高くし而長く、額は廣く平正にして、人相具足り。世世に生れむ所には、佛に見えたてまつり、法を聞いて教誨を信じ受けん。』

以上が他を勸めて聽かした功德です、この中の陀羅尼の菩薩とあるのは、陀羅尼は先刻申したやうに、總持と譯します。即ち總持の徳を得た、位の高い菩薩で、それ等の菩薩と共なる處に生れるのであります。以上は、初會に法を聽いた人が、法會に自ら往いて聽いたといふことと、聽いてゐて座を分ちて聽かせたといふことと、人を勸めてほんの少時の間でも聞かせたといふことの功德を説かれたのです。

つぎは具さに聽いて修すで、

『阿逸多よ、汝且く是を觀よ。一人を勸みて、往きて法を聽かしむる功德すら此の如し。何に況んや、一心に説を聽き、讀誦んじ、而も大衆に於て、人の爲めに分別し、説の如く修行せんものをや。』

この中の一心に説を聽くとあるは、初品の初會開法、乃至五十展轉の隨喜で、讀誦んじとあるは、第二の讀誦品、而も大衆に於て人の爲めに分別しとあるは、第三の説法品の展教、それから六度の兼行、六度の正行をば、説の如く修行せんものをやの中に入れてあるのです。

以上が初會聽法の人の功德であります。

次は重頌もて明すで、

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく、

若し人法の會に於て、是の經典を聞くことを得て、乃至一の偈に於ても、隨喜びて他の爲めに説かむ、是の如く展轉り教へて、第五十に至らんに。』

五十人までを擧げられたのです、つぎは格量の本としての第五十人の功德です。

『最後の人の福を獲んこと、今當に之を分別なん、もし大じき施主有りて、無量の衆を供給すること、具に八十の歳を滿して、意の所欲に隨はむ、彼の衰へ老ゆる相の、髮白く面皺み、齒疎にして形枯竭せるを見つ、其の死の久しからざるを念ひ、我今當に教へて道の果を得しむ應しと。』

『道の果』とは阿羅漢のことであります。

『世は皆牢固ならざること、水の沫泡か焰の如し、汝等咸當に疾く厭離の心を生ず應しと、諸人は是の法を聞きて皆阿羅漢を得、六神通と三明と八解脱を具足さむ 最後なる第五十の 一偈を聞きて隨喜ばん 是の人の福だに彼に勝ること 譬喩をも爲すべからず 如是に展轉りて聞くに 其の福尙量無し』以上が正しく格量すです。

『何に況んや法會に於て 初に聞きて隨喜ばん者をや 若し一人をも勸めて、將き引きて法華を聽かしむること有りて 言はん此の經は深く妙にして 千萬劫にも遇ひ難しと、即ち教を受けて往きて聽くこと 乃至須臾だも聞かんに 斯の人の福の報ひを 今當に分別して説くべし 世世に口の患無く 齒疎にも黄にも黒くもあらず 唇厚く

も衰りも缺けもせず 惡むべき相有ること無けむ 舌乾きも黒くも短くもあらず 鼻高く脩く且直く 額廣くして而  
平正に 面目悉て端しく嚴しく 人に見んと喜るゝを爲む 口氣に臭穢無く 優鉢華の香 常に其の口より出で  
む。』他を勸むる功德です。

『若し故らに僧坊に詣り 法華經を聽かんと思ひて 須臾だも聞きて歡喜ばん 今當に其の福を説くべし 後に  
は天人の中に生れ 妙なる象馬車 珍寶の輦輿を得 及び天の宮殿に乗らん』  
自ら往く功德です。

『若し講法の處に於て 人に勸めて坐して經を聽かしめば 是の福の因縁もて 釋梵轉輪の座を得ん』  
座を分つ功德です。

『何に況んや一心に聽き 其の義趣を解説しつ 説の如く而修行せんをや 其の福は限るべからず』  
聽いて修する功德です。

前の品で略したる初隨喜の功德すらも斯の如くである、況して、讀誦品、兼行六度品、正行六度品、の功德をや  
と、前品に詳説せられたるそれを顧みて、五品の功德を明かにせられました、五品の中の特に初品、その五十展轉  
の功德をば説かれたのが、この隨喜功德品であります。

### 法師功德品

その次は、法師功德品であります。「和譯法華經」は、左の十二章に分つてあります。

- (一) 佛、總じて此の經の六根清淨の功德の盈縮を列ね、別して第一眼根清淨を説く
- (二) 重頌もて眼根清淨を明す
- (三) 耳根清淨を明す
- (四) 重頌す
- (五) 鼻根清淨を明す
- (六) 重頌す
- (七) 舌根清淨を明す
- (八) 重頌す
- (九) 身根清淨を明す
- (十) 重頌す
- (十一) 意根清淨を明す
- (十二) 重頌す

『爾の時、佛、常精進菩薩摩訶薩に告げたまはく、若し善男子善女人の、是の法華經を受持ち、若し讀み、若し誦

んじ、若は解説し、若は書寫さん。是の人は當に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし、是の功德を以て、六根を莊嚴して、皆清淨ならしめむ。是の善男子善女人は、父母の所生せる清淨けき肉眼もて、三千大千の世界の、内外の所有る山林河海などを見ること、下は阿鼻地獄に至り、上は有頂に至らん、亦、其の中なる一切の衆生を見、及び業の因縁と果報の生るゝ處とを悉く見、悉く知らん。』

この第一は、佛が、總じて是の經の六根清淨の功德を數へて、その盈てるは千二百あり、縮めたるは八百あるを示し、更に別して第一眼根清淨を説かれたものです。

六根清淨といふことは、どんなことであるかといふと、眼耳鼻舌身意の六が清淨になることです。それでこの六根清淨の中の眼耳鼻舌身根清淨を、是を外莊嚴といひ、意根清淨、この方は内莊嚴といひ、それを六根清淨の内外莊嚴といひます。それから此處にある八百だとか千二百だとかいふことは、これを盈縮といふので、眼鼻身は八百、耳舌意は千二百、これはどうして八百と千二百と違つてゐるのであるかといふと、全體すべて法師たるものは、妙法をば三業に持つてゐるべきものです。三業といふのは身口意の三業で、その中に又、身三、口四、意三、といふのがあります。身三は、不殺生、不偷盜、不邪淫で、口四は、不惡口、不妄語、不綺語、不兩舌、それから意三は、不邪見、不貪欲、不瞋恚です。これを十善といひ、法師は皆この十善を持つてゐなくてはならないので、その十善が各々十善を具せば百善、それが十如是を具せば千如是である。法師は自行に於ても、化他に於てもさうですから、それで二千です。それをば如來の慈悲の室、それから如來忍辱の衣、如來法空の座、この衣座室の三軌にわたしますと、六千で

す、即ち六根が各々此の六千の功德を具してゐます、それから又十法界、これも一界に十如があり、そして十法界の各々の一界毎に十界がありますから、これは百界で、百界の一々に上の如く皆十如があるから千如です。一根又六塵を具す、六塵といふのは色、聲、香、味、觸、法で、一根六塵を具する、それに千如をわたせば六千です。また吾等は眼で見ることは普通だが、見ることは眼だけではなく、又手で觸れて見るといふこともあり、聽いて見るといふことも、味ツて見るなどともいひます、それを六根互融といふ。それから盈縮といふのは、元來は、六根各々千であるのですが、それを能縮と縮める時は八百となる、或は能盈と盈して行くと千二百となる、六根の中の眼・鼻・身の三根を縮めて八百とし、耳・舌・意の三根を盈して千二百としましたから、此の六を合すると、やはり六千の功德になるのです、眼で見る八百の功德、耳根は千二百、鼻根は八百、舌根は千二百、身根は八百、意根は千二百とかうなつてゐます。即ち眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が、順序の如く、八百・千二百・八百・千二百となつてゐるのです。この耳・舌・意がどうして能盈となつてゐるかといふと、これは恩師の説であります、耳の聲を聽くのと、舌はものを味ふ方ではなく、法を説くことに主じつけ、意の一切を總くゝることにわたしますと、耳の功德に舌の功德、この二つの対象はいづれも聲塵といふ義に則することになります。それから意根の対象は法塵です。聲塵。法塵の二の徳を大切にしてある、我々の思想、それから言語、言語によつて聞き、言語において言ふ、言語と思想に一番重きを置いてあるといふことがわかります、他の方、目で見ることや、鼻でかぐことや、身體に觸れることは、それほど特に尊いといふものでない、特に尊び注意せなければならぬことは、思想のこと、それが音聲にあらはれる方のことで、此の土耳根最も利なりともいひます。そこで能盈は千二百に數へられてゐます。これについての詳しい事は、もう時間が無くな

りますから略します。

次は第二で、重頌もて眼根清淨を明す。

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく、若し大衆の中に於て、畏るゝ所無き心以て、是の法華經を説かん、汝其の功德を聽け、是の人八百の、功德ある殊勝れし眼を得、是を以て莊嚴すが故に、其の目甚も清淨ならむ、父母の所生る眼もて、悉く三千界の、内外の彌樓山、須彌及び鐵圍、並に諸の餘の山林、大海江河、水などを見ること、下は阿鼻獄に至り、上は有頂の天に至らん、其の中なる諸の衆生の、一切を皆悉く見ん、未だ天眼を得ざれ雖、肉眼の力是の如けむ。』

是は大涅槃經にも、この法華經を持つものは、肉眼といへども佛眼となすとあり、また五眼を具すともあります。肉眼のまゝ佛の佛眼で見る義であります。未だ天眼すら得てゐない、肉眼といふ最低の眼だけしか持つておらないのであるけれども、法華經を受持した功德によつて、天眼同様の力をあらはすのであります。

次は第三で、耳根清淨を明す。こゝにある常精進菩薩は對告衆です。これは等覺の菩薩ですが、こゝでいふ六根清淨といふのは、十信の位にはいると六根清淨になるとせられてゐます。そこで六根清淨を十信の位といひ、十信の位を六根の位ともいふのです。その十信の位の中の第二、又は第三が常精進です。常精進といふ位が、瓔珞經に於ては第三番目、仁王經に於ては第二番目で、第二番第三番目に常精進といふのがあります。そこでその常精進といふ菩薩を對告衆としてその六根清淨を説かれます。

『復、次に常精進よ、若し善男子善女人の、此の經を受持ち、若し讀み、若し誦んじ、若し解説し、若し書寫さむ

に、千二百の耳の功德を得べし。是の清淨なる耳を以て、三千大千の世界の、下は阿鼻地獄に至り、上は有頂に至るまで、其が中の内外の種々なる所有る語言の音聲、象の聲、馬の聲、牛の聲、車の聲、啼哭の聲、愁嘆の聲、螺の聲、鼓の聲、鐘の聲、鈴の聲、笑ふ聲、語る聲、男の聲、女の聲、童子の聲、童女の聲、法の聲、非法の聲、苦の聲、樂の聲、凡夫の聲、聖人の聲、喜の聲、喜ばざる聲、天の聲、龍の聲、夜叉の聲、乾闥婆の聲、阿修羅の聲、迦樓羅の聲、緊那羅の聲、摩睺羅伽の聲、火の聲、水の聲、風の聲、地獄の聲、畜生の聲、餓鬼の聲、比丘の聲、比丘尼の聲、聲聞の聲、辟支佛の聲、菩薩の聲、佛の聲を聞かん。要を以て之を言はば、三千大千の世界の中なる一切の内外の所有る諸の聲を、未だ天耳を得ずと雖も、父母の所生せる清淨なる常の耳以て、皆悉く聞き知らん。如是に、種々の音聲を分別ふれども、而も耳根を壞らざらむ。』

次は第四の耳根清淨の重頌で、

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく、父母の所生せる耳、清淨にして濁穢無く、此の常の耳以て、三千世界の聲を聞かん、象馬の聲、牛の聲、鐘鈴螺鼓の聲、琴瑟箏篋の聲、簫笛の聲、清淨に好しき歌の聲、之を聽くとも而も著まじ、無數の種の人の聲をも、聞きて悉く能く解了らん、又諸天の聲の、微妙なる歌音を聞き、及び男女の聲、童子童女の聲をも聞かん、山川險谷の中なる、迦陵頻伽の聲、命々等の諸の鳥、悉く其の音聲を聞かん、地獄の衆の苦痛、種々の楚毒の聲、餓鬼が飢渴に逼られて、飲食を求索る聲、諸の阿修羅等が、大海の邊に居住ひ、自ら共に言語する時、大なる音聲を出すを

も、如是に法を説く者は、此の間に安住ひて、遙に是の衆の聲を聞けども、而も耳根を壞らじ、十方の世界の中の、禽獸の鳴きて相呼ばふを、其法を説くの人、此に於て悉く之を聞かん、其の諸の梵天の上、光音及び徧淨より、乃至有頂の天なる、言語の音聲をも、法師は此に住りて、悉く皆之を聞くことを得ん、一切の比丘衆、及び諸の比丘尼の、若は經典を讀誦んじ、若は佗人の爲めに説かんを、法師は此に住まりて、悉く皆之を聞くことを得ん、復諸の菩薩有りて、經法を讀誦んじ、若は佗人の爲めに説き、撰ひ集めて其の義を解かむ。如是の諸の音聲も、悉く皆之を聞くことを得ん、諸の佛聖尊の、衆生を教へ化します者、諸の大會の中に於て、微妙なる法を演説きたまふも、此の法華を持たむ者は、悉く皆之を聞くことを得ん、三千大千の界の、内外の諸の音聲、下は阿鼻獄に至り、上は有頂の天に至るまで、皆其の音聲を聞き、而も耳根を壞らす、其の耳の總利きが故に、悉く能く分別へて知らん、是の法華經を持たむ者は、未だ天耳を得ざれ雖、但所生せる耳を用ふるにも、功德已に是の如けむ。』

次は、第五の鼻根清淨を明す。

「復次に、常精進よ、若善男子善女人の、是の經を受持ち、若は讀み若は誦んじ、若は解説し若は書寫さむは、八百の鼻の功德を成就げむ。是の清淨なる鼻根を以て、三千大千の世界の上下内外なる種々の諸の香を聞かむ。須曼那華の香、闍提華の香、末利華の香、瞻蔔華の香、波羅羅華の香、赤蓮華の香、青蓮華の香、白蓮華の香、華樹の香、果樹の香、梅檀の香、沈水の香、多摩羅跋の香、多伽羅の香、及び千萬種の和香の香、若は抹ける、若は丸めたる、若は塗香などをも、是の經を持たむ者は、此の間に住りて、悉く能く分ち別へむ。又復、衆生の香、象の香、馬の香

牛羊等の香、男の香、女の香、童子の香、童女の香、及び艸木叢林の香を別知らむ。若は近き若は遠き、所有る諸の香悉く皆聞ぐを得、分別へて錯らじ。是の經を持たむ者は此に住ると雖、亦天上なる諸天の香をも聞かん。波利質多羅拘鞞陀羅樹の香、及び曼陀羅華の香、摩訶曼陀羅華の香、曼殊沙華の香、摩訶曼殊沙華の香、梅檀沈水の種々の抹香、諸の雜華の香など、如是の等の天の香の、和合して出す所の香、聞き知らざること無けむ。又、諸天の身の香をも聞かん。釋提桓因の勝じき殿の上に在りて、五欲に娛樂嬉戯る、時の香、若は妙なる法の堂に在りて、初利の諸天の爲めに法を説く時の香、若は諸の園に於て遊び戯る、時の香、及び餘の天等の男女の身の香をも、皆悉く遙に聞かん。是の如く展轉りて乃ち梵天に至り、上は有頂に至るまで、諸天の身の香、亦皆之を聞かん。並に諸天の焼く所の香、及び聲聞の香、辟支佛の香、菩薩の香、諸佛の身の香をも、亦皆遙に聞きて其の所在を知らん、此の香を聞くと雖、然も鼻根に於ては壞らす錯らさず、若し分別して佗人の爲めに説かんと欲はゞ、憶念して謬らじ。』

以上が鼻根清淨を説かれた。

次は第六の鼻根清淨の重頌です、一々講じてゐると時間がないから、すべて講義は略します。

「爾の時、世尊、重ねて此の義を言べんと欲し、而て偈を説きて言はく、  
 是の人鼻清淨にして、此の世界の中に於て、若は香しきと若は臭き物と、種々なるを悉く聞知らん、須曼那闍提、多摩羅梅檀、沈水及び桂の香、種々の華果の香、及び衆生の香、男子女人の香を知らん、説法の者は遠く住ひ、香を聞いて所在を知らん、大勢の轉輪王、小轉輪及び子、群臣諸の宮人をも、香を聞いて所在を知らん、身に着け

たる所の珍寶、及び地の中の寶の藏、轉輪王の寶女をも、香を聞きて所在を知らん、諸人の嚴身の具、衣服及瓔珞、種々の塗れる所の香、聞かば則ち其の身を知らん、諸天の若は行み坐し、遊戯れ及神を變ずをも、此の法華を持たむ者は、香を聞きて悉く能く知らん、諸の樹の華と果實と、及び蘇油の香氣をも、經を持たむ者は此に住て、悉く其の所在を知らん、諸山の深く峻しき處に、梅檀の樹の華敷きて、衆生の中に在る者をも、香を聞きて皆能く知らん、鐵圍の山大海、地中なる諸の衆生も、經を持たむ者は香を聞きて、悉く其の所在を知らん、阿修羅の男女、及び其の諸の眷屬が、闍諤遊戯する時も、香を聞きて皆能く知らん、曠野險隘の處なる、師子象虎狼、野牛水牛の等をも、香を聞きて所在を知らん、若し懷妊せる者有りて、未だその男女と、無根と及び非人とを辨へざらんも、香を聞きて悉く能く知らん、香を聞ぐ力を以ての故に、其の初めて懷妊せるより、成就んや成就ざらんや、安樂にして福子を産まんことをも知らん、香を聞ぐ力を以ての故に、男女の所念の、欲に染みて癡け恚る心をも知り、亦善を修むる者をも知らん、地中なる衆の伏藏の、金銀諸の珍寶、銅器の盛れる所をも、香を聞きて悉く能く知らん、種々なる諸の瓔珞の、能く其の價を知ることも無きも、香を聞きて貴きと賤きと、出る處と及び所在をも知らん、天上なる諸の華の等の、曼陀曼殊沙、波利質多の樹も、香を聞きて悉く能く知らん、天上なる諸の宮殿の、上中下の差別ありて、衆寶の華もて莊嚴せるも、香を聞きて悉く能く知らん、天の園林の勝しき殿、諸の觀妙の法堂の、中に在り而娛樂るをも、香を聞きて悉く能く知らん、諸天の若は法を聴き、或は五欲を受くる時の、來ると往くと行むと坐すると臥すとをも、香を聞きて悉く能く知らん、天女が著けたる所の衣の、好じき華の香もて莊嚴しつ、周施ひて遊戯るゝ時も、香を聞きて悉く能く知らん、如是に展轉り上りて、乃ち梵天に至るまで、禪に入れるも禪

を出でたる者も、香を聞きて悉く能く知らん、光音徧淨の天より、乃ち有頂に至るまで、初生るゝと及び退没るもの、香を聞きて悉く能く知らん、諸の比丘衆等の、法に於て常に精進し、若は坐し若は經ぐり行りき、及び經法を讀誦んじ、或は林樹の下に在りて、專に精み而て坐禪するをも、經を持たむ者は香を聞きて、悉くその所在を知らん、菩薩の志堅固にして、坐禪し若は讀經し、或は人の爲めに法を説くを、香を聞きて悉く能く知らん、在る方の世尊が、一切に崇敬はれつ、衆を怒みて法を説きますをも、香を聞きて悉く能く知らん、衆生が佛の前に在りて、經を聞きて皆歡喜びつ、法の如く而て修行するをも、香を聞きて悉く能く知らん、未だ菩薩の、無漏法性の鼻を得ずと雖も、而も是の經を持たむ者は、先づ此の鼻の相を得るぞかし。』

次は第七で、舌根清淨を明すのです。  
 『復次に、常精進よ、若し善男子善女人の、是の經を受け持ち、若は讀み、若は誦んじ、若は解説し、若は書寫さむは、千二百の舌の功德を得む。若は好き若は醜き若は美き若は美からざる、及び諸の苦き澁き物も、其の舌根に在れば、皆變じて上き味と成り、天の甘露の如くにして、美しからざる者無けん。若舌根を以て、大衆の中に於て演説く所有らむには、深く妙なる聲を出して、能く其の心に入れて、皆歡喜び快樂ましめむ。又、諸の天子、天女、釋、梵、諸の天たち、是の深く妙なる音聲の、演説く所有る言論の次第を聞いて、皆悉く來りて聽かん。及び諸の龍、龍女、夜叉、夜叉女、乾闥婆、乾闥婆女、阿修羅、阿修羅女、迦樓羅、迦樓羅女、緊那羅、緊那羅女、摩睺羅伽、摩睺羅伽女たち、法を聽かんが爲めの故に、皆來りて親近き、恭敬し供養せん。及び比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、王子、宰臣、眷屬、小轉輪王、大轉輪王、七寶の千子、内外の眷屬は、其の宮殿に乗りつ、俱に來

りて法を聴かん。是の菩薩の善く法を説くを以ての故に、婆羅門、居士、國內の人民は、其の形の壽をば盡すまで、隨ひ侍りて供養せん、又、諸の聲聞、辟支佛、菩薩、諸の佛は、常に樂つて之を見そなはさむ。是の人の在る所の方面には、諸佛、皆其の處に向ひて法を説きたまはむ。悉く能く一切の佛法を受持ち、又、能く深く妙なる法音を出さむ。』

次は第八の舌根清淨を重頌もて明すで、

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく  
是人舌根淨くして、終に悪しき味を受けず、其が食噉ふ所有るは、悉く皆甘露と成らん、深く淨き妙の聲以て、大衆の於に法をば説かむに、諸の因縁と喩とを以て、衆生の心を引導せば、聞者歡喜びつ、諸の上じき供養を設けん、諸の天龍夜叉、及び阿修羅の等、皆恭敬の心を以て、而ち共に來りて法を聴かん、是の說法の人、若し妙なる音を以て、三千界に徧滿たさんと欲はど、意の隨に即ち能く至らん、大小の轉輪王、及び千子眷屬は、合掌し恭敬の心もて、常に來りて法を聽受けん、諸の天龍夜叉、羅刹鬼舍闍も、亦歡喜の心を以て、常に樂ひて來り供養せん、梵天王と魔王、自在と大自在など、是の如き諸天の衆も、常に來りて其の所に至らむ、諸の佛及び弟子は、其の說法の音を聞き、常に念ひを而て守護しましつ、或時は爲めに身を現したまはむ。』

次は第九の身根清淨を明すで、

『復、次に常精進よ、若善男子善女人の、是の經を受持ち、若は讀み若は誦んじ、若は解説し、若は書寫さむは、八百の身の功德を得て、清淨なる身の、淨瑠璃の如くにして、衆生の見んと喜ふところなるを得む。其の身の淨き

が故に、三千大千の世界の衆生の、生ずる時と死する時、上と下と好きと醜きと、善き處惡き處に生ずると、悉く中に於現れん。及び鐵圍山、大鐵圍山、彌樓山、摩訶彌樓山等の諸の山王、及び其の中の衆生悉く中に於現れん。下は阿鼻地獄に至り、上は有頂に至るまでの所有もの及び衆生、悉く中に於現れん。若は聲聞、辟支佛、菩薩、諸佛の說法も、皆身の中に於て其の色像を現さむ。』

次は第十の身根清淨の重頌です。

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく

若し法華經を持たむには、其の身甚も清淨に、彼の淨瑠璃の如くにて、衆生皆見んと喜はむ、又淨く明かなる鏡の、悉く諸の色像を見すが如く、菩薩は淨き身に於て、皆世の所有ものを見ん、唯獨り自ら明了にして、餘人の見ざる所ならむ。三千世界の中の、一切の諸の群萌、天人阿修羅、地獄鬼畜生、是の如き諸の色像も、皆身の中に於現れん、諸天等の宮殿は、乃ち有頂に至らむ、鐵圍及び彌樓、摩訶彌樓山の、諸の大海水等、皆中に於現れん、諸の佛及び聲聞、佛子菩薩等の、若は獨り若は衆に在りて、法を説くこと悉く皆現れん、未だ無漏法性の、妙なる身を得ずと雖、清淨なる常の體を以て、一切のものの中に於て現れん。』

以上は眼耳鼻舌身の清淨を説かれました、次は第十一の意根清淨を明すで、之は一番大切な處であります。

『復、次に常精進よ、若し善男子善女人の、如來の滅しぬる後に是の經を受持ち、若は讀み若は誦んじ、若は解説し、若は書寫さむは、千二百の意の功德を得ん、是の清淨なる意根を以て、乃至一の偈一の句をだも聞かば、無量無邊の義に通達らん。其の義を解り已りて、能く一の句一の偈をも演説くこと、一月、四月、乃至一歲に至らんに、

諸の説く處の法は、其の義の趣に隨ひて皆實相と相違ひ背かず、若は俗間の經書治世の語言、資生の業等を説か  
 んも、皆正法に順はむ、三千大千世界なる六趣の衆生の、心の行ふ所、心の動き作す所、心の戯れ論、所皆悉  
 く之を知らん。未だ無漏の智慧を得ずと雖、而も其の意根の清淨なること此の如けむ、是の人の思惟り籌量り、言  
 説く所有らんは、皆是佛の法にして、眞實ならざること無く、亦是先佛の經の中に説ける所ならむ。」  
 此の中に、世法開會の本據があります。即ち左の經文です。

「諸所説法、隨其義趣、皆與實相、不相違背、若説俗間經書、治世語言、資生業等、皆順正法。」  
 「諸所説法」、是は科學や哲學や文學などがこの中にはあります。「若説俗間經書」これは道德、「治世語言」これは  
 政治法律であります。「資生業等」、これは實業、經濟、「皆順正法」とは、これ等の科學哲學文學倫理、道德、政治  
 法律、經濟等々のあらゆる文化も、意根清淨によつて、悉く皆此の法華經の正法の意に隨ふことになる、又法華經の  
 道理と相違ひ背かず、悉くそれに一致するやうになつてしまふのであります、つぎは第十二の意根清淨の重頌  
 です。

「爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく、  
 是の人意清淨に、明利して穢濁無く、此の妙なる意根以て、上中下の法を知る、乃至一の偈をだも聞かば、無量の  
 義に通達りつ、次第に法の如く説くこと、月四月より歳に至らん、是の世界の内外なる、一切の諸の衆生、若は天  
 龍及人、夜叉鬼神の等が、其の六趣の中に在りて、念ふ所若干種のこと、法華を持つ報には、一時く皆悉く知ら  
 ん、十方なる無數の佛の、百福莊嚴の相おはして、衆生の爲に法を説きたまふを、悉く聞きて能く受持ち、無量の

義を思惟りつ、法を説くこと亦量無くして、終始忘れ錯らじ、法華を持つを以ての故に、悉く諸法の相を知り、義  
 に隨ひて次第を識り、名字と語言に達りつ、知れる所の如く演説かん、此の人の説く所有るは、皆是先佛の法なら  
 む、此の法を演ぶるを以ての故に、衆に於て畏るゝ所無けむ、法華經を持つ者は、意根清淨きこと斯の如くならむ、  
 未だ無漏を得ざれ雖、先づ如是の相有らん、是の人此の經を持ち、希有の地に安住ひて、一切の衆生の爲めに、  
 歡喜ばれ而愛敬はれ、能く千萬種の、善じき巧の語言を以て、分別し而て演説かんこと、法華經を持つが故ぞかし。」  
 「觀心本尊鈔」にあります有名なる御文、「天晴れぬれば地明かなり。法華を識るものは世法を得べきか」。それは、世  
 法開會でありまして、それは此の意根清淨から來て居ります。

六根清淨になると十信の位にはあります。この十信の位とはどういふものであるかといふと、煩惱を無くする方  
 は、阿羅漢様と同じく、見思の煩惱を無くした、つぎに塵沙の煩惱を無くした、たゞ無明の煩惱、それを無くするこ  
 とまでは未だ出来ないけれども、無明の煩惱を働かないやうに調伏してゐる、かういふ位をば十信の位といひます、  
 それで法師品に五種の法師といふものも、此の位を以て最上位にしてあります。法華經の弘通者としての最上の位が  
 これである。それで最上の位が之であれば、六根清淨にならなければ、法華經の最上の位にいかないものであるかと申  
 しますと、それは必ずしもそうではないのです。事實に於ては、六根清淨、十信の位を得た法華經の行者は、南岳大  
 師、唯一人であるとせられてゐます。それでは、どういふのが法華經の修行者として必要なのであるかといひますと、  
 觀行五品の位、初信初品の名字の位といふ此の二つなのです。この時は六根清淨の位は相似即の位といふ、ちようど  
 佛様に似た位、無明煩惱を無くしてをらないけれども、佛様の悟りの實際は一分も眞に得た者ではないのですが、そ



れに相似た位である。その下が分別功德品に説かれたる五品觀行の位、この五品觀行の位は、天台大師、傳教大師です、それでは日蓮聖人は、どういふ位であるかといふと、自ら初隨喜の位、名字即であると仰しやられてゐます。初隨喜品の位である。そうすると、歴史が下つて来て、法華經の教理がいよく發展すると共に、段々修行者の位が下になつて来るじやないか、弘通者は法華經の代表者であるが、代表者は、法華經にさういふふうに説いてあるのなれば、六根清淨を皆得た方がよいのではないかと申しますと、それはその時代の法華經の代表者といふものは、一面に又その時代の衆生の代表者でなければならぬのです、時代の衆生の出來ないやうなことをしては、決して代表者にはならないのです。そこで像法時代には、曩の六根清淨や、それから或は五品觀行の位、さういふものが實行し得る時であつたのですから、南岳、天台、傳教等の人は、六根又は五品の位を示されました。末法の時代には、さういふものは事實は實行出來ない時代で、原理としてはありましても、事實としては出來ないといふ、その末法は、初隨喜の位の中の初心の位が一般の信行者で、後心の位は日蓮聖人なのです。日蓮聖人は、初隨喜の位の中の後心の位です。こんなふうには、位が段々低くなつてくるといふことは、どういふ譯であるかといふと、之については、矢張り天台大師は、左のやうなことをいつておられます。

『教、彌よ實なれば、位、彌よ下る。』

それでちやうど一番最後の末法の時代の、一番下な人間、さういふ下位の所有人間を救ふとしたなれば、その代表者の位は、その教そのもの、深い高い意味が示されるほど、その行者の位は下くなるのです、理想からいつたなら、どんな悪人でも、どんな最低の人間でも、救ふことが出来るやうにならなくてははいけないのです、最高の山の水が、最

低の溪に下るが如く、教に深い高い根據があつたなれば、その教法は、難信難解とありますから、矢張り難しい教でなければならぬ筈です。それはその教の中に、佛の慈悲や智慧の全部がはいつてゐるのであるからです、しかもまたそれを、實行するといふ事になれば、一番簡単な方法で、どんな人間でも實行することが出来るやうな修行でなくてはならないのです。それで、題目を唱へるといふことが、一番やさしいことで、その容易いことの中に、一番功德利益が收められてある、けれどもその修行はむづかしい、但し佛を絶対に信する心さへあれば、實に易しい。だがその信の心がなければ、また甚だむづかしい。それで末法の時代に於ての代表者は、あたかも最高の山の水が最低の溪に下るやうに、最上の位の上行菩薩が出てこられる。本地は一番高いが、垂迹の地は一番低い、初隨喜の位に出て来て垂迹された、そしてその日蓮聖人の御修行は、この次の常不輕菩薩品に、ちやんと出て來るのです。以上の分別隨喜、法師の三品の實證が、次の常不輕品で、昔の因縁話として説かれてあります、それは滅後末法にやはり、この常不輕品にあるやうな人が出て來て修行する、さういふことを豫言的に説かれたものでもあります。以上をもつて法師功德品を終り、本日の講義を終ります。

昭和十五年十二月二十五日印刷  
昭和十五年十二月三十日發行



正價金貳圓五拾錢

不許  
複製



法華經十講(中)

著作者

山川智應

發行者

藤ヶ崎芳助

印刷者

寺井藤左工門

東京市足立區日出町一丁目二十六番地

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所

東京市足立區日出町  
一丁目二十六番地

信人社

電話足立二九〇五  
振替東京四一八九九

大日本印刷株式會社印刷

山川智應博士著一覽信人社取次

和譯法華經	法華思想史上の日蓮聖人	觀心本尊抄講話	開目抄講話	種々御振舞御書略註	日蓮聖人研究 第一卷	日蓮聖人傳十講 上下卷	日蓮聖人と耶蘇	日蓮聖人と親鸞	日蓮聖人と法然
袖珍版一〇〇頁 送料拾五錢	正菊版八〇〇頁 送料參拾參錢	正菊版六二〇頁 送料參拾參錢	正菊版五五〇頁 送料貳拾貳錢	正袖珍版二〇〇頁 送料貳拾錢	正菊版各五〇頁 送料各壹圓貳拾錢	正四版各五〇頁 送料各壹圓拾五錢	正四版二〇〇頁 送料及版八拾錢	正四版二〇〇頁 送料及版八拾錢	正四版二〇〇頁 送料及版八拾錢

日蓮聖人の實現の宗教 〔本門戒壇論〕	本門本尊論	觀心本尊抄法體段正義	原文對照法華玄義釋籤會本 〔第一卷既刊〕	日蓮聖人の批判原理	三大秘法概說	立正安國論總釋	御遺文尊問題明辨	支那事變と東亞興隆
正四版三六〇頁 送料貳圓五拾錢	正菊版四七〇頁 送料及版壹圓八拾錢	正菊版一八〇頁 送料拾五錢	正四倍版二〇〇頁 送料參圓參拾錢	正四版八〇頁 送料參拾錢	正菊版七五頁 送料六拾五錢	正菊版六拾六頁 送料六拾六錢	正菊版九拾一頁 送料四拾六錢	正四版八拾五頁 送料參拾五錢

終